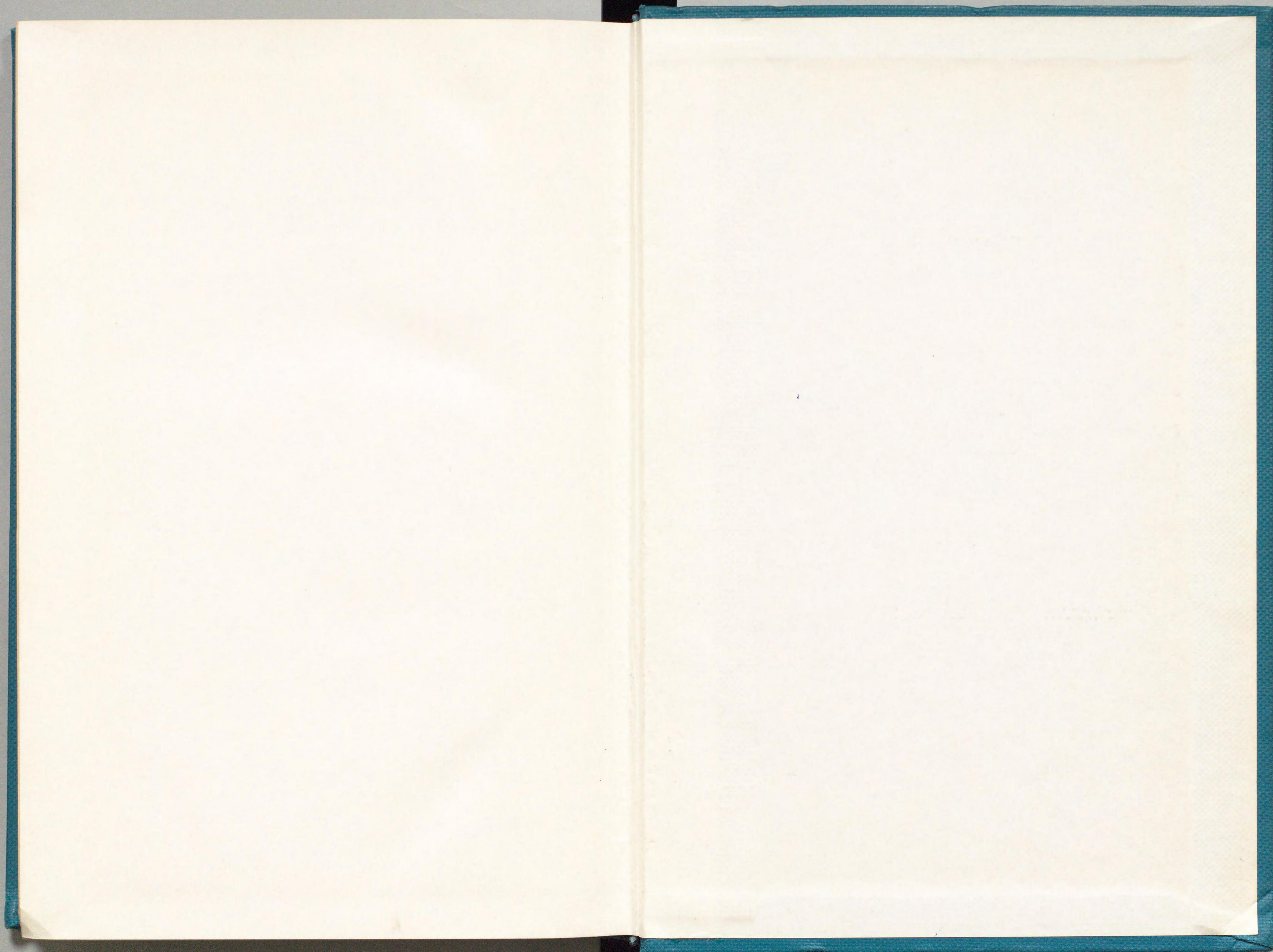


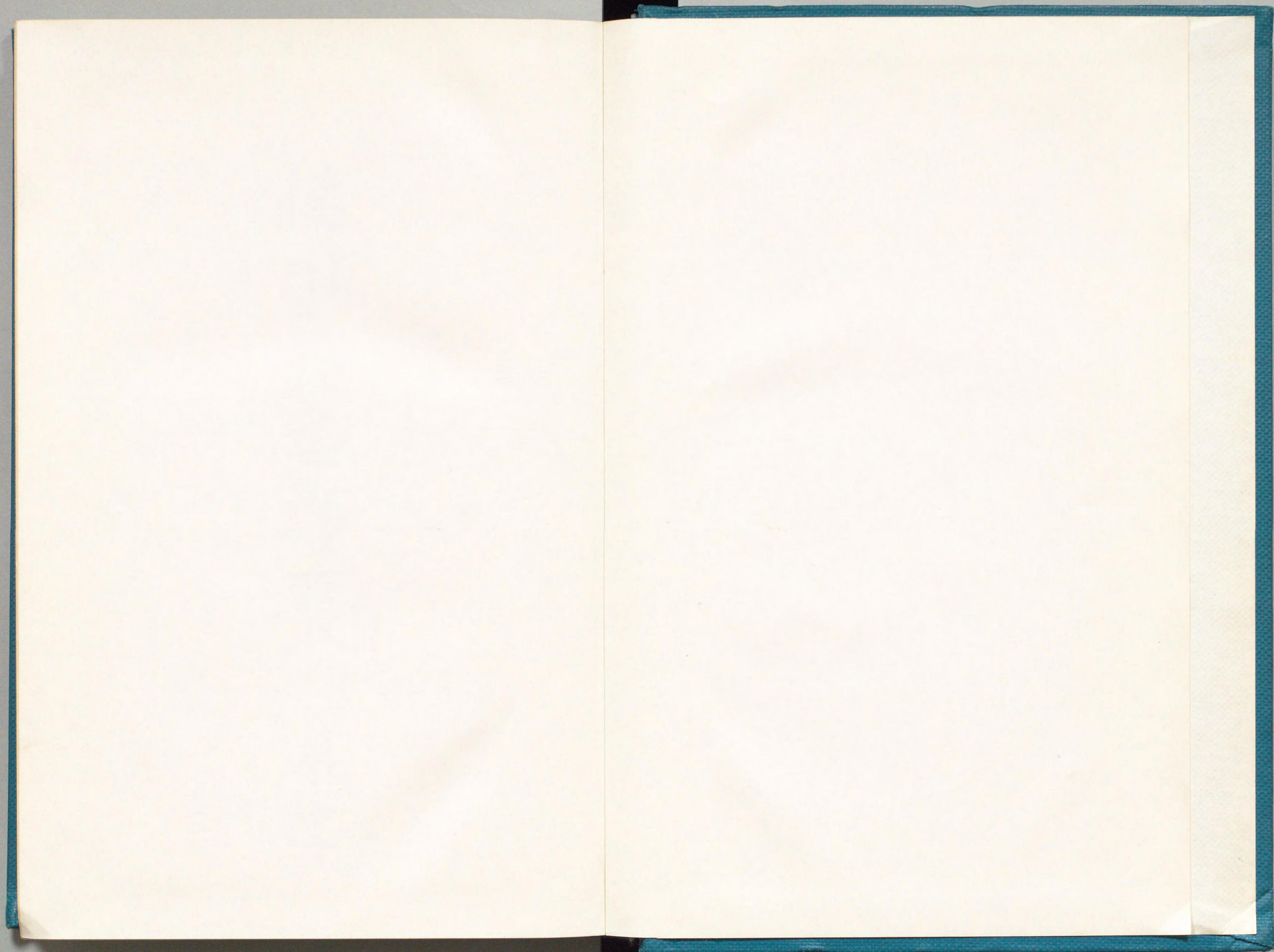


918.5
To426
K



00213649



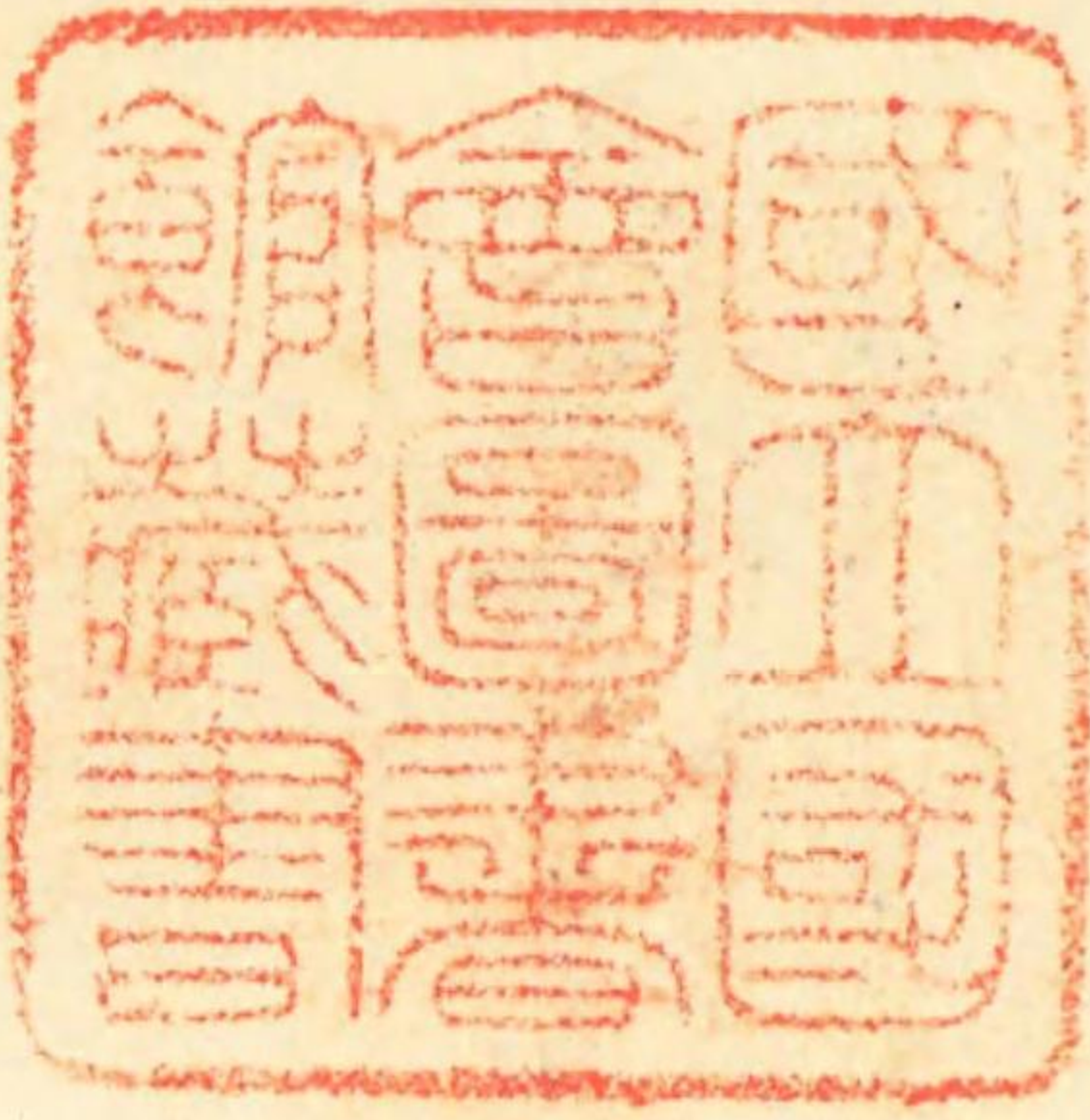


215274

徳川文藝類聚

第十三

918.5
T0426
K



213649

徳川文藝類聚第十二 評判記

例言

一、本編には、役者評判記に擬して戲作せられし稗史、名物、能樂より古錢、遊女、相撲等に至るあらゆる異種評判記二十五種四十六卷を收めたり。蓋し役者評判記は、明暦二年に梓行せられし『役者の噂』を最古とし、元祿時代に至るまでは、時に刊行せられしに過ぎざりしが、元祿十二年に至り、京都八文字屋より『役者口三味線』を出版して大に行はれしより、年々版行絶えずして明治維新に及べり。されば本編收載の異種評判記は、其の外形より内容に至るまで、彼の八文字屋版の評判記に擬したるもの多きも亦怪むに足らざるべく、今参考として、八文字屋版以前の役者評判記及び稍や其の體を異にしたるものをも併せて收載せしは、聊か其

例言

の變遷を知らしめんごてなり。

一、戲作評判花折紙三卷 本書は、洒落本全盛期の創作百七十一部を批判せしものにして、享和二年の版本なり。作者十文字舎外二名は、何人の匿名なるや未詳。

一、繪草紙
評判記

菊壽草三卷 本書は狂歌に有名なる蜀山人の作にして、天明元年出版の黄表紙四十七部を批評せるものなり、刊行年月を記さざれども、恐らく天明二年の版本なるべし。

一、稗史
評判

岡目八目一卷 本書も蜀山人の作にして、天明二年の黄表紙四十八部の評判記なり。書中山東京傳作『御存知商賣物』を激賞し、擢んで總卷軸の榮位に推せしより、京傳の名聲大に發するに至りしといふ。天明三年の版本なり。

一、江戸土産一卷 本書は、天明四年出版の黄表紙三十八部を批評せるものにして、天明五年の版本なり。作者未詳。

一、三題噺作者評判記一卷 文久年間春の屋幾久及び好文舎花兄等の主催にて、當時の通人間に三題噺大に行はれたり。本書は其の素人落語家の評判記にして、文久三年の版本なり。

一、樂屋
興言

鳴久者評判記一卷 本書は、悪摺の評判記にして、慶應元年の版本なり。悪摺とは、元治慶應時代より明治初年に至る間、通人及び文人社會に行はれたる一種の落書にして、もご友人の非行を諷刺して、其の改悛を促す用に供せしものなりしが、終には興に乗じて人身攻撃を主とするに至れり。もごより祕密に出版して知人間に配附せしものにて、多く瓦版を用ひたれば、其の印刷醜惡を極めたるより、何時しか悪摺と呼ばるゝに至りしものなり。本書の作者悪文舎他笑は、何人の匿名なるや知るべからざるも、巧みに悪摺作者の内祕を託きて餘蘊なし。

一、犬夷評判記三卷 本書は、有名なる曲亭馬琴の傑作たる『南總里

見八犬傳及び「朝夷巡島記」の二書を、三枝園主人(櫟亭琴魚)が役者評判記に擬して批評し、更に其の批評に就いて馬琴の答述を加へしものにして、文政元年の版本なり。

一、風流眞顯記一卷 本書は、繪本太閤記中の山崎合戦に活躍せる人物を批評せし一種の歴史人物評なり。從來寫本にて行はれし爲め、傳寫の誤謬尠からざれども、善本を得ざりしを以て、訂正するること能はざりしは、遺憾とするところなり。

一、評判筆果報一卷 本書は、六樹園側の狂歌師の評判記にして、文化五年の版本なり。作者未詳。

一、評判鶯宿梅一卷 本書は、安永年間に於ける江戸操二座の淨瑠璃太夫、三味線引、人形遣の評判記にして、天明元年の版本なり。

一、浪花其末葉一卷 本書は、延享年間難波に於ける高名の淨瑠璃太夫より人形遣に至る評判記なり。延享四年の版本なれども、作

者未詳。

一、能評判うそ咄二卷 本書は、八文字屋版以前の役者評判記に擬して、元祿年間に於ける能狂言太夫及び脇師を批評したるものなり。作者未詳。

一、新版歌仙すまふ評林一卷 本書は、他の評判記類と聊か其の體を異にし、寶曆年間に於ける江戸幕内力士を將棊の駒に擬して位を附け、批評に代ふるに、其の名に因みし俳句を以てせしものなり。寶曆六年の版本なれども、作者未詳。

一、當世名家評判記二卷 本書は、天保年間江戸に於ける高名の儒家詩人書家等の評判記にして、天保五年の版本なり。

一、冬至梅寶曆評判記四卷 本書は、寶曆年間江戸に於ける高名家を批評せるものにして、刊行年月を記さざれども、寶曆年間の開版たるや疑なし。

一、學者角力勝負附評判一卷 題名の如く、蕃山、徂徠、白石、仁齋等の大家を左右に分ちて、其の取組に擬して批評したるものなり。刊行年月未詳。

一、諸宗評判記三卷 本書は、佛教各宗の評判記にして、天保四年の版本なり。

一、評判千種聲一卷 本書は寛政七年の版本にして、當時評判記の流行につれて、最も多く起りたる擬人法によりて、諸蟲を役者に見立し評判記なり。作者蜂萬舍自蟲は、何人の匿名なるや未詳。

二、富貴地座位三卷 本書の上中巻は、安永年間三都に於ける名物の位附けにして、下巻は同時代難波に於ける名物を、枕草紙に擬して批評したるものなり。安永六年の版本なれども、作者未詳。

二、京都名物水の富貴寄一卷 本書は、富貴地座位に位附けせられし京都名物の評判記にして、同書の續編とも謂ふべきものなり。安永

七年の刊本なれども、作者未詳。

一、五十三次江戸土産一卷 題名の如く、東海道五十三次の評判記にして、天明二年の版本なり。

一、寶貨雋一卷 本書は、寛政二年の版本にして、宋漢蜀の古錢より高麗古錢の評判記なり。

一、娘評あづまの花軸一卷 本書は、明和年間江戸に於ける町藝者の評判記にして、刊行年月を記さゞれども、明和年間の開版たるや疑なし。

一、赤烏帽子一卷 本書は、寛文年間伊勢古市座に於ける野郎の評判記なり。後序によれば、當時京都に於て野郎嚴禁の爲に、古市に流浪せし時の評書なるが如し。寛文三年の版本なり。

一、吉原丸鑑六卷 本書は、題名の如く、享保年間吉原に於ける太夫、格子より散茶、うめ茶に至るまで、微細に評判したるものにして、

當時の北廓鳥瞰圖とも稱すべきものなり。享保五年の版本にして、挿繪は當時浮世繪師として有名なる羽川珍重の筆なり。一、本編の編纂に就いては、朝倉無聲、田中成美、三田村鳶魚諸氏の助言に負ふ所多く、又校訂に就いては主として米光關月氏を煩したり。爰に掲げて謝意を表す。

大正三年十二月

國書刊行會識

徳川文藝類聚第十二 評判記

目次

戲作評判花折紙	一頁
繪草紙 評判記 菊壽草	三五
神史 評判 岡目八目	五五
江戸土産	六七
三題噺作者評判記	七九
樂屋 興言 鳴久者評判記	九六
大夷評判記	一二二
風流眞顯記	一五八
評判筆果報	一九九

評判鶯宿梅……………二三五
 浪花其末葉……………二四七
 能評判うそ咄……………二六四
 新版
 歌仙すまふ評林……………二七五
 當世名家評判記……………二八〇
 冬至梅寶曆評判記……………二九六
 學者角力勝負附評判……………三二三
 諸宗評判記……………三二二
 評判千種聲……………三四一
 富貴地座位……………三五四
 京都
 名物水の富貴寄……………三七七
 五十三次江戸土産……………三九二

目次終

寶貨雋……………四〇五
 娘評
 判記あづまの花軸……………四一五
 赤烏帽子……………四二〇
 吉原丸鑑……………四二八

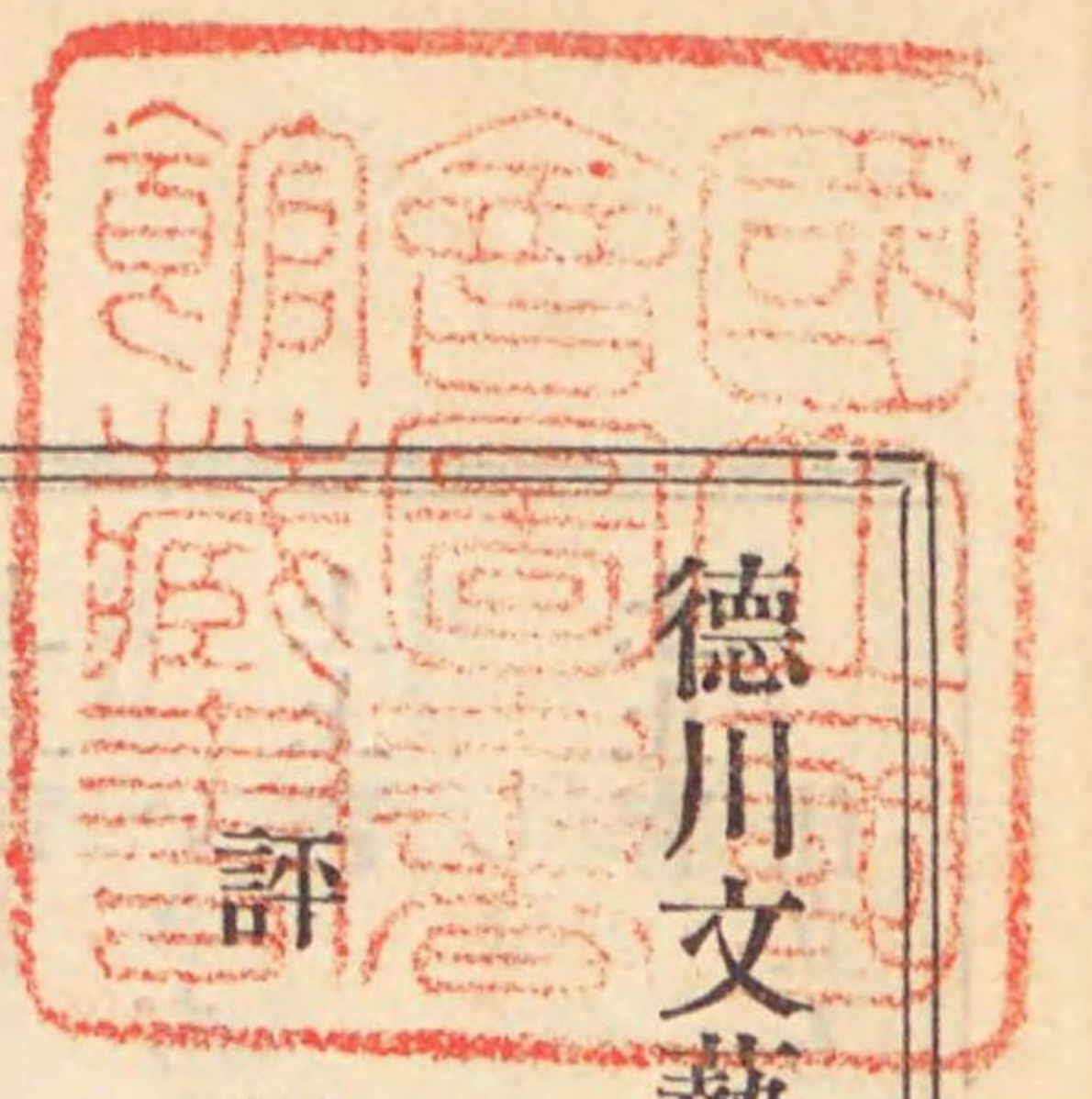
目次

吉原大船場……………四二八

寄場三夜鐵醬水……………四二〇

居風呂場素面色……………四一五

妙法蘭若素足詣……………四〇五



徳川文藝類聚第十二

評記

戲作評判花折紙卷之上

狂言筋は

二階髪洗廿七日
山谷堀紙屑洗橋

小道具 三角雪
景物 八朔雪

狂言筋は

身拵部屋紅葉袋
海晏精舎楓葉狩

小道具 日覆月
景物 廿六夜

狂言筋は

寄場三夜鐵醬水
富岡八幡山三鐘

小道具 步行板
景物 棧道梁

狂言筋は

居風呂場素面色
妙法蘭若素足詣

小道具 雨音車
景物 龍骨車

戲作評判花折紙卷上

一

戯作評判花折紙卷之上

△總卷頭

○見立名物紙によする左のごとし、

極上上吉 傾城虎之巻 金魚作

ぬけめのないだんごりの檀紙、

△立役之部

極上上吉 四十八手戀所譯 戲作

江戸中へはなをやつた小菊、

上上吉 三教色 三和作

趣向もうつりのよい美濃紙、

上上吉 二日醉大入蓋 萬象作

おもしろみはあつひせんくわ、

上上吉 惠比良梅 一九作

いきぢを立ぬくおとこのみちのくがみ、

上上吉 客衆一華表 振鷲作

しよてからしまい迄にぎやかなみなと紙、

上上吉 野良玉子 一九作

仕立も玉子色の唐はんびやうし、

上上吉 銚子戯語 大飯喰作

よいところは功者な作者のちから紙、

上上吉 南客文集 路錢作

からへ二りちかひしやれのとうし、

上上吉 格子戯語 振鷲作

向ふの人の聲もかねと引とのあいがみ、

上上吉 客衆肝照子 京傳作

よく穴をさがすくるわの宇田紙、

上上吉 廓大帳 同作

まつ崎迄ゆかれたところは酒の杉原、

上上吉 眞女意題 萬象作

おまつりのうちはいつでもしけがみ、

上上吉 通仁枕言葉 歸橋作

やぼでないゆるきせいしつのはらほ、

上上吉 美地蠣殻 同作

あげ汐に猪牙でのつきる水玉がみ、

上上吉 居續借金 同作

けふも流してこゝにいためがみ、

上上吉 甲驛新話 馬鹿人作

いつでも馬のおほひどころの西のうち、

上上吉 契情二筋道 谷我作

末のやくそくもなじんだ上田がみ、

上上吉 吉原楊枝 京傳作

すつぱりきれいにすり付た襟がみ、

上上吉 會我糠袋 唐洲作

ろうかれんじにあるも中折、

上上吉 匂ひ袋 艶二作

さしになる客をよぶは胸にふうじがみ、

上上吉 色講釋 一九作

うぬぼれをいふ客はしりにしき紙、

上上吉 文選臥坐 狂樂湖洲、
谷我作

名代にあがるもゑんのはしきらす、

上上吉 辰巳之園 寐言作

火ともし頃にあがるうといふ六ッ半紙、

上上吉 賣花新驛 似山作

朝から晩迄ひつきりのない馬ふんし、

上上吉 取組手鑑 關東米作

こんたんはうまみの有る砂糖がみ、

上上吉 遊儂窟烟花 薄倖作

狂歌の通人ながらさしづめしきし、

上上 郭通遊子 藍江作

行がけに南鏡ときりかへる小はんし、

上上 深川新話 朱樂作

いきは此土地のはたよし、

上上 疇昔茶唐 艶爾樓作

江戸ッ子だけいきぢを張子がみ、

上上 良夜静騒 藍川作

三枚の大きいそぎでひけの間に合、

上上 翁會我 振鷲作

鶴の丸と木瓜の紋をちらしたからかみ、

上上 宵之程 谷我作

大さんばしは大汐の水戸半切、

上上 美南土寐住 色主作

やりつばなしにはしやぐちよこ紙、

上上 深川手習雙紙 茂内作

廓數可佳妓 鳳雨子

上上 面美多通身 廓通作

大通契語 鈴成作

上上 ニヤンノイダ馬吞 一上 鯉池全盛噺 雲樂

一上 品川楊枝 晉交 一上 滿和志枕 左英

一上 馬糞夜話 一上 契情徳噺 魚京
 一上 起原情語 蓬蕩 一上 青樓眞廓誌 無名
 大上上吉 八算總籬 戲 作
 くるわのことは作者が大ひろ、
 △實惡之部
 上上吉 白川夜話 京傳 作
 墨付のよい所が手ががらな奉書、
 上上吉 和唐珍解 三和 作
 丸山までのみらがなんもく、
 上上吉 伊賀越合羽籠 歸橋 作
 がういふことがむかしあつたささがみ、
 上上吉 郭中掃除 福輪 作
 所はしれた名におふ札がみ、
 上上吉 遊里會談 歸橋 作
 花藝のじやうぶな所は岩城、
 上上吉 寸南破良意 一片 作
 寐過して朝直しのぎんがみ、
 上上吉 辰巳婦言 三馬 作
 おいしやのしやれは藥袋紙、
 上上上 傾城買指南所 金魚 作

女郎買の赤札は是から出ます紅唐紙、
 上上吉 自惚鏡 振鷺 作
 ふられてよちう鼠半切、
 △敵役之部
 上上吉 通氣粹語傳 京傳 作
 口からでほうだいにしやれをはくし、
 上上吉 白狐通 谷我 作
 ろちがべるから早くとまりを鳥の子、
 上上吉 夜半茶漬 京傳 作
 ほたて貝がにこぼれて中ひろ、
 甲子夜話 谷我 作
 さしづめ大こく様のつち間に合、
 上上吉 青樓五雁金 梶人 作
 ひやう判がよくて御手柄のほご村、
 上上吉 息子部屋 京傳 作
 明けがたにかけられて氣がのり入、
 上上吉 買譚客物語 三馬 作
 ひけすぎにつきに来るあぶらがみ、
 上上吉 闇明月 あつ丸 作
 時刻をよくふり分てかいた見世出しの鈴紙、

上上 穴知鳥 東朝 作
 あんまり酒をのむもうらがみ、
 上上 見通三世相 振鷺 作
 瀧本ようて文はきれいな布めがみ、
 上上 南江驛話 比左古 作
 表だにかたみのある日向半切、
 上上 南閨雜話 夢中 作
 あさ日のけしきの地がみ、
 上上 廓中奇談 淡海 作
 新造が片言で人をよふしとき、
 上上 驛者三友 記南子 作
 まはしがあて氣をもみがみ、
 上上 女肆三人生醉 三馬 作
 どれくも生醉ならくだを巻紙、
 上上 見番太平記 ナカキチ 作
 迎のせんかうは八寸、
 上上 浮世四時 紫蘭 作
 かねはうへのか淺草がみ、
 上上 龍虎問答 歸橋 作
 東北のあらそひはてんくのきすき、

上上 廓節用 三馬 作
 三下りでさはぎのとつちりがみ、
 上上 猶射羅子 馬鹿輔 作
 上上 猶之卷 谷我 作
 上上 通人講釋 強異軒 作
 上上 學通三客 冬藏 作
 上上 中洲雀 無玉 作
 上上 金錦三調傳 五猿 作
 上上 一目土堤 内新好 作
 上上 中洲花美 鳶鳥堂 作
 上上 風俗砂拂傳 隨松子 作
 上上 驛路雀 逸我 作
 上上 南品傀儡 品川呼子鳥 鷺鳥 作
 上上 新土地來毛牛 舍 舍 作
 上上 多住餘字辭 不埒 作
 上上 大通多名於呂志雲樂 俗談諺草 多田 作
 上上 多荷論 茶に 當世猪の子 無名 作
 上上 其アンカ 中橋 作
 目立た所でつかふはいかして遣ふ金かみ、
 △親父方、花車形之部

至上上吉 聖遊廊 無名氏
 風諫のしやれ本は三百篇の詩箋、
 上上吉 一事千金 金魚作
 此ほんでお名の高ひ鼻がみ、
 上上 傾城極秘卷 無茶作
 いつも二三人はつれるかみ子、
 上 契情晝世界 放蕩作
 一上 樂女好子 山蝶 一上 胡蝶夢 犬花子
 △道外方之部
 止上吉 道中粹語錄 馬鹿人作
 國ことばでうその事をちくよう、
 止上吉 福神粹語錄 萬象作
 あいかたを鯛のようにかゝへたるゑびすがみ、
 止上 世説新語茶 馬鹿人作
 加役でいしやうはいつもおぐら半紙、
 止上 卯地臭意 鐘水庵作
 くさみがぬけたしぶかみ、
 止上 惠世物語 馬香作
 古市の女郎はいくたりでも取かへがみ、
 止上 根津見衣 伍面作

一上 廣街一寸間遊 戲笑 一上 山下新談 アマイ
 一上 通志選 里南錄 一上 公大無太言 タアイン
 一上 郭中契語 朱樂 一上 通俗子 渡橋
 △若女形之部
 穴止上吉 將基啓蒙 戲 佳
 おいらんのきりやうはうつくしい薄よう、
 止上吉 般志天話 戲 作
 うつくしいお顔は香爐峯の雪とみすがみ、
 止上吉 郭文章 戲 作
 なじみだけふみにうまことこの有なす、
 止上吉 深川拜見 歸橋 作
 ほり物をけした跡が繪はん切、
 止上吉 意氣之口 振鷺 作
 いきなどころは此土地のいろがみ、
 止上吉 粹町甲聞 馬鹿人作
 つき出しまではひつこんでゐるこすぎ、
 止上吉 風俗通 如琴 作
 手の有おんなの心いきはごういふもん唐紙、
 止上吉 婦美軍紫軒 歸橋 作
 江戸の水にあつてすすき通るよしのがみ、

上上上 妓女皮肉論 金魚作
 ごきりやうはいづれもびいごろがみ、
 上上 廓癖 谷我作
 たゝみざんでぬしをまつばがみ、
 上上 定家文庫 戲 作
 かずのあるは五り勘定のきよくはんし、
 上上 中街艶談 戲家作
 ようしやはらつてみじまいの口こうせい、
 上上 松登妓話 貢 作
 さらりつとさきい事はくすひき、
 上上 言告鳥 谷我作
 折ふしなげらるゝまくらがみ、
 上上 廓之櫻 同 作
 やり手の心いきは息子のさらさがみ、
 上上 比翼紫 嬉丸作
 外題の名におふむらさきのはつ元結がみ、
 上上 二ッ蒲團 水吉作
 山下珍作 馬乎人作
 音羽瀧 無名作
 突當富魂短 西奴作

上 契國策 花原 作
 一上 陽臺遺篇 ウケシヤ 一上 異見規矩 吳綾軒
 一上 飛美佳女顔 里舟 一上 傾城初噺 百馬
 一上 面美知之理 南朝 一上 燈籠辨 紫蘭
 一上 樓妓選 東洞 一上 青樓八詠 懶臥
 一上 四ッ之谷 曾滿人 一上 柳巷三開笑 金箔
 一上 深彌滿於呂志 可鳴 一上 名所かゝみ名隣 紅月樓
 一上 名寄短歌 勝丸 一上 假根草 戲 作
 卷軸
 上上吉 虎溪三笑 戲 作
 髪をすいてもちよいとかけける丈長、
 上上 △若衆方之部 穴好 作
 芳深交話
 上 یشやうはきかざつた吳ふくがみ、 鐘西翁 作
 立々經
 一上 月花餘情 戲笑 一上 當世左様茶 新五三
 △色子、子役之部
 上上 娼妃地理記 喜三二 作
 傾城鐮 京傳 作
 湖都洒美撰 喜三二 作
 新造圖彙 京傳 作

上

烟花漫筆

辰 作

一上 大通秘密論 夢中 一上 花名よせ 耕書堂

△總卷軸

真上上吉 遊子方言

田舎老人作

ごしてもおよびのなくもがみ、

△頭取之部



異素六帖

嬉齋作



兩巴卮言

遊戯作



華里通商考

散人作



當世導通記

天竺老人作



柳巷訛言

喜三二作



手管智惠鏡

燕十作



無頼通説法

春町作



百花評林

探花作



客衆評判記

焉馬作



所處にて板元衆をひとつ祝ひませう、こうもあらふか、

目出たさは羽をのす鶴の

千代かみ

總計 百七拾一冊

以上

大通羽折の長物語、繙帙で首をべて一卷、ひらいてみれば日本むちや修行の事實、ある聾なるとしより、若者にいつていわく、今はむかしどちがひ、なにもかも皆おそろへたり、役者なんども、我等が若い時分の助高屋高助、あく方では市川宗三郎、女形では芳澤あやめ、ごうけ方では嵐音八、みな名人にて、なか／＼今どきの役者のつゞく事ではをじやらぬと、嘶そばにて鶏の時をつくるあれば、あれみさしやれ、鶏などの時をつくるさへ、わし等がわかい時分とはちがい、今時のは聲をださずに、たゞ口をあくばかりと、をのが聾を棚へあげし、落嘶にはあらず、いまや大通の傾城買の、むかしにおどし事かなげかはしく、天戲作者に命じて、小さつのしやれ本をあましめ、そのふう俗をかへんとすに、いまだこと／＼くにいたらず、しかはあれど、たまにしやれ本を閲して、その意味をしろの女郎買あれども、ただその趣のみにして、しやれと意氣この極意をばしらす、そのまた奥義をきはめんには、切碓琢磨の功をつむにはしかじとて、この學問に蠟をとつてあそぶ、一人のげさくしや有、猶この道にいりて、此みちのふ

凡例

一 八文字舍自笑作にて役者評判記有、唐土の月旦の評にならひて、是をあめる也、
一 小冊のよみ本に、おどけたるひやう判記あり、茶臼藝、俳優風、菊壽草のたぐひ是なり、
一 此戲作評判記なるや、巻頭くわん軸の差別、立役女形の品々ありて、くらゐは極上々吉より、上とばかり書るもあなれど、みん人決而是を信じたまふな、もと此境をわかつてる時、さく者三人、あみだの光をもつてこれをわかつてば、其甲乙の運と不運は、たゞ天に任するのみ、
以上

大通羽折の長物語、繙帙で首をべて一卷、ひらいてみれば日本むちや修行の事實、

ある聾なるとしより、若者にいつていわく、今はむかしどちがひ、なにもかも皆おそろへたり、役者なんども、我等が若い時分の助高屋高助、あく方では市川宗三郎、女形では芳澤あやめ、ごうけ方では嵐音八、みな名人にて、なか／＼今どきの役者のつゞく事ではをじやらぬと、嘶そばにて鶏の時をつくるあれば、あれみさしやれ、鶏などの時をつくるさへ、わし等がわかい時分とはちがい、今時のは聲をださずに、たゞ口をあくばかりと、をのが聾を棚へあげし、落嘶にはあらず、いまや大通の傾城買の、むかしにおどし事かなげかはしく、天戲作者に命じて、小さつのしやれ本をあましめ、そのふう俗をかへんとすに、いまだこと／＼くにいたらず、しかはあれど、たまにしやれ本を閲して、その意味をしろの女郎買あれども、ただその趣のみにして、しやれと意氣この極意をばしらす、そのまた奥義をきはめんには、切碓琢磨の功をつむにはしかじとて、この學問に蠟をとつてあそぶ、一人のげさくしや有、猶この道にいりて、此みちのふ

かきをいとはず、日本國中を通道修行とこゝろざし、桐の本箱にあまたの小さつしをせをひ、一箇の矢立、いつぼんのふで、外に一冊の竹牒を腰間にまどひて、見聞を記し、偷伽者の衣道人の居士衣にかへて、長羽折を着し、太刀かたな、或如意ほうづへのたぐひにかへて、ほそみのお太刀をさし、脚半はいきといふところを、バッチしりはしよりて、武者八ツ目の草鞋へ、五枚うら附とでるところなれど、うらつけはおもしとて、ふじくらぞうりをはきて、だんぐと修行なすに、終に日本國の果、意氣通島の國に至る、このいき通しまのくにざかいに、世事が嶽といへる高山あり、それをだんぐとよちのぼりてゆく、程なく數千丈の谷あり、己堀谷、をのれとほれしといふこゝろにや、またの名鹽谷ともいふよし、それをくだる道を、御爲ごかしといふは、わるくすると轉り落る事、人につきこるばさるゝ様なるによりて名付と、その谷底にいたれば、しばらく平地にして、またみあぐるばかりの絶頂あり、其山を意氣間山といふ、山の麓にひどつのがん窟あり、俗に傾城殺しのいわやといふ、此いわやに入てうかゞふに、いり口に額を掛たり、すなは



ち祝枝山にて、通窟とぎやう書にて二字を書したり、もつともつうくつとは、つうのいわやといふ文字にて、通窟の音、物事算段工面するに、俗是をつうくつするといふに、響き相同じければ、そのこゝろ歟しらず、此うちにふたりの通真人いまそかりけり、一人は花陽巾にやばでなき居士衣やう物を着し、おしまつきにかゝりて、何か筆工する有様、また一人は、芙蓉巾になにかはでな道服ちやくして、かたへに書を閱するありさま、威ふう凛々、威儀堂々たり、うしろをのぞめば、汗牛充梁の書籍あり、まづ唐本の小説稗史、和本の奇談洒落本のたぐひ、北斗をさゝゆるばかりに積で、世土のやばてん、いつかうに氣の利ぬてやいの、ふうたさいを恨みて、嘉遼の隠士身をしりぞきて、時を待ありさまにてありければ、なにぞなくそらをそろしく、なんにもしる、近付になつてみなしたら、まんざらでもあるまじと、そばによりて頓首しけいさうして曰、われは諸國通道修行のものなるが、道にふみまよひてこゝにきたれり、先生ねがはくば、よろしき法もあらばおしへたまへといへば、机にかゝりて、筆をもちしつう真人はいく、嗚呼とさいたれ



り、そも、われら兩人は、當時通道のすたれたるをなげき、こゝにのがれて通道こうはいのはかりごとをめぐらす處に、はからずも一人のまろう人來りて、我等をたすくやと、拍掌してよろこべば、又一人のしん人も悠然として曰、通道修行のおひと、あらば頼母子々々々、遠慮なしにまづ、これへといふにうれしく、いはやにいたりて禮讓し、たがいにあひさつことをわれば、いづれにもしろつう道の忠心、天晴のおぼしたち、いち／＼やほでなきお嘶しなれば、先々四五日もゆるりと逗留なされ、そのかわりずんど手せまなこのいわや、とんだきうくつな住居なれど、殺伐なうら店よりはましな所が、浮世を離たばかりが、風雅とおこゝろをきなく、ふんながしの不痴等も、このごろさる本屋にたのまれて、しやれ本の評判記をあらはすつもり、だによつて、ぬしもてつだつてくんなんしといふに、こなたもすきの道、なんでもおもしろい骨をおつてかきやしやう、こいつはおもしろ太公望、きめう張良、おそろ韓信、大きにとつとめいりやしよう、むしやうやたらにさはきたち、それからそこにとりうして、小さつの評判記をしたて

あげ、いぬのどしの新版物、花の折がみとなげけることを、其まゝ、こゝにかいつらねて、これをこのしよの發端とはなしけるにこそ、

後序

唐土の孔明が智恵も、日本の松魚のちゑも、つまるところは川柳點のうがちにいへる、三人で三步なくなる智恵にはしかじと、此學問の魁首たるべき、いつ見識の學者滑稽本の博覽多識、傾城買の博聞強記、十文字屋の親方、菊屋の兄貴、敬亭の亭主なんぞ、こたびそれが評判記を綴る、終に全部三冊のそう紙となんぬ、是誠に文殊の智恵、凡夫の智恵のおよばぬ趣向、一人でうご一部宛、其數めて三人で、三部作れるちへを出しは、犬の春の新版物、はて珍敷作意哉と、やつこ鍵持、寒ざらしのしりへにしるす、

いぬの春陽

戲作評判花折紙卷之上終

戲作評判花折紙卷之中

△總卷頭

■傾城虎之卷

金魚作

頭取曰「謀をみつ蒲團の上にくぐらし、もてることを大門の外にあらはすとは、蓋兵書の奥義にして、吳子とは吾子のことにして、ぬしといふにかよひ、孫子とは金をころしてつかふ事にて、こいつは大きにうつりやうしとの通言なるも、太公望の六韜勘略にはしかずして、退て向ふの胸をどつくりとかんがへた上にて、深い思案を司馬法こそ、寔に専用なり、そこで太宗問答の、いたつてごたいそなる問答をおつはじめても、傾城買の一許にいたつては、金魚丈の著述の虎の巻にはおよびませぬ、よつてしやれ本の總卷頭でござりまする、されば安永七年、戌の春の初座より、評判の下りませぬ大だて物でござりまする、ひいき「ひねつたことをいはずとも、藝評がき、たい、頭取」さて此ごころは、ごぞんじの親玉でござりまする、第一ばん目生駒幸二郎となつて、腰元まきが手び

きにて、お八重がねやへしのばれてのぬれ事、うまいうまい、次に夜半の鐘を相圖にしのび出て、館をおちらるゝまできれいごでござりまする、それよりおまさ枕にふしての仕うちよし、二番めに二役五橋となつての和ごと、あまたのたいこをひきつれてのくわ通ひ、瀬川丈とのぬれごうけとりました、それよりせがわ丈のせりふに、さりしおつとの面ざしにいさうつしとて、こゝろをよせらるゝ所、このひとそんなら、おつとに似たる面ざしの人ならば、それにもほれるかとのせりふ、やはらかに手づよきごころあつて大出来々々々、次の幕にはつはるの趣向、松田屋をせがればん頭義平にだしぬかれて、かん當の身とならるゝまでよし、大切富本連中であたりにて、むかふが岡のしよさごまで、できました、老人「五橋のしうち、わしらがわかい時分の梅幸のやうでござりました、當世色男、よさはよいが、もちつとしやれてほしい、色男があまりかたすぎるやうだ、老人「一體くわあそびの様子、今ははなはだ風がわるく、しやれのみにて情が薄ふござりまする、頭取「左様々々、どらのおまさ丈のげいふう、たいいまのくるわがよひにはあ

ひませぬは、しつとりとしたしうちでござりまする故、ひいき「そふだく」、なんでも和事師の親玉はこのひと、巻頭のごしうぎにひとつしめませう、シヤンシヤン、

△立役之部

④ 四十八手

京傳 作

學者曰「虚をもつて實に傳ふ太史公、それに比すべきは四十八手、四十八手の前四十八手なし、四十八手の後四十八手なし、さすがに頭ごりほごあつて、立役の魁首にいだされたは理の當然でござる、通人なるほど四十八手も、日ほんではこさへずとはいふもの、すてられねへは虎のまささね、とらの巻を指置て、四十八手がくわんどうでもござんすめい、とかなんとかいふもの、五リンもすかねへ頭取しうのことだから、深いしあんもありま筆かネ、頭取「東西々々、高ふござりまするが、これより申あげますが、當時流行のしやれほん、小冊の最第一、とびきり無類の四十八手丈、立役の巻頭にすへました、年齢も若ふござりまするによりまして、とらの巻丈を、總べてのくはんとすへましてござりまする、ひいき「四十八手のそ

の外にも、手をつくした小さつの大立物、いひぶんはないぞく、頭取第一ばんめ榮二郎といふ息子株となつて、しつぱりとしたる手ごと、いやらしくなく、のろくなきところが、作意の妙をおらはしまする、次に山の手の里鳳となつてのわるじやれ、されどわるおちのなき所出来ました、次にみぬかれたではさして評するほどのことなし、大切晝三がいとなつてのしんの手、きれいにいやみなきところ、大江戸根生の大とり、大あたりく、ひいき「どうぞできあがつてゐる、そはくする手を、草稿のま、でもい、からみたい物じや、見物一回、その後へん待まするく、

⑤ 三教色

三和 作

頭取「聖教三國歌舞妓、第一ばんめ孔丘字は仲尼の役にて、昌平橋のいほりに、子路を居候におかれての大ふく中のしうちをみせらる、ところ、此ひとのかたゝい藝ぶりにしては、錦考丈のおもしろみ有てよしよし、學者聖人の詞をもてあそぶとは、はなはだ其意得ませぬしかた、このひとにしてこのやまひあるかな、ア、頭取次に三聖そろはれての北國あそび、儒佛神のわたりせりふ、つ、こんでいたされままするごこ

ろよいぞく、女中連もつたいない、おしやか様のおしへを、むだごこにかいたは、ごふいふわけかしらぬ、頭取「そこが狂言綺語も、さんぶつ乗の因とやらにて、正道へみちびくの近道、大あたりく、

⑥ 二日酔大入蓋

萬象 作

頭取「ごなた様も御待兼でござりませう、こ、もごにて評しまするは、御ひいきの大入蓋丈でござりまする、第一ばんめ木挽町船宿の幕に、龜屋忠兵衛の役にて、茂へいが引かけたごみへて、とつくりが、せいッくらべをしてゐるせ、なご、せりふ、だいぶ見物が請とりました、それより引かへしまくに、ふねより土橋へあがる、所よし、相方むめ川が、八左衛門がごころへで、あると聞て、ふさがる、仕うちよし、見物茂兵衛がおんなならいも、當世でもあるまい、頭取「そこがきやうげんのしゆかうでござりまする、ごいかみがたうたの相方にて、ごこへまいり、梅川がゆびの生きずをあらため、一たんははらをたち、いつたんは落つかる、ごころ、きつい物く、ひいき「いろ男の開山だぞ、頭取「第二ばんめに、なかの島の八左衛門、實は手代の長藏めでござりますると、名乗てれば、

それにおうたいをさる、所よし、大つめ梅川のみうけと、のひ、ふうふとならる、まで大あたりく、

⑦ 惠比良梅

一九 作

頭取「此度ひらがな盛衰記の趣向にて、一九先生のちよじゆつの惠比良の梅丈、南枝花始開て、これをけみしましたる所、寔に小冊の先がけ、しやれほんのあにぶんにて、却而傾城買をいましめとするいけんのかね、それ故ほん屋も、三百兩ほごもうけましたごうはさでござりまする、ひいき「これく、やくにもたぬむだよりは、ましかねたるびらの梅丈の、ひやうばんをははじめさつせい、およばすながらそれがし作者になりかはり、一問答つかまつらう、頭取「だいいたばんめ梶原源太の役にて、おやごにかん當うけてのくわがよひ、若みのうへをあかしたら、梅枝にあいをつかさりやうかど、だんまりにて、胸でさる、ごころうけとりました、それよりあいかたむめがへ、源太が身の上はごより承知して、なせあかしてきかしてはくださんせぬといはれて、みのうへをかたられたのうへ、かへつてこちらから、佐々木をわざとせかる、所、手強くてよし、大切梅枝しやくをおこすを、

かんびやうせらるゝまで、ごふもいへませぬ、大あたり、

客衆一華表

振鷲作

頭取「このところが一のとりぬじやうでござりまする、さて丹波屋の段に、ふるてや八郎兵衛の役、富澤町「きつい物であつた、當時は拜見よりおもしろいやうだ、頭取おつしやりまする通り、若手のきゝものでござりますれば、當世の氣にあいます、それよりおつまの口をかけるれば、とみ岡にでゝゐらるゝとき、客は香具やの彌兵衛といわれ、いきごほらるゝところよし、すべてこのたびのしうちは、中車丈のおもいれあつて、きつい物、つぎにとみおかへかくれてあがられ、うまくきやうげんをかゝんとおもひし所に、富岡の女房にみどがめられ、めいわくせらるゝところを、かへつて手強くいわるゝ場よいぞ、いとおつまにあひ、わる口「おつとまつたり、あんまり早く、なかゝなをつてのろいようだ、頭取「そこが和事師の場でござります、大切おつまに金をかりて、丹波屋へたちもごらるゝ所めりやす、わる口「八まん鐘じぶんに、藝者のあがつたもめづらしい、それはそれにもし

やうが、起請とはあんまりだ、頭取「何はともあれ、とうじのきゝもの、

野郎玉子

一九作

頭取「新板野郎玉子丈でござります、第一ばんめ定次郎の役、三人づれにて田町の水茶屋にてのしうち、さしたることもござりませぬが、次の幕笑止と客人となつてのおかしみは、大ぶんあんじられてのしうち、見物がうけとりました、次に本役定次郎にて、おさななじみの玉川とのぬれ事、きついもの、いゝき「いろおこのまるいしうち、おそろかん玉子だぞ、頭取「それより床の内にての、むかしがたり世話せりふ、はいかい師のさい行が、今戸のあね様のところへゆき、針屋のむすめが棒屋へよめいり、こんにやく屋は、ゆうれいばしへひつこした杯とのはなし、口中のすこやかなるところ、高麗屋の若盛りやうでござります、大切狂言師青袋となつて、越中ふんごしのおち、きついもの、上方物「きみと仕内は、とつともふ白ふなふて、きつい物、

銚子戯語

大飯喰作

頭取「てうし戯語丈は、第一名題がおもしろふござりま

す、さてたちはな町邊のむすこ、露十の役にて、始終おとなしみのしうちよし、それよりはじめての茶屋のをうたいやわらかにてよし、それよりくちやくそくをいたされままする迄、できました、いゝきぬれごとしのおやだぞ、頭取「ほごなく座頭かぶになられませう、

南客文集

鷺錢作

頭取「此度南客丈第一ばんめ、芝幸の役にて、座敷のとりまはしすべとおとなしみのしうち、こまかいごころがみへます、いゝき「古人の新車とちう車を、こきませたところは、つゞく物はねへぞ、頭取「左様でござりまする、芝居の御すきはごあつて、よいところをござらうじました、リクツ者「末始終女房にもしやうといふ者が、ほかの客をつとめさせねへも、できたほうでも有めへ、頭取「左様でござりまするが、この仕うちが、いつたいこのひとの手毎かごみへまする、まづはおてがら、

格子戯語

振鷲作

頭取「身六藝に通ずる者七十二人と也、六藝とは禮樂射御書數、これを役者にとりましては、やつし、武道、た

ち役、所作、太刀打、ぬれごとのりくげいそなへられました、格子家語じやうゆへ、上々吉の位にをきましたが、ごうもかうしも、時にあはずとやら、すんど流行にをくれたやうな、じみなしうちがみへるごの評判でござります、されば顔淵子路などの衣装つきも、花やかではござりませぬが、これがいつたい此人のもちまへでござります、まづ手丈夫なげい故、大たてもの、

客衆肝照子

京傳作

頭取「きもかゝみ丈第一ばんめに江戸浮世師富藏となつての序文、辯舌さはやかにてよし、次にどん、せりふのはし書に、山東京傳二十五のあかつきにするすと、みづから本名をなられし所、いたつて手強くてよし、いゝき「世の中に戯作者の鼻は、これも獅子ばなだど、おもつてゐるてやいがを、いが、この二十五のあかつきとかいだところ、ざれ、も、いろ男といふ事を承知してくんねへ、頭取「しんぶつの風俗をうがつたところ、いたつてこまかし、見功者「せりふまはしに、時代せりふ、せわせりふと、つかつた所がごうもいへぬ、

廓大帳 同 作

頭取「廓大帳丈、山田三郎の役にて真崎の仕うち、ごうぞくをみとがめる所、やつぱりいなかの神樂をかりて、狂言をいたされるところ、ごつごよし、次にたいこもち紙子義八となつての世話事のこなし、いひぶんはござりませぬ、わる口正本を大帳とはわからぬ事だ、ひいきべらぼうめ、大てうとは、大丁といふこゝろでつけたのは、それがわからずば、すつこんでいやアがれ、頭取「ごう大切に、めりやすにてのしうちまでよし、」

眞女意題 萬象 作

頭取「此人中七の役にて、いろ事のむつまじきなかなりしが、人の水のながれと、うきつとめとやらでござります、ひいきゑんのはし場もあるならば、うれしのもりや花川戸、ひとつしめませう、シャン、頭取「二ばんめにもわぶみのいさかひ、眞理のわかるごころより、奥右衛門との出合、何かわからぬことを聞、なれたといつてよくをうたいをいたされます、つぎに神田と川越との文の間違、情合ふかし、後へんを待ます、待ます、」

通仁枕言葉 歸橋 作

頭取東西々々、まくら詞じやう、このたび四開と成、花の會にてしやれらるゝ所、評するほどのことなし、これより西仲町山本にて、わざとふるき女郎の口をきるゝ所、できました、あいかたおたよが、幾吉に出てるをあやしみ、くぼみならんと、いく吉へおしかけ、敵くぼみをつきださるゝまで、手強てよし、しかしもちつと落付て、藝をいたしてもらいたい、先は評よく御仕合々々、

居續借金 同 作

頭取「扱かり金丈、五人男そろふて、すもう見物の出みへよし、それより五人一座のさばぎ、いづれもよしよし、こちらよりほり物をしやうといはるゝ、新手的たくみ、また女郎のほうよりつよくいはるゝを、茶にしていはるゝ所たいてい、次に五人一座とおもひの外、大菱屋の樓に居つづけしての夢となるまで、めづらしいぞ、その外さして評するほどのことなし、

美地蠣殻 同 作

頭取「さらば評いたしませう、此度かきから丈、しん傘

の役にて、宗匠點場庵のはいかいの嘶、やはらかにいたされます、それより山本町四人一座のさばぎ、さしてこみいつた仕うちもなし、いつたい作者加川むかひ丁にばかりゐられます、ちつと座をかへて狂言がみたい、しかししやれてふまるゝ道のかきからごのせりふは、切落へおちました、

甲驛新話 馬鹿人 作

頭取「新話丈、此度金公となられての仕内、中ずみをとられたる所よし、扱金公第二ばんめに、谷酔をなだめらるゝところまでよし、それより孫右衛門のおかしみよし、すべてこのたびの客は、おほくあるものなれば評判でござります、それよりきりのまくに、三澤にほんにかへといふことをのこさせるまで、大ぶんさんじきへ落ました、

契情二筋道 谷我 作

頭取「このたび二筋道丈、第一ばんめに、五郎といふ行過たい男となられて、金のむしんをいつて、つきださるゝしうちよし、つぎに晝三がい、文里となられてのしうち、しつとりごやられまするあんばい、見物の落涙をもよふさるゝ所、できました、

婦佐楊枝 戲 作

頭取「吉原楊枝丈、かん木のやくにて、風流なる庵に、酒中花ごかいたる額をかけて、ひととどの柳をうへてゐらるゝ所、おも入よし、一ばんめ三番目の喜の役にて、腹を提てでらるゝ所うけとりました、それよりごう楊枝のれいこんとあらはるゝまで、大てい大てい、

會我糖袋 唐洲 作

頭取「此度時宗の役にてのとりまはし、なにはやがてのまはりせりふ、かるくうまみ有てよし、わる口「うまみもからみもいらねへが、あんまり五郎がにやけすぎるやうだ、頭取「左様でござります、當せいはあらつばくなくてはいまいますね、二ばんめてうじやの場、ぬれごとのあんばいかくべつ、

匂ひ袋 艶二 作

頭取「太郎吉のやくにて色あくのしうち、もちまへの和事よりは、にやけませぬところのおもいれあつて、うけとりました、次に次郎吉となつての仕うち、いつもながらのぬれごとし、ごうもいへませぬ、きんねんの新はんものでは、おもしろきほうでござりますが、ご

つといふひやうばんもござりませぬ、しかししうち
にをきましては、頭取はなだかんしんいたしてご
ざる、

④ 色講釋

一九作

頭取「色かうしやく丈、このたび辰三郎の役にて、水狂
と出合のばよし、二ばんめに女郎の間違にて、あい方
はなぞのに、氣をもませてのいろ男のしうちうまみ
にせぬ、らい年のしゆかうをまします、

⑤ 文選臥坐

狂樂、湖洲、作
谷我

頭取「初幕しげたゞもぎきの茶のゆよし、それより船中
のしやれよし、中まく竹右衛門にてのしうち、こまか
し、さりのまくにて、文好の役わけて目にたちます、
しうつよみにていたされましますところ、ごうもい
へませぬ、

⑥ 辰巳之園

寢言作

頭取「初まくに志厚の役にて茅場町の水茶屋にて、ゆき
きをみてはなしの内、何もさしてのことなく、つぎの
まくのすぢばかりとみへます、それよりとみがおか
小花屋にてのしうち、わる口ごうもおもしろそうな趣
向だとおもつたら、きんごしのへのやうだ、頭取「此

度はとつごいふこともござりませぬゆへ、このかは
りのひやうばん、

⑦ 賣花新驛

似山作

頭取「第一ばんめにはいかいの出合、らん酒にすゝめら
れた仕うちよし、それよりひつかへしのまくにて、三
人一座の體、あふみのごとこ入のまく、しつぽりした
おとなしみ、できました、

⑧ 取組手鑑

關東米作

頭取「この度角力取負惜となつて、柏木といふけいせい
にうまくなげらるゝ所よし、つぎに古野川といふけ
いせいとなられてのしうち、ごふもいへませぬ、

⑨ 遊儂窟烟花

薄倅作

頭取「紙屋次兵衛の役よし、次に狂歌師すけんのわるじ
やれの仕うちよし、次にいさみてあいの仕うちよし、
もつとも世間の評判は、澤山だそうにござりまして、
まづは御出世の前表々々、

⑩ 疇昔茶唐

艶爾樓作

頭取「ゆふべの茶唐丈は、師匠の夜半のちやつけ丈のし
うちをしたひ、それを増補いたされての仕うち、廓通

遊子丈はひねつたし内あり、うきたつおもいれあり、
そのうへしんのはなしの所大てい、その外の衆
は口のもくろくにのせました、

通言總籙

京傳作

頭取「しやれ本の總本寺、通言山總籙寺は、京傳主の開
基にて、山東第一山の靈場でござります、見料はわづ
か十六銅にて、結縁のむすばれませう、ひいき「さあさ
あやくにもたぬむだをいはずと、待兼てゐる、そう
まがき丈の評判はごうするのだ、頭取「三通文殊の智惠
鑑、第一ばんめ江戸かみ來り喜之助の役にてのしう
ち、太きにうけごりました、わるい思案艶二郎どのを
うたい、かくべつでござります、見功者「いつたいこ
のひとは、ぶたいをかるくいたされましますによつて、
幾度とてあきはござりませぬ、頭取「それより仲の町
へ参りましてのしやれ、また出來ました、夫より善之
助がおいらんどのぬれご、影にていたされまします
狂言、きれいごにて、御見物がたを、嗚呼々々とお
もはせまするあんばい、きつとうけ取ました、それよ
り大づめ今様のげいごにて、あそびのこんたんの
しうち、ふられた客、もてたきやく、そのほかかしみ

せのきやくのこなし迄、みさはにいたされまするし
うち、古今獨歩の名人でござりますれば、それゆへ位
は大上々吉、立役のくわんちくにすへましてござり
ます、

△實惡之部

⑪ 白川夜船

京傳作

頭取「第一回めに、御國さむらいとなられ、茶やの男を
つれてすけんのおかしみ、ごい座しきへあがりて、い
ろくのみぶり大てい、二くわいめに、すけん其
風の役にて、むすこ一人どう道されて、道々うぬぼれ
をいふて、こらるゝところにくみにて、あはよくば、
むすこにあてみをつくはせん、くはだてらるゝ所、手
強くできました、山の手、とかくこのほんにも、す
けんうぬぼれの役廻りには、山の手者とかきたがる
が、とんだやつらだ、山のともしんつうをしらねへ
か、下町「なんだ山のての眞通だ、しんつうのやくわん
だ、やくわんましいやつらだ、たはごをぬかすと、
ふみつぶしてふるがねかいにうつてやるぞよ、頭取「東
西々々、まづおしづまりなされまし、藝評のじやまに
なります、扱大切のまくによし原ものらの三人一座、

わる口のごんごせりふ、ごうもいへませぬ、

和唐珍解

三和作

頭取「和唐珍解丈、このたび李唐天の役にてのしうち、唐音をつかふおも入れ、もつともしんじつ、禪師傳來のどう音にて、唐和纂要などの、きりぬきはもちいられませぬ所が、大だてもの、仕うちでござる、つぎに和藤内のこなし、やつぱりよの常のしやれ本ならぬ、こんげんのやはらかみに、そのうへ持まへのでてづよきしうち、ゑらいぞ、わる口何でも唐音と俗語、よみわけるところに骨がおれる、そして骨折てよんでも、さしてやくにもた、ねば、ごうでもみてはすくなかろう、見功者なるほごみにくいところでは、すこしうつ方ではござるが、雨中のつれづれ、などにみましては、かくべつおもしろみがちがいます、頭取「吳三桂、きどりせんだん女のおもいれあり、それ、雅俗ともむきます、ひいき第一の珍解丈、おてがらく、

伊賀越合羽籠

歸橋作

頭取「さて伊賀越丈、第一ばんめむかふ島の段に、川合亦五郎の役にて、和田ゆきへが家につたはる所の、正宗のかたなをのぞみ、ほかよりも所望有つて、つかは

ふあらかごの狂歌、わる口「おつとまちな、きやうかのわるおちをさる實惡も、ふでかしたの、敵役のやうでわるい、頭取「もちまへはかたきやくでござりまするが、名人故實惡の部へ入りました、

遊里會談

歸橋作

頭取「會談丈、このたび四箇敷のはなしのうち、りんはにて、品川のごとくいたて、おもしろいことござります、ゆうれいのみへなど、あたらしくたくみあつてよいぞ、芝居好「この人のしうち、外々ところが、ごかくたくまれた藝、いつ體じつ惡のちまへ、きついても、頭取「のちにいつわりをあかさる、所、實にこつてのしうち、よふござります、それより廓子の嘶ひやうすることなし、馬遊、せんか、四人一座の深川あそびまで、あるべきとふりでござれば、おつてひやうばんをいたしませう、ひいき「二のかはりのひやうばんを、待まする、

寸南破良意

一片作

頭取「すなはらひ丈、所度四天王たつみ一座に、第一ばんめねんき物やく、さしてひやうするほどのことなし、第二ばんめ、頼光のこかうの臣、四天王の四人

すよし立聞して、それよりも鞆負をころし、かたなをうばひとつての、ひやうしまくのところよいぞ、扱いしや通庵が家傳のくすりをもらひ、ご通庵をころさる、ごころ、にくてい、つぎに深川梅音へかよひ、川柳をかい名し、義太夫の道行の場、あたらしくてよけれども、さしてのしうちなし、次に八まん地内の段、梅をこのえんにお百になじみ、始終物がたりにて、おさなき時わかれし兄弟と、なりの合をせられ、しづまに親のかたきとつけねらはれ、不通散にて、もごのすがたをあらわさる、まで、ごつといふことはなけれど、實惡のたてものこてき、

郭中掃除

頭取「郭中掃除、かくちう莊子をもつて、名づけられたる名ごみへます、もつとも序文に、莊子のせいしん論をおごけられました仕うち、なに、もいたせ、ちと俗物にはわかり兼ねますと、おつしやる御方もござりまするが、そこは大がい承知でいたされまするしうち、女郎かいの所はちよつとかりうけ、たゞじれどわざくれは文章にてござりませう、まづはそらい先生の經ざいのば、三猿うしのをかしみ、一休和尚のこう

一座の景事、たいてい、しかし當時休座、こんにやくしま座をつとめられますれば、くわしいげいひやうはおつて、

辰巳婦言

三馬作

頭取「第一ばんめ、新川のばん頭、藤兵衛となつての手代がたき、江戸きしようのにくみよし、つぎに喜之助となつての、いろいろこのしうち、長五郎といふ仕事師となつてのこなし、見物がうけとりました、ひいき「三朝かこん吉よりはぐつとよいぞ、頭取「さればだん、御出世でござります、おてがらく、

傾城買指南所

金魚作

頭取「此度十八大通も、て枕に、指南じやう女郎買の先生となつてのしうち、さめかい兵藤太にとりいらる所、はな、しきあとはなけれども、ごこうしやごこうしや、二ばんめかてませず、御役まはりもさしてなく、頭取「次のいろご傳じゆのばがみたい、

自惚鏡

振鷺作

頭取「それ鏡に天眼鏡有、照魔鏡有、矢田のみかみ、ゆすり氣かみと、いろ、の名あり、こ、にしん鷺先生の作のうぬばればかみあり、滑稽道のを、だても

の、うぬばれかゝみ丈は、第一ばんめ白我といふ通となつてのじょうろかいむすこかぶを同道いたされてのにくみよし、つぎにたいこいしやとなつてのおかしみよし、武左客となつてのしうち、なか／＼できます、わる口「きはひとなつての女郎買、ごふも大町は小みせでも、あのくらゐは、あのとやいにはしこなされぬはづだ、やつぱりあすこは、ふじみ町か、しん町でかけばいひに、すこし作者が、ひいきやかましい、作者がごうした、たはごどをつくとつかみだすぞ、頭取「どうざい／＼、その所も本のけいようでござりますれば、そのつもりにてごらんくださりませう、まづは一體のしうち、てづよいところ實悪のかんぢくかんぢく、

戯作評判花折紙卷之中終

戯作評判花折紙卷之下

△敵役之部

通氣粹語傳

京傳作

頭取「粹語傳丈は、敵役の大だて物にて、宋朝の水滸傳丈の、藝肌まなばれましての上手、九紋龍の天にのぼるがごときいきほひ、呂ちしんのいれぼくろ、はなやかなる仕うち、武松がごらをうつこぶしの、きまつたものでござる、ひいき十二朝から和漢書目録のどほりの、通俗物の大だても、宋朝座のおや玉／＼、頭取林中となられましての仕内、次に花和尚のやく、ほりのさんばしへ矢文をいられます所、これでやぶみなら、せうことがないとのせりふ、かたき役のもちまへにてよし／＼、大切やせ川病身をたのみ、しびれ薬をもつて、鯛丸屋の呉服物をうばふしうちまで、かんしん／＼、

白狐通

谷我作

頭取「白狐通丈、地廻り世事吉となつて、新町の長家に、長家をひやかさるゝところよし、その外下女むすめ

のしうち、けいせい買の一だんにあづかりませねば、評致しませぬ、さて切の幕にて、おいらんかいのあんばい迄、おかしみのなき、しつかりとしたるしうち、かたきやくの大鳥々々、

◎夜半茶漬

京傳作

頭取「美濃と近江の寐物がたり、第一ばんめにつう客兩人、奇謀をかたられまるところよし、つぎにいしや犬悦となつて、ぶん車とおいらんの色事をしらすして、指をきれといふしうちよし、つぎにおいらんの客人を、茶屋の二かいにて、たばからるゝまで大てい大い、

◎甲子夜話

谷我作

頭取「此度甲子夜話丈、庄九郎の役ごつと請取ました、次に市右衛門のやくかくべつ／＼、其外三人のしうち、もふしぶんはござりませぬ、五ッかり金丈は、かみなり庄九郎の役にて、角左衛門をはからるゝところよし、おてがら／＼、

◎息子部屋

京傳作

頭取「なじみの辨つきに、後朝三郎にてのおもいれ、し

よ會の差別、女郎のこんたん、わるあそびの仕かた、床と座敷のもやう、思ひきりの能手管、女郎の虚實をしるすお勤、色事のおんばい、客と女郎のみのうへまで、大てい／＼、

◎客物語

三馬作

頭取「此度客物語丈、ごんす大臣にてのにくみ、たいこ持大せいひきつれての始終の様子、小手がきましました、それよりうきを待ぶせの、ふたりをまはし者にいたされましたおんばい、ごふもいへませぬ、すべて世界を、くわい談のすぢにいたされましたおんばい、を／＼でさ／＼、

◎闇明月

あつ丸作

頭取「闇明月丈、此度狸平の役にての、むだばなしのおかしみ、つぎに仙午といふ客じんとなられて、ふりしんどのしうち、ごつとうけごりました、そな新町の長家のしうち、さしたることなし、大切里秀となりて、いきすぎたるところ大でさ／＼、

◎穴知鳥

東朝作

頭取「清助の役にて、半可通のしうち、段々高まんをいはるゝところ、にくみにてよくいたされます、わる

口「穴知鳥といふはなんのこただの、このくらゐなことを、穴とおもつてゐるもすさまじい、これで通用の穴なら、仙臺通寶にもあながあらず、頭取「いつたい作者がめのあいてゐるといふ、卑下の詞でござりませう、先は大てい〜、」

奴通

堂 駈 作

頭取「奴通丈入江のあし、第一ばんめ地まはり權にて、生酔の喧嘩にはいられ、ひきすつてゆかる、所おかしこと、老人「まいかた喜夜來大根といふがあつたつけが、藝風いひかたまで其儘だ、頭取「つぎに奴長助となり、女郎かいのいくたてをいわる、まで、以上ふたやくども、ゆるりとひやういたしませう、」

見通三世相

振 鷲 作

頭取「三世相丈、もつ六三郎新やしきの場よし、次に六三郎「もつ返しのまくよし、夫より大切道行の段迄きつ物〜、」

卷軸

其アンカ

中 橋 作

頭取「あんか丈は、ことしは全體實惡の部へいれましても宜ふござりますが、先氣象が豪傑でござりまするによつて、御しゆつせの後までも敵役でござりまする、」

んの先達でござります、當時のきゝもの、三教色丈なごも、この藝はだをまなばれましての仕うち、まづは此みちにをきましては大慶々々、

一事千金

金 魚 作

頭取「狂言綺語も讚佛乘の因とやら、地藏様が守屋の役、観音様が聖徳太子となつての狂言も、衆生濟度の方便芝居にて、善光寺如來開帳由來記、本田よしみつの役廻り、妻子をすて、けいせい勝山にまよはる、ところよし、新造がおいらんを取もつ處にて、おいらんのせつなるあんばい、大切これみな、かこしやうゐん縁づく、みんな如來のかゝれた、きやうげんだはやいといはる、まで、大にうけとりました、大でき大でき、」

傾城極秘卷

無 茶 作

頭取「酔はうの役にて、我庵へけいせいの文の精出で、女郎買の極意とかるゝを、しのびてきかるゝところ、御功者々々々、」

道外形之部

道中粹語録

頭取「子曰いにしへの愚は直なり、いまの愚はいつわれ

先はだい一ばんめきんろとなつて、すつかりとしたしうち、大詰においと、おきんを、みたてかへにしてのこなし、まづこの本をれ切といはせて、後への新狂言をふくまるゝまで、大でき〜、見功者「いつたい藝肌が大ふうでござりまするゆへ、かくべつにつしりごよふみへますが、其外の衆はくちもくろくにのせまし、」

親父方、花車方之部

聖遊廓

無 名 作

頭取「寶曆の丑水無月の五日、御當地はじめての御めみへにて、その節ははなやかでござりました、則はつぶたいの節、釋尊の役をつとめられ、道行いもせ送り火といへる、じやうるりにて、宮古路れん中やかたり、かりの世太夫との所作事、大入大繁昌つかまつりました、いゝき「頭取のいはるゝとほり、そのむかしははなやかでござつた、頭取「只今にては、べつしての仕内もござりませぬが、御老功故何をさせましたも、儒佛老おしへかたがきついでござりまする、そのうへ當世のしやればんに箱をかきましますも、この本の印がござるからのおもひ付でござれば、しやれば

るのみと、眞の道外方の愚は直にして、ちやり敵の愚はいつわれる所なり、いにしへの松島茂平次、あらし音八、みな直愚なり、よつて藝さうもきれいななり、ごう中すごろく丈この器なり、見功者「おさのといへる女ばかり、江戸詞のしうちごうもいへませぬ、頭取「嘉兵衛うき草、伊助かるも、その間違おかしみあつていやしからず、きれいな所より、大切彌五左衛門の役にて、傾城田ごゝ、格氣いさかひ、口舌のあん梅、またきつもの、道外方の巻頭にすへましたに、いひぶんはござりまするまい、」

福神粹語録

萬 象 作

頭取「一六はん物のはじまり、いちをふつて萬事のおかしみ粹語録丈、扱此度大さんばしへ寶ぶねをつけさせ、それより土手のおかしみ、わらふ門へごつとおしよせ、しゆ〜まはりせりふのおち、茶屋におさだまりのすて詞あり、布袋の役にて、るご〜したるおどりかた、かぶろを夜着づゝみのふろしきへいれ、相方におんごをこらせ、ひきいださるゝところよし、さて大黒のやくにて、白鼠に角力をこらせ、相方子日にひまきたくられるところ、おかしふござります、べん天の



こまられるも、壽老人のお年かさも、忍びすの釣も、福祿壽の枕ふたつも、びしや門のむかでも、いちちうけ取ました、まづはごころからごこまで大評判大評判、

○ 世説新語茶

馬鹿人作

頭取「世説新語補あり、それにならひて世説新語茶丈のしうち、道外方のき、物、おかしみの思入よし、山下いろは實記に、音羽の三郎の役よし、大できく、

△ 若女形之部

○ 將基啓蒙

戯作

頭取「孝行にうられ不孝にうけ出されとは、川柳點のうがちにして、よく傾城の身のうへにかなひ、公界十年のありさま、人間の五十年をこゝにかんじて、盛者ひつめつのならひ、嗚呼憐むべしなげくべし、とはおさだまりの言にして、まづはきぬぶるひ丈の、ひうやばんをつかまつりませう、この度けいせい梅川の役にて、忠兵衛に情をたてらるゝところ、またかくべつな者でござります、扱夢のくるわ槌屋の榮、第いちばんめ、頃しもそよふく秋風の目には、箕の輪のべつ莊に、いご病氣のものあはれるしうち、大きにうけ



とりました、ひいき「おんながたのくはん頭は、ちがつたものだ、見物しげく千話はどうするのだ、ひいきはていづれも京橋の親方だ、だまつてき、なさい、頭取「それより中の島八左衛門がさしきへ出てのこなし、天晴々々、さて二ばんめに梅春が働にてあひしところ、ごふもいへませぬ、それより切の幕にて、二の口むらへ落つかんごの手だてまで大あたりく、

○ 吉 船夜話

戯作

頭取「信長宮中の草年々秋の處に生ずとは、古今獨歩のくはく言にして、滑稽家の目を附たところは、またかくべつな者でござります、これはさてをき、しげく千話丈、けいせい空琴の役にて、いろ男にしのんであわれてのぬれごとうけ取ました、つぎに馬骨といへるいやな客人にあはれてのしうち、地藝の達者なところガみへまする、それより床の内にてのせりふ、馬骨と隣のいろ男とへかけてのおも入、こなしの鹽梅、どうしても御江戸の氣象、水際がたつてみへますく、

○ 吉 廓文章

戯作

頭取「一年の謀は元旦に有、一日の謀は寅にあり、かん

崎くるわ、吉田屋喜左衛門が内の朝の景色より、晝見世にうつり行様子、おもしろい趣向でござります、銀座むだなことをいわづ共、げいひやう、頭取さてにしきの裏丈、此度けいせい夕霧の役、いづれもきれいなことにて、こまかにいたされます、それより伊左衛門をかくしてあげられ、やりてにけざられ、なんぎになるまでたて物、次にいざへもんにあはる、までのしうち、つぎの間に新造の歌骨牌をさるを、相方にてのこなし、この筋はまへかた、花川戸の親方が狂言にいたされしが、おもしろいことござりました、見物、あるとき地内の親父が福清、和泉町の太夫がかしごうもいへなんだ、ひいき、これ、ふるい狂言の評判記ではないぞ、頭取、と、みうけになるほごうけ取ました、き、物、



深川拜見

歸橋作

頭取、深川六部集のそのひとつ、はいけん丈でござります、船頭、サア、さつきからそこりにならふとおもつて、河岸をふつてまつていたぞ、藝評がき、たいき、たい、頭取、扱げいしやおたよとなり、十藏をうまくくはせらる、ところ、いろ男にしたて、のしうち、

きつひ物、次にたつみさん樂うちの段に、いのが氣をもむ様子、一座にしやくりをいはせらる、まで、作者の胸でせられた狂言大あたりにて、尾花やの幕に、伊之はいろ、しろいくろいをわけて、ほりもの、穿鑿にか、れるうち、落付たしうちにて、いのに髪をきつてやらる、まで、めりやすいたこの有さうな處を、なんにもなくせらる、仕うち、かへつて舞臺がしまりました、新川、外にしてのないうち、一本きたち、頭取、左様々々おしい事に二ばんめがなくて、諸見物が切のまくにたちかねます、ひいき、中うらのおや玉、



意氣口

振鷺作

頭取、東山見番記、一番めに船宿の女ぼうにて、年増ぶりきれい事、法華宗しんこうせらる、しうちなご、見物がうけとりました、次に二役さん勝にて、半七になじみ、うき名のたちしなかを、義理につまりて今宵きれんとおもひ、半七にあいそのつきろかしにせらる、しうち、古人杜若丈のおもいれ有てうまいこと、始終半七に物をいわず、五大力のあいかたにてのこなし、めつきりとあげられました、ひいき、も

ちつと位をあげてもよかろうぞへ、頭取、なる程すいぶんあげましたもよふござりまするが、まだ、後編をふくんでをりますれば、その節しつかりとあげませう、わる口、めつたにくらゐはあげられまい、きりの幕に半七がばかりをみてあれば、なんだといふか、ふか川通が、船でばかりをしらねへもすさまじい、ひいき、このむきみのよこし野郎め、頭取、まづ、おしづまりなされませう、こうろんにこむよう、大家様がちかふござります、なんにいたせ諸見物の評判よく、こまかによふいたされます、座元の金箱々々、



粹町甲聞

馬鹿人作

頭取、甲聞丈、第一ばんめ瀧川の役にて、淀車の相方となられ、すみからすみまでゆきわたりししうち、大評判大評判、さてそれより御座敷客、武太夫の相方になられ、淀車はらをたち、かへりしところまでのしうち、できました、ひいき、しめたぞ、うつくしいぞ、わる口、女はき、かた、おもつて、むしやうにほめるが、はらをたつたきやくを、た、かへすけいせいもあんまり手がねへ、頭取、さやうではござりますれども、一體このきやく、よからぬ客でござります

ゆへでござりませふ、扱二ばんめに座頭困彌の加役にて、仙臺上りの場まで大でき、



風俗通

如琴作

頭取、此度風俗通丈、なほ町のげいしやお染の役にて、福清の内の場、おふくろにあはれてのしうち大てい、それより新川の客人、文長にあわれてのおもいれ、手づよきこなしできました、次の幕まはしかたお秀の役にて、船頭とちよんの間のぬれごと、見物がうけとりました、それより切のまくにて、いろ男の半九郎とのであいのしんみのぬれごと、しつかりとみへます、ごい大きりにいたつて、欠落いたされますところへ、作者如琴殿自身にいでられ、やれまて兩人と聲をかけられますれば、びつくりとしたることなしにてのまくざりよふござります、三つの宵泊りまでうけとりました、



婦美車紫野

歸橋作

頭取、紫鹿子丈、さいしよに白拍子かめ菊となつて、平家没落のものがたりをいたされ、白拍子と遊女のわちを仕わけらる、ところ大てい、それよりつぎに、江戸中のあく所場をかたられます迄、大はね

おりのしうちよし、りくつ者、是もいまでは、だいぶ
損益せねばならぬところがござる、頭取、すこし流行に
はおくれてござれど、まだ、はな、しき、ころ
がござりまする、大てい、

田 妓女皮肉論 金魚作

頭取「サア、ひにくろん丈の評にかゝりませう、こ
の度土橋のお幸にて、仲町さんやぐらをはじめとし
て、其外四十九ヶ所の岡場所、吉原をせめんたくむ
を、おんなながらもみかたをはかつて、わざと吉原を
はめられて、ひと、のころをひかる、しうち、た
つ者にいたされます、わる口、をんなに一揆をくはだ
てさするとは承知しねへ、近松已來みねへきやうげ
んだ、頭取「きやうげんのすぢは、役者衆の評にはか、
りませぬ、それよりよしはらさしておしよせ、小はた
をあげらるゝはたらきまで、しつかりとみへます、ま
づはひやうよく恐悦々々、

谷 我作 廊癖

頭取「東西々々、此所はさとのくせ丈でござります、初
幕一重となりてのしうたんの場よし、まためり
やすにて、文里をつめるところ、みるやうでござりま

す、ひいき、そしてごんに文里をせかれる所、かへつて
権をつきだす氣性、どうもいへませぬ、頭取「きりのま
くこひやみにて、うつとりとなるまで大てい、

定家文庫 戲作

頭取「大磯風俗傳、第一ばんめに茶屋女にて、客をおく
りの舟、青砥屋にあわるゝところ大てい、それより中
町おとらのやく、何もひやうすることなく、二ばんめ
に時宗があいかた、お蝶のやくにて、親方の異見をき
かるゝうち、とても此土地に、いられんとおもはるゝ
おもいれ、うけとりました、後に五郎にあつて、いよ
いよにげんといひ、口をおさへての拍子まくまで、大
てい、

中街艶談 戲家作

頭取「なかつてのげいしや小春の役にて、米問屋の手代
太兵衛に、むたひに間夫をせかるゝ所、おもひきつて
よし、ひいきとしてみがあつておもしろい、わる口、み
あるかねへかしらねへが、山吹のよりにきいろくな
つて、しあんすることおねへ、頭取「東西々々、それより
ゆあがりのきれいな事、しつぱりとした次兵衛とのぬ
れごと、うけ取ました、お手ぎわ、

言告鳥 谷我作

頭取「言告鳥丈、けいせいあげまきのやく、同若紫の役
よし、廊の櫻丈、おなじくあげまき、ふたやく若
紫の役、ともにごつとひやうばんがよろしふござり
ます、其ほかの衆は、くちのもくろくにのせました、

虎溪三笑 戲作

頭取「ある附合の句に、ふうふと現じ、ごうろみにくる
とは、きつい穿ちでござりまする、芝邊、品川のせかい
にヤア、大きにまだいろふといふ所がありやす、ひいき
「だまつてけつかれ、三人をみいろに、女形でげいをし
わけることが、ほかのやくしやにできるものか、頭取
「まことに地げいのたつじんでござりまして、わる口を
こでもふひとついひやしやう、女といふ字を三つか
けば、かしましいとやらいふ字で、これもおしやべり
にはこまる、ひいき「またたはごをぬかすか、うぬら
がでるまくじやねへ、きへてなくなれ、頭取「穴探
しとか申まして、女郎かいの穴をうがりまするごこ
ろが、三、こうれい八條目でござりますが、このひごこ
ろ、まことに上手とこそ申べけれど、さる有職がた

のおほめことばでござりました、それ故くろの上々
吉、おんながたのくはんぢく、

色子、子役之部 京傳作

頭取「けいせいけい丈、子役にしてこまかいしうち、わ
ざおぎふりのみはへ、かんしん、ひちりき丈、よ
しはらを地りにみたて、のしうち、かんしん、

傾城鐺 喜三二作

頭取「新造圖彙、天文ちり姫のやくよし、ことさみせ
ん丈、てうちんもんづくしのおごり、きれいごご、
ともに御しゆつせをまします、

湖都洒美撰 京傳作

頭取「總くはんぢく、小書いしやうつけのかい山、遊子
方言丈の藝どうを、評ばんつかまつりませう、學者も
つともようしが論語にならつて、著述しましたが、法言
とかきまし、のりほうげんと申、また萬國のことばを
しるしましたを、かた方言と申まする、そのやうしが

遊子方言 田舎老人作

△總巻軸

かたほうげんにならひましての遊子ほうげんとみへ
ます、老人「どうせいの小さつしも、みなこのしうち
を、みならひましたとみへます、頭取「くろ仕立八たん
みちじやう、第いちばんめ、けいせいはいの通り者の
役にて、船中からのやう子、土手のわるじやれ、大門
までのうぬぼれ、中の町のちや屋にての大鹽屋、大
れほうのおもしろみ、平氣なかをのおかしみ、大あた
り、次にけいせいにふられても、ぐつとすまし
て、大きなつらをいたされ、むすこをひき上てかへし
たば、次にひら大盡となられてのしうち、大切まづこ
んにはこれぎりといわれまするまで、大でき、
ほうけん丈のくはんとこの御祝儀、ひとつしめませ
う、ジャン、もひとつせ、ジャン、
享和二いぬのとししん板

作 十文字合自忍
者 菊屋藏伎
並木新作
神田通新石町 中村善藏板

戯作評判花折紙巻下終

繪草紙 菊壽草上巻

鶴屋の羽をのす初日影
門松むらのしめかざり
さつとひらげば
天の岩戸屋
村田の畔をゆづりあふ
御代は東も
西村も
どもにおさまる
いせ治の神風
奥村の瓢箪から
駒がいさめば
その大門の
まがきの蔦屋
花の廓

丑平新板繪雙紙總目錄

△立役之部

○見立三芝居役者の名に寄る左のごとし、
但位付は役者の位にかはらず、
榮華程五十年 見徳一炊夢 萬 座
蕎麥價五十錢 千々の初夢は三國いち川團十郎、
ほうび 通増安宅關 いせ次座
上上吉 座頭株の辨慶が洒落は數年の幸四郎、
上上吉 知珍不 意々々御代之御寶 奥村 座
借金を質に取とは古今いまだ三津五郎、
上上吉 鬼の子だから いせ次座
おにも角をとらるゝ六だんめの團藏、
上上吉 初夢寶山吹色 岩戸 座
五人男のその市川の門之助、
上上吉 ふじはあさまにうたれて宗十郎、
淺間や煙競蕎麥や眞木 鶴 や 座
上上士 突渡最惠來榮 奥村 座
たゝみの下から金が出たおやお八百藏、
上上士 間違月夜鍋 奥村 座

もろこしの郭巨がこじを彦三郎、
 上上吉 七笑顔當世姿 いせ次座
 七ふく神のまはりせりふは水車の淀五郎、
 上上吉 朝比奈唐子遊 西村座
 ほていのかはりにあさひなを四郎十郎、
 上上 敵討駿河花 岩戸座
 上上 敵討魚名劔 いせ次座
 上上吉 化物世繼鉢木 岩戸座
 大入道のむすこ殿はまだ化物の雛助、
 ▲實惡之部
 大上上吉 大違寶船 鶴や座
 鶴やの作に秀たる多くの仲藏、
 上上吉 極通人由来 岩戸座
 大通のうらをゆくとはわるい友右衛門、
 上上吉 當世大通佛開帳 鶴や座
 しやくせんだんをねじやかにしてせまい世界も
 廣右衛門、
 上上吉 本性有難通一字 松村座
 ゆび切丸をかくし置いけの中村助五郎、
 上上吉 雀敵 冷水灰毛猫 鶴や座

猫のくひそめたまた、びの又太郎、
 上上吉 蟹午房挾多 奥村座
 猿は人にならんと四國を廻はつて三甫右衛門、
 上上吉 福夢想大黒銀 岩戸座
 大黒も金をかりて才覺をまつ助、
 ▲敵役之部
 上上吉 鳥行水諺草 奥村座
 早く行て水かけ論はさきこからすと勘右衛門、
 上上吉 交古世昔噺 鶴や座
 さいみやう寺に花さきちをよくませ小次郎、
 上上吉 豊福 毛生太郎月 西村座
 兩國のくすりうりはひげのはへる松本大七、
 上上吉 緑組連理鯨 村田座
 あく女の一念はなまづとなつた宗三郎、
 上上 其後瓢様物 鶴や座
 やつぱり通になりたがる通の三甫藏、
 上上 古實家七加減 西村座
 化物鼻が挫 奥村座
 上上 ばなし菊壽盃 村田座
 ▲道外形之部

息子萬金丹 萬や座
 長いきの妙薬より金をもつが大きに徳治、
 上上吉 うんつく太郎左衛門咄 いせ次座
 なにもかもうんつくにせん石彦介、
 ▲若女形之部
 上上吉 鐘入七 漉返柳黒髪 つたや座
 人化粧 いく度も見あかぬは道成寺のかね菊之丞、
 上上吉 異 出見世吉原 松村座
 うつくしきは楊きひともなんとも岩井半四郎、
 上上吉 女郎買糠味噌汁 松村座
 ぬかみそのまづい友だちは女郎かいの常世、
 上上吉 嗚呼世之助噺 萬や座
 女郎かいのいましめの女心を久米二郎、
 上上吉 振袖江戸紫 村田座
 吉三郎にそふてはもうふり袖で乙女、
 上上吉 田鼠 化而鶉の白拍子 いせ次座
 白べうしはころぶが一大萬菊、
 上上吉 南州 遊客古事付太平記 松村座
 北州 太平記のやつしはもちつとで上上吉次、

かべにざら奥州ばなし 西村座
 ためて 古呂利山椒味噌 西村座
 圓通警 大通光 運開扇子花 萬や座
 花扇のけいせい事はゑてもの、里好、
 上上吉 通一聲女暫 鶴や座
 むだはよし澤でちつとわからぬあやめ、
 ▲若衆形之部
 上上吉 大通 時代狎の嫁入 松村座
 ちんも尾をふつてうれしさの川市松、
 上上吉 狸もち餅屋 松村座
 口にくゝんでもちつくしはさつてもよいこま
 藏、
 ▲子役之部
 上上 東都み 大津名物 岩戸座
 上上 化物箱入娘 西村座
 上上 目出たし粉や鼠 村田座
 功上上吉 桃太郎一代記 村田座
 鬼ヶ島はさつても廣治、
 ▲太夫元之部

鶴屋村田屋	奥村
松村西村	いせ次
岩戸屋	葛屋
▲作者之部	
喜三二	芝全交
可笑	南陀伽紫蘭
風車	婦人龜遊
▲繪師之部	
北尾重政	通笑
鳥居清長	是和齋
北尾政演	
北尾政美	
勝川春常	
北尾三二郎	
以上	

北條の三鱗を一寸と葛西の太郎月

あら玉の年たちかゝる、ちよんく幕あけましてよい春狂言の、曾我の世界に申さずとも、皆御存の在鎌倉、谷七郷のにぎはしさ、和田秩父の大名小路はいふにおよばず、軒をならべし雪のした町、ほしの井戸へは水道をよび、土のらうも土手藏となり、なめり川へは橋をかけて、青砥が落した錢の敷ほど、往來の者から取、ゆひが濱にはつき出しが出来て、すみ屋四季庵のかし座敷、うたひつまひつの扇が谷に、琴三味せんをひきが谷、油断のならぬ娘の子は、小袋坂でころび、三浦の片貝をうかむ瀬にして、瀧のみの大きさは、銀杏の木の面影は、芝居のやぐらの紋にのこりて、桶とたちならび、朝はどうから入り来るく棧敷のだんかづら、のぼりつめたるけはひ坂、春は中の町に花をうへ、秋は燈籠、にはかにいひつくされぬ繁昌なり、こゝに先年ふじの牧狩のお馬を出せし町のほとりに、うろこやといふうとくなる町人あり、としごろ鎌くらの諸大名へお出入多く、けふは梶原様の御用、あすは和田様の御酒ゑんと、草すりのひく手あまたなる中にも、北條家の御屋敷へは、久しいお出入得

意場にて、大殿時政さまより、政の字を下され、政兵衛と名乗、物前などの御用をたせしが、御用人の佐野源左衛門ごの、すかんびんからおとりたてにて、にはかにおごりがつき、いでその時の全盛は、けはひ坂にて指折の、加賀屋の梅がへ、越中屋の櫻井、上野屋の松多だといふ、玉ぞろへを一座にて、牽頭末社にいざなはれ、酒宴遊興にふけりしかば、あびくの果には、北條の家につたはる、金の三つうろこをとり出し、うろこやを頼み、七難そくめつとやらかしたり、そもそもこの三つうろこは、北條の大殿様、まだおわかい時分、江島の辨天の開帳の時、北條の北の字のてうちんにて、朝参りをなされしに、さすがべん才天は女體にて、くらまぎれの水茶屋へ御出現まし、ちよんの間の出合の折から、起請せいしの神かけて、爪のかはりこけをへがし、あたへ給ひし三つうろこことかや、かゝる大切の代物でも、七つ屋が手にわたり、八ヶ月なはめに及びしが、去年の夏の洪水が月切れにて、利根川の川上もみづかさまさり、番頭殿のきれ文にて、むざんやうろこはながれにけり、此事殿へもれきこへ、源左衛門はもとの浪人、うろこやはお出入さま

り、魚鳥留の門前を、肴賣が通ふるやうで、一向はじまらず、何とぞ三つ鱗のゆくえをたづね、ふたゝびおやしきの御用をたし、もとのごとの分限とならんと思へども、質のながれと人のゆく衛、たごへゆく衛がしれたればとて、うけもごすべき金はなし、近年は無言の鐘もつきてがふえて、こゝに三ヶ所、かしこに五ヶ所、水いなりはわりがわるいの、第六天はかすりだのこ、二百人講四百人講、入相の鐘に花も實も、取つたか見たかの世の中なれば、中々もつて思ひもよらず、ある夜の夢に、何かはお先まつくらにして、黒仕立の三つ紋かど見れば、ふたつもじの牛の角、くらやみからによとはへたり、ア、ラふしぎや、ことしのるとは丑のとし、まつた夜も丑みつなるに、かゝる大きな牛のあらはれしは、丑の時参りのふみ臺か、市原野のおつかぶせか、なんにもせよとりきんで見せても、牛の角を蜂の如く、のろりく尾をひいて、いづくともなく出ゆけば、もしもせんぎの手が、りかど、牛の小便十八丁はまだおるか、十三りさきのかまくらから、長々と跡をしたひて、一つの寺のかたへに着ぬ、これこそ牛にひかれて來たれば、さしづめ

信濃の善光寺かと思ひの外、むさしの國こう福寺、牛の御前の鳥井のまへにて、さしもの大きな牛、いけすの中へどんぶらこど落ちるやいなや、にはかに水さかまき上り、龍門の瀧のごとく、数千丈の上より落れば、水中より一つの鯉、うろこをうごかしひれをあげ、たちまち飛龍のすがたを變じ、ヤア〜うろこやたしかにきけ、われはこれ、鎌倉の葛西が谷、太郎が家の洗鯉なり、久しく生簀のうちにありて、粗板の上になをされ、已にかうよと見えたる所に、汝が質にいれたりし、三つうろこの徳により、ふしぎに命たすかりたり、それ猿は人間に毛が三筋たらず、鯉は龍に三つうろこ足らず、つたへ聞北條家には、おらがおかさん、江島の辨天のさづけたまひし、みつうろこありと聞、これこそは最くつ竟、きたさの源左衛門が皮骨にわけ入、酒色を以てかれをまごはし、汝をたのんで質物に入、去ぬる大水にながれし時、かりに鯉川春町と名のり、人間のすがたと變じ、ふるくちぎの浮木にのり、なんなく鱗はとり得たれど、おれ一人天上して、わいらが方に天井見せるは、あまり一國なものなれば、向ふの牛のごせんを頼み、さてこそ汝をよびよ

せたり、それ鱗はこけなり、こけはすなはち不通なり、今天下に大通の道行はれ、こけはさら〜入用なし、上は北條のおれき〜、下は汝らごとき町の町人、貴賤上下ひつくるんで、皆大通へみちびかんと、こけやうろこは、此方へせしめうるしと出かけたり、しかれども汝が家はふるき家にて、源のより信の御内にまいりては、から紙表紙一重へだて、竹つる金平の用をもき、花さき爺が時代には、桃太郎鬼が島の支度を請負、舌きり雀のちうを盡し、兎の手がらの數をしらす、その、ち代々の記録をつかさどり、青本々々ともてはゞされ、かまくらの一の鳥居のほとりに住居し、清信きよ信清満など、力をあはせ、年々の新板世上に流布す、しかるに中むかし、寶りやく十年辰のとし、丸小が板丈口戯作の草紙に、始て作者の名をあらはし、外題の繪を紅摺にしていたせしを、その頃はまた錦繪もなき時代なれば、めづらしき事に思ひ、所より出る草紙の外題、みな色すりとしたりしが、汝ばかりは古風を守り、赤い色紙に青い短冊、たいのみをすに、よもの赤、のみかけ山のかんがらす、大木のはへぎはで、ふといの根がてんか〜の位のしや

れなりしも、思へば〜むかしにて、二十餘年の榮華の夢、きん〜先生といへる通人いで、鎌倉中の草雙紙、これがために一變して、ごうやらこうやら、草雙紙といかのぼりは、おとなり物となつたるも、おかし見やうみまねに近頃は、汝が家のさうしまで、上書を紅摺にして、久しいなじみをかゑしたり、今われ鱗を得たるかはりに、大通の奥義をさづけん、此一巻を所持なす時は、よろづの事に通達して、見通しの辻法師の、かん通よりすぐれ、通用通屈の自在を得、通の又通、ふう通の帯より長き一通なり、今よりなんぢ高慢齋と名乗り、諸國行脚は先さしをき、近刻の繪雙紙に眼をさらすべし、すべてゑざうしの作、年々歳々穴相似たり、その出來たるをほめ、その不作をわらひ、髪ゆひ床や、錢湯のむすこ、株のうけがよいか、又はこのさまかみ様たち、椽から落たおちの人、若殿様の御意に入るか、この大通のまき物は、汝がための天眼通、芝居通の頭取となつて、そのよしあしを定むべし、ほめるもそしめるも、高が繪雙紙といふもの、多くの本の名をよび出して、かひに來るたねとならば、大きな板元の仕合なるべし、陰徳あれば陽報あり、ふ

た、び故郷へ立歸り、錦繪をひるがへせと、いふかと思へば夢さめて、かたへに一つの巻物あり、これ大通の巻物ならん、大願成就かたじけないと、ぐつこのばした腕は伸、大あくびして目をさませば、これも又夢にして、火鉢にくべし栗餅の、まだやけぬ内に、例のかし本屋が門口から、モウ評判記は、

明ましたか、

安永十年巳の初春

繪草紙 菊壽草上卷終
評判記

繪草紙 菊壽草中巻

立役之部

極上上吉

榮華程五十年
壽參價五十錢

見徳一炊夢

三冊

頭取「東西々々、高うはござりますれど、千兩の夢の見徳いづれもおそろ邯鄲の、枕をわつた趣向、通町組「なんだ外に板元もない様に、つた屋を巻頭とは、ひいきくそをくらへ、大門へはいつた事はないか、細見は目に見へぬか、頭取「エヘン、初春早やいざござは御無用、作者懸川氏休まれて後は、當時のき、もの、喜三三丈の狂言、板元の細工に流々、仕上の仕折を御覽なされい、薦組「むだなやつらにかまはずと藝評々々、頭取「此度蘆の屋清太郎の役、先幕明にむかしの事なれば、うそかしらねごとのいひ分出来ました、次に淺草並木、榮花屋夢二郎、かんたんの枕をかして、半時の夢十六銅より、五十年の夢金千兩までの書付、古今無雙の大出来々々々、國左衛門が若どう、三十二文で船まんぢうの一時の夢、ぞうり取折内も、十六文で芝居の夢一トきり、中にも武左衛門が夢は、一ヶ月銀百目

とあれば、各別實がありて面白いとのせりふ、諸見物はらをか、えます、扱清太郎千兩の夢を見んとて、三ツぶとんのの上に座したる見への繪よし、夫より江の島、かまくら、京都やまごめぐり、遊興遊藝のおごりの所おもしろい事、わる口「みせいは夢さめての所で、夢がさめたと思つた、頭取「先々末を御覽なされませ、清太郎故郷へかゝり、番頭代口が代になりて、百萬兩のつかい道算用たちがたく、かし方も百萬兩、二分六分七分、二分何がしまけてやらうとのせりふ、こまかい事、つゝに發心して、五十年の榮花の夢さめて、二八のそばのあつらへ、けんごん箱の角からすみまで、つる、つた屋の、大門口をひらいて初笑、今にはじめぬ氣さんじな、夢物がたりの夢よりは、ちと實がありて大當り、ひいき「薦重さんしめませう、チョン

上上吉

通増安宅關

二冊

頭取「かやうに候ものは、かゝの國どがしの何がしが安宅の關、鳥のそらねより、はかりごとは光次を以て貴しと、通りのよい印通、それゆへほうびをそへました、ひいき「大にしてもよい位だ、はやく印通のしやれ

上上吉

鬼子寶

三冊

頭取「此度酒てん童子がわすれがたみ、鬼市と成、草も木も、わが大君の御代なれば、おにも角を折、元服して、水かみにうつつす所、角の跡のこりし繪こまかいこまかい、わる口「みやまゆうこくといふ事があるか、深山幽谷の事ではないか、頭取「それは書入のそさうでござりませう、次にかくれんぼの鬼のいはれ、鬼のするのせんだく、鬼のくはんらく、いづれもよいぞ、鬼も十七の里がよひに、鬼のきせうの文句うけ取ま

上上吉

知珍ぶ
御代之御寶

三冊

頭取「扱瓢箪から春駒のとんで出た様な思ひ付、とてつもないおつりきな、きやんの口合よし、此度くらまや金藏にて、もつたが病といふ奇病におかされ、借金をしちにどるとは、ついぞねエ商賣、はやりやせう、さ

が聞たい、頭取「此度むさし坊辨慶の役、たびの衣はす、かけの謠の出、駿州なんどぬしのはらはなんど、のせりふ、夫よりとがしが組下、つかみしめ之丞をだきこみ隅田川一樽、金うり吉次がうりのこりの品一包、ぶしつけながら、せうの物をせうといふ所、きつい事、くはん進帳の文句は、あいの山といふもの、たはへも出来ました、わる口「とてもの事に、くはん進帳の文句に、おかしみの有さふな事、棒つき「通れ通れ、頭取「さてあたかの關をこへ、よろこびの餘りの舞の身ぶり、そつちも如在はなれども、こつちのぼつぽに一物がありそうなどの歌、かんしん、次に静もしめの丞へ、にぎ、のりくつを用ひ、義經かぶ原さかの出入も濟、梶原辨慶に向ひ、貴公は座頭かぶだから、御しう儀は千年衣川へ立往生の分とあ

した、鬼の女房のきじんこのいさかひに、どうなすにまぐろのもの、是がくはれる物かとのせりふよし、福は内鬼は内とうちおさめて、一體きじんに横道なしの藝なれば、此度立役になられました、

上上吉 初夢寶山吹色

三冊

若組頭取藏前はごうするのだ、頭取何やかや町でおそなはりました、さてもちかき頃は、江戸中にふる道具やと水茶やと、町醫者ほど多き事はなしとは、作者可笑丈の名言、此度町いしや富由廣言にて、藥取のあくびだら／＼の繪よし、それより天狗にさらはれ天々風を引、このほか水ばなが出ます、夜分などは少しかみませぬと、はなの先迄つたひますとのおかしみ、天ぐよりさいをさづかり、夢占となりての藝よいぞよいぞ、わる口「ぼうづの藥箱持も、見えへものでもあるまへす、「初夢によすぎる位だす、「次郎坊とつかうすと、めつたやたらにすすすとしやれのめす、頭取次にすつぼんのかうらをはなす様に羽をはがし、五人男と名のり合まで、出来た／＼、

上上吉

ふじや 煙競蕎麥屋真木

三冊

頭取此度富士太郎の役、富士あさまの狂言を、そばの

へる、ひいきそれは板木やのそさうだはへ、

上上士 間違月夜鍋

二冊

頭取此度もろこし、くはくきよが孫藤兵衛の役、孝行の事につきて竹の子が出ると、今でもいつぶんははづまねばならず、こがねの釜ほごねうちよいよ、天の御めぐみはないとは尤な事、扱月夜にかまをとは聞たるに、なべをぬすまれておかまをおこし、初夢はたかかと思へば、とんびこの夢違、こゝでほごけました、天社日にも悪をすればあしく、黒日にも善をなせばよし、なすびのかはりに、白瓜もいはひがらとは、よい教訓々々、隠居通笑丈の作は、ひやうひやくの内、つまり／＼に教訓がおじやる、

上上吉 七笑顔當世姿

三冊

頭取くらやみから引出した丑の年のしんぱん、み、をとりて花のお江戸、西宮三郎兵衛の役、ほてい市右衛門が十代の後胤、布袋の十右衛門とはよいぞ／＼、しやかいたけをなげやうとは、行徳のほしうんごんで、ふどいの根は出来ました、わる口「べんてんおふでが所はしやれ本の様で、ひいきの「わる口」のと、札をはつたがうつとしい、頭取「大詰七ふく神のやつしよし、

手打に思ひつき地の全交さんの作、淺間がせりふに、たはごを廣右衛門にすたく／＼にするかやとはおかしい事、次に娘おなつが、せうじにのこせし歌、はてしなきうきよの中にすみだ川、ながれの水をいつまでかくむとは、むかし吉原の西田や九重が、かぎりなく遠きあづまにすみだ川、たえぬ流れをいつまでかくむとよみて、あてた狂言を思ひ出してか、一體大坂風の人形の身ぶり、かき入のこまかな藝ゆへ、おやしきでよくうけとられます、

上上士 突渡最惠來榮

三冊

頭取此度らう人末吉加内と、成義平と碁をうつ所、かつたりまけたたり、まけたりかつたり、はらをたつたり、わらつたりとは、てうごあいこと見へます、わる口「嘉内牢人にて、その身しゆくはんの望とは、しくはんの望ト云事か、頭取「左様々々、次に義平が金子ふんじつしたるを、嘉内うたがひをうけ、金をと、のへわきまへて後、す、はきにその金が出る所、漢の直不疑がおもいれよし、扱しま原にて、義平けいせいよし野を受出まで出来ました、わる口「いかによし野が雪の名所じやとて、せうじからのぞく、かげぼうしまで白く見

上上士 朝比奈唐子遊

三冊

頭取此度小林の朝比奈にて、ほていのるすをあづかり、つるとへびとの首引よし、唐子共がもちつとあそんだら、又酒のかんだらうは尤々、ちごくめぐり、もんやぶり、ともにわかりました、仕舞に大あくびで目のさめた趣向、馬喰町の親方しめたぞ／＼、

上上 敵討駿河花

三冊

上上 敵討魚名劔

三冊

頭取兩人の衆めづらしい、かたき打するがの花をちらし、魚名のつるぎをぬき合せて御大儀々々、わる口「魚名劔は、から紙へうし時代の本だ、さてしもあるべき事ならねばなご、いふせりふは、大地震と砂のふつた時代のことは、頭取「イヤこういふのもなければ、いなかみやげにこまります、

上上吉 化物世繼鉢木

三冊

頭取扱みこし入道のむすこ、かふみつ道の役、かは太郎、海ほうす、又は品川のねこまた、片身がはりに女郎とばけたかたちは、さすが鳥居をこした繪師、清長さん出来ました、わる口「名題の世繼の繼の字が、櫃といふ字の様でうけ取にくい、頭取「弘法にも筆のあやま

り、先藝評をおき、なされませ、みつ道諸こく修行に出、も、んぐはが方へ來りしに、幼少よりそだてしうばがことばに、ヤレ〜おまへがよく大きくならしやつたを見れば、わしらはよく人間にもばけませぬとおかし〜、扱雪の段さいみやう寺のやつし、西竹林の鶏三足、なんかいの鯉魚、北州の古狸は大出來々々々、戀女房の四役、一所にされた化物のやうな何がし殿に引あて、巻軸にすへました、

▲實惡之部

大上上吉

大違寶船

三冊

頭取「是はつき地にあらぬ、芝の先生の作、繪は西東みんなみに北尾の親玉、花藍の繪物、いはずに巻頭にすゑました、ひいき「サア〜早く藝評がき、たい、頭取「此度大職くはんかまたり公のきんだち、ふじほたんここの役に、辨天より金魚不肖の玉をさづかり、船中にてわに、出あい、堀のわさんの地口出來ました、二役俵藤太にて、浦島太郎と乙姫のきせうをやかんと、取ちがへて芝居の番付をやき、山庄太夫と八百やお七の出たるを見て、お七を河東でかたると、山庄太夫があまる、山庄太夫があまる、山庄太夫を外記ぶしで

かたると、お七があまるこのせりふ、お七山樹で目をつき、手じろの猿に、赤ゑいのいきやもをたのむとは、いやはやこんだ事、次にたんこうびくにを、あまど見たて、のぬれ事、夫より兩國の茶屋でより合をつけ、龍宮講中の幟は出來ました、尼はふなばたに立て、猿廻しの猿といふ身、かめはかめかきとなつて、かごかきの身、たはら藤太の年のよりたるを、門跡のせはやきの様だとはおかし事、ちやちやなんだか狐を馬にのせた様はなし、熱病やみの譚語と見へる、ひいき「此死さがりめ、すつこんで居やあがれ、くやし〜ば香の物をがり〜とかなで見な、わる口、おしい事に、三しまごよみと、川柳が末板をやげんでおろし、きぬぶるいでふるつた様な書入でよみにくい、ひいき「それだから、年よりには見るなといふは、頭取「夫より龍宮の大取込、七人は七ふく神となり、さる、乙姫、かめ三人を、つる屋は仲間の龜をたのんでふるまいとは、御ていねいな事、先評よく大慶々々、

二冊

上上吉

極通人由來

頭取「此度天野幸介と成、極つう人とならんと大通の上を行、友だち文りが所にて長ばなしの所よし、文りが

妻はおとせとて、扇屋の花あふぎもそのけ、はまむらやごつこいとおさへた評判出來ました、夫より幸介は、よしはらよりかへりに、うしろからくる人が、てうちんをうれしがらうと、てうちんをふきけす所、こまかい〜、新宿にてむすこのもてるを見て、こ、はまたおきすばなるまいとのいひ分、にくてい〜、あさき草ざうしは子供の見るもの、祇公が間男をするを、文りがしらぬかほで、ついに女房をやるとはあんまりつまらぬ、頭取「夫故びしやもんのつげにも、通人になるもいらぬもの、大がいな人間になるべしと御座ります、

上上吉

當世大通佛開帳

三冊

頭取「此度信州おやこちぞうの役、六道を四すぢへうし、めぐろと品川の二道に、地藏の經文出來ました、めぐろの犬、きちの宮のきち、さる町のさるに、あはもちをやり、桃太郎のやつしよいぞ〜、夫より品川にて、ちよつとお目にかゝりやせうが、たび〜、だかこうあらふと思つたとはおかし事、地藏女郎をてんぐがさらつて、二本ゑのきでけんけをむしるもおかし、二役ねしやかにて、しやくせんだんの木のあ

いだの入滅に、五十二類のかけとりごもなきかなしむまで、古今の大出來、難波の聖遊廓このかたの、大當り〜、

上上吉

本性有難通一字

二冊

頭取「此度似た山ふ通太にて、ゆび切丸の一腰をぬすみ、かういふ所は先友右衛門といふ身だ、しかし友右衛門には、ちつと男がよすぎて、けんぶつのうけがわるからうとはよいぞ、おしつけ客をつらまへのゑんまごう、たづねいだして天上みたの五十歳も有がたい、

上上吉

雀敵冷水灰毛狸

二冊

頭取「此度ひや水うりの清右衛門にて、へいげ猫をばうすにする所よし、次にすゞめよしはらへうられ、かごにのりてゆく所の繪あたらしいぞ、雀海中に入てはまぐりと成、猫とのあらそひ、國せんやのみえよし、へいげんねこ冷水のぶたいから、さくらあめを見とれる所よし〜、

上上吉

蟹午房挾多

三冊

頭取「此度御存のさるとかにを、あたらしい取組、かにかうすきねとつきあひたるはおかしけれど、三百五十十になるとしよりのはなしとあれば、武内より兄き

と見へるといはる、所よし、次に兩國すゝみ船のて
いの繪、猿が人になつても、ごこやらさるのつらつき
出來ました、わる口「なんだか仕まひに、かにがむじつ
のなんをい、かけられ、正直のかうべのうへにかに
やざる、さらりとわかるとはせつないひ分だ、頭取
「先大てい、」

上上吉

福夢想大黒銀

三冊

頭取「此度ふくごくや來介にてしはき所よし、甲子のふ
るまひ、何ぞ出すかと思へば何も出さず、茶のこくな
る事尤々、次にごく貧のいしや殿、年中しちのりと、
せつたの直しちに、年とらるゝとは名言々々、次に
大黒にて、跡ひげの工めんわるく、びんぼう神に金を
かりらるゝ所よいぞ、大黒かごにのりて與一兵
衛を思ひ出し、なにさ袋の中は、米と二朱ぎんがちつ
と計とは出來た、わる口來介が中途で立ぎえがして、あ
だちが原のうたうやす方といふ物だ、頭取「イヤ、
末の所にもつと計ことはつて御座ります、扱三百兩
びんぼう神へ返す内にて、二百兩の内がりは有そふ
な事、當世々々、

繪草紙 菊壽草中巻終
評判記

所、道成寺のおもかげ、わる口繪にかいた所は、けさほ
ごのはんじ物といふ物だ、頭取「次にかにせつぶくし
て、のうみそいださるゝ所、よういたされまます、

上上吉

豐福 茶釜 毛生太郎月

三冊

頭取「此度ふんぶくの役、あふぎやのはまあふぎになじ
む所、さして評すべき事なし、さて神農をゆめにみ
て、笛と草のはをさづかり、此くさのには、本郷三丁
目に、しつくいであつた、しんのうの口にくはへてご
ざるとは出來ました、川柳が選にも、「おもだかかを神
農横ににらみつめ、見功者」その木薬やで思ひ出した、文
ぶくたむしの薬を求る所、薬種やのふくろの字は平
六と見へる、頭取「扱兩國のくすりうりといふ見で、も
このやらうにたちかへるは、ものぐさのやつし、大て
い、」

上上吉

縁組連理鱈

三冊

頭取「此度悪女おたふと成、むこに見らるゝ所、うしろ
むきにて緑の有のか花ならめと、三味せん引所よし、
弟子入のゑだるに百三十五番とかいてあるは、なん
ぞのけんごくにもなりそふな事、次にもちやがまん
ではん寺へかけ込、つりがねからなますが出るこは、

繪草紙 菊壽草下巻
評判記

敵役之部

上上吉

鳥行水諺草

三冊

頭取「此度からす勘左衛門が子にて勘當をうけ、からす
金にて金をため、土手にてさきとからすのたて出來
た、夫よりひなづるとさきのかみすき、鳥の行水
ともによいぞ、わる口「ほとゝぎすさうぐひすは、ごこ
の藪から棒に出た、ひいき」此くちばしの青二歳め、羽
ばたきをして、唐がらし水でものませられるな、頭取
「なるほどほとゝぎすさうぐひすさふしと出たやう
なれど、一體鳥づくしの趣向で御座れば、お目長にご
らうじませ、扱こんれいのとりもちに、とりにもちの
いみことば、かつ鳥とびの段まで出來ました、

上上士

交古世むかし噺

二冊

頭取「此度花さきぢに、さい明寺、さるとかにこのま
せこせ、いた琴のことせめの所よし、さるは左二兵衛
がからだをかり順禮となり、かにきよにめぐりあふ
てのたてようござる、さてふうりんをめぐすのまく
ごんだ事、

上上二

其後瓢様物

二冊

頭取「此度野通にて、世の中こんな物の後日、芝居のさ
じきのうしろのていこ、せり出しの繪は出來ました、
萬菊とこま藏と、勘三郎がおないごしなどゝの芝居
通、こまかい事、一體世界の通を、狐にしてのいまし
め、御大儀々々、

上上

古實家匙加減

三冊

上上

化物鼻が挫

二冊

上上

おとし菊壽盃

三冊

頭取「古實家丈は、すがはら傳じゆにおぬいの道行、忠
臣藏も一しほと加味した匙かげん、もたんちいは金
平にあふて鼻がひしげ、菊壽殿は例年のおとしばな
し、いづれも出來ました、

道外形之部

上上吉

息子 妙薬 萬金丹

二冊

頭取「此度六十四郎と成、親より一萬兩もらひ、長生の
薬をもとめ、ついたてにかいたる薬種の中に、魯國生
姜一片などはかんしん、ひいきおしい事にながつか
ぬで、見物のうけとりが心元ない、頭取「りう土川の水

を入たる、ふらすこ計が南一がつこうのものは當世々々、大詰大だんなのはかりごとをあらはす所、高尾と申たはわたくしのか、あ、生姜はきうとうのに豆の残りとは、大出来々々々、

上上士 運太郎左衛門咄 三冊

頭取「此度うんつく太郎左衛門にて、古道具やの畫よし、古物をもとむる所に、しんのうの角二本、ゑんの行者のあしだのは、雨乞小町の長柄のからかさ、那須の與市がばら／＼扇とは出来ました、次にたいどり大明神の神託、正直のかうべに神やごる、たい何事もうんつくの物、珍重々々、

▲若女形之部

上上吉 鐘入七人化粧 渡返柳黒髪 三冊

大せい「女がたの巻頭はだれじやく、頭取古めかしうはござれども鐘入の所作、ふるきをたづねてあたらしく、すきかへしたる柳の黒髪、わる口「ごうりで去年袋入の本にあつた、いかに沙利場が近いとて、渡返しの淺草紙を巻頭とは、頭取「それゆへ大の字をつけませぬ、扱田原長者が娘おひでと成、あんちんどのぬれ事、青さぎときつねのまちがひ、龍と蛇の大だてを、

五位さぎの火でけしてしまひ、引返し幕、ばあきんせいの鐘入に、二役得手もの、いなか娘と成、ゆるいのみまきぞへにあひ、女湯へ入る様に、七人一度にかね入りの長唄、大出来々々々、大詰七面大明神とあらはれ給ふまで、きつゝいもの、

上上吉 異國出見出吉原 三冊

頭取「此度けいせいすまぎぬと成、勇助とよしはらを立のく所に、介六このかたのさうごう、此晩とまりあはせた客人は、めいはくなりとのせりふよし、夫より龍宮の巻の後日狂言、しんのしくはう帝、かたをうたせながら、四つ目やのないうやくかうといふかすていからもありがたし、あふぎやの手水ばちの水は、はんどもいまとのしやれ、近年はしやれがうつとしい、もうこうらい屋でもあるめへとは出来ました、

上上士 女郎買糠味噌汁 三冊

頭取「自在庵が句に、けいせいと見たはひがめか隅田の春、此度けいせいまつわやのからさきの役、九十郎とのぬれ事、九十郎かごにのりて返る所、すだれはおろして下され、のらぬわしがてれると、そばからいふもおかしい事、百兩ごりのとみの札を女のかふ様に、の

りだのなんだのと、むねがわるいも出来ました、わる口「何かいひ出しに、九十郎は／＼／＼とつらが出て文吉はも飛目だはへ、りくつ者、文吉が九十郎をそゝり出して、つゝゐには九十郎をつき出してしまひ、しまつて家とみさかへるとはつまらぬ事、頭取「それがすなはち、いませめかもしれませぬ、

上上士 嗚呼世之助噺 三冊

頭取「先座付の口上に、喜三次門人、婦人龜遊初舞臺の新下り、いなか娘お菊と成、吉原へうられ、けいせいきぬ川と成、二役おかねかさねのやつしに、世之助板屏のつなをさるとは、夢にしてもあんまりむごい事、見功者「おかねが血だらけのかほはすごい、頭取「夫よりおかねがくび、帯をくはへ、せんべいをまはしながらくふこ、ちとはおかし、きぬ川すぎ大じんじうけだされし所、けいせいといふもの、みな此位のものなれば、むすこさん方、ふかばまりは御無用とは、しんの婦人の氣取ありがたエ、師匠はよし、段々ひいきも出来ますは今の間、

上上士 振袖江戸紫 三冊

頭取「此度八百やお七にて、吉三郎と茶みせのぬれ事の

るよし、二役けいせい梅川の役、大てい、吉三郎傳吉と、かたき打のま、のゑは出来ました、一體狂言の筋計わかりて、ちつとことばの花のない仕内、又こん春をまします、わる口「八百やお七にしては、火の用心のよい趣向だ、ひいきよいしめりのぬれ事ぬれ事、

上上士 田鼠鶉の白拍子 二冊

頭取「此度でんそがむすめおたねの役、うづらと化して、しらびやうし坂三津もち、つこうか、へいこうへいこう、わる口「まつくろな鼠が多くて、板行のわるい様できのごくじや、

上上士 南州遊客古事付太平記 三冊

頭取「むかしから繪ざうしの序は、半枚にきまつた物だに、一枚半の長口上は、通油町ほどあつてよく舌がまはります、此度はながあふみや長太夫となり、太平記のやつし、よしはらしはるの景事の繪は、にぎやかでよいが、次のよしはら品川問答は、新宿のかつほでちつとふるせ、

上上 べにざら奥州噺 三冊

上上 かねざら古呂利山椒味噌 二冊

頭取お二人とも一所に評しませう、べにざらかけざらは、しきたへ御用の女中衆の、かみのふうよし、まつり見物のさじきのゑもよいぞ、古より山椒は、氣にもかゝらうかと、おめでたいどのいひわけ、風の神の娘おせはも大てい、

上上吉

圓通誓運開扇子花

三冊

ひいきなせ大の字はあづかりだ、頭取あづけた物をおわすれはあるまい、よく御存のお方でござる、わる口なるはごごうか見申た様な本は、ごかくけいせい氣取、頭取「此度あらためまして評します、けいせい氣はま萩にて、あさ草の名所づくし、うばが池のうば、志道軒のおかしみ、中にもけしの助が、豆と徳利でまちぶせのたいこもちをなげ、かの、馬がやうじの矢にあたり、はづさぬ五尺の的、七尺さつておかげながら、去春袋入の金箱が、此度も又居なりとは御手がらく、

上上吉

通一聲女誓

三冊

頭取「當春女がたの巻軸、鶴屋の一聲、千句一句の女のしばらく、初葉やひめの介の役、とうざい、たつておりますが是よりどの口上よし、ゆびじつけんもおかしい事、しばらくのせりふは、諸見物なりをしづ

めてうけ取ました、二役江口にてうでをきられて、ふか川のおばあが取かへし、江口はふげん、おばあはびやくぞうとあらはれるとは、いやいや耳をとつて、はなへあてたうでの様な事、一體はなやかすぎた藝も、ちつと實のいるやうに仕たまへといふも、ひいきのひきだほしか、

▲若衆形之部

上上吉

大通狎の嫁入

二冊

頭取「むかしから鼠のよめ入、猿の姻とは物の本にも見へたれど、ついにないちんのよめ入は、なほろのもん所のゆだん、おもひ付よし、犬小便しながら供をする所も出来たり、首尾よくこん禮すみ、かないのもの雪のふりしごごくよろこび、程なく平さん、とりあげばばが、ちんのしつぽをもちて、一もつだどのいひぶん、ちんの干菓子子の折にあふ花むこ殿を、若衆がたはちつごごちつけさ、

上上吉

狸もちは餅屋

三冊

頭取「先幕明に、お子さまがたと下戸さま方へ申上ますどの口上、さはやかな事、わる口「ゑこう院前、清水もちの口上できいた様じや、ひいき「さて、物覺へのよい

やつかな、いく度くつても、下戸はあきはなにかい、頭取「初のまくは、みなもちづくしのせりふ、二たて目三たて目からの狂言、源氏物がたりにも、いせものがたりにも、やきもちはないなごはよいぞ、おこほにかけるもおかしい事、およねの役出来ました、其外の子役衆は、口の目録にのせました、

▲頭取之部

總巻軸

功上上吉

五冊

頭取「エヘン、是は御存じのもの、太郎、日本一の黍團子、ひとつふたつの赤子の赤本、五つやみつの比よりも、音にきこへしは松の青本の色、ひはちやとうつろふ、十八大つうのあまつ風、今吹返す初春の新版、かはりませぬ一代記、頭取やくよりここの巻軸、又ご開帳はかないませぬ、めくく、目明千人、ちかくよつて拜あられませう、わる口「こいつは、なんだか一つはもわからぬふしやれ、この大通の世の中へ、長々と五冊もの、も、太郎でもあるめえ、氣がちがつたか頭取、頭取「御不審は御尤、それ繪草紙は大のなぐさみ草にして、よろづの子だからのおしえともなるべきを、めつたむせうに大通々々として、間男の手

引、女郎かいの傳授、芝居の穴じり、にくまれ口のしやればかし、近年は狂言も立役がわるだくみをして、實惡といひぬけ、かたき役が半道をませて、さし出口の女形にきめられるは、そばから見るにしのばすの、すはんはまだ正しきにて、白鳥の聲色をつかひませぬ、よく人のいふこつたが、むかしから世が末になつたのなんのといへど、古風はやつぱり古風にして、なんぼつうな世の中じやとて、かみ置の男の子のひたゐに、鑷もあてられず、おびどきの半元服を見た物はなし、あら玉の春のあしたには、大路に門松たてわたして、御慶めでたうの、上下こそ、と行ちがひ、七五三でもくふかと思へば、うまくもない雑煮の膳にむかひ、ぎやまんぼりのこつぶに、すみだ川とも出そふな湯を、土くさい土器で屠蘇の冷酒をのみ、かすの子を奥歯にはさんだ、た、き午莠を手にもつて、まことにめでたう候ひけると、三河から百姓の布袋が来て、ソレ一ッぱいにしやれるのを見ねへ、ソレソレ桃太郎の巻軸もソレよしか、ソレうんといひねへソレ、

繪草紙 菊壽草巻 下終
評判記

跋

稗史小説可_レ以補_レ史、街談巷議可_レ以觀_レ情、辛丑春、都下書肆新刻_二稗史_一者、凡八家四十有七種、百二十有八卷、友人宇鱗氏爲_二之批評_一、滑稽入_レ冷、瑕瑜不_レ掩、余受而讀_レ之、以_二春宵一刻之談_一、蓋稗史之有_二三月旦_一、自_二宇鱗氏_一始、

四方山人題

稗史 岡目八目

繪師の惠方に向ひては
筆耕の吉書始
作者の言のはがためは
板元の藏びらき
外題ばりのひめのりの姫はじめは
表紙づけのきはじめ
いさむこゝろの馬のり初は
春の遊の船のり物
ひいきくの弓はじめは
お出入のあきなひはじめ

稗史 岡目八目

發端

夫在轉傳周の春王正月、暫の辭に曰、東夷南蠻北狄西戎、四夷八荒天地乾坤と云々、されば天地は湯屋でみたより大きく、萬國の新地の廣き事、なますの背中に載つくしがたく、要石に根繼といふべし、朝鮮にこうけいしあれば、おらんだに福輪とうあり、いんでんに巾着あれば、むすこべやの本だあたまた、大人國はまな板を下駄とし、小人島はひで楊枝を杖とす、其外手長足長の不都合なる中にも、はけ島といへる大國有、此國の人はけ長き事一丈二丈、釣竿の長きが如し、あるく時は風まけのせぬ様にとて、丁稚が跡からさん又にてつゝばつてゆく體、二鳥三齋圖會に見たり、しかるに此國の大王鴻以賢、はけ長の小首をかたぶけ、つらく、世上を鑑子の蓋、われ鍋にとちぶたさへ、いもせの道はある物を、われいやしくも一國の王と生れ、金銀まんくたりといへども、此國諸國と不通にして、色事の道傳はらず、傳へきく日本は萬國に

すぐれ、神のおしへいもせの道、色で丸めた丸山には、毛唐人さへうつゝをぬかし、珍説とやらんちんちんとやら、かもの入首、東國やの名山といふ女郎に打込、今日日本で専らはやる富本が、道行のおちよ半兵衛、お夏清十郎、お半長右衛門が、三日がはりに一日いれて、四日替りにしてくれろとの頼み、この作ら田には、さすがの左内町の先生もこまつて居るとの風分、われ何ぞぞ日本へ渡日して、色をかせいで見ん物と、有山海の湊、明州の津より、みかさの山を目當にて、猪牙舟にのり出帆せしに、海上にて難風にあひ、豊あし原の北の方、豊よし原の女護が島へふきつけられしが、此國の人はりを以てつゝつき、其上大風大雨に、ふつて〜ふりつけられ、せんかたなくて洲先の灘、ます屋の浦につかんとせしに、佃の方より、住吉とおぼしき祝髪といふ翁出て、昔衣々々と茶にしければ、是はもろこし白樂天がはいた場と、こちからまけてぐつと氣をかへ、眞ともにかへし、正風體の長崎に着船せしが、此地のはんじやういふもさらなり、漸船より上り、大通事々々々とよぶ聲なまりて、大通人々々々とはねければ、待まうけたる本多組、黒仕立

のきん〜、よい黒鴨の取れたる事と悦び、何の御用と手をつかへば、鴻以賢始よりの物がたりして、われ幼少より色をこのみ、戀の手習見習はんと、隣國のもろこしより取よせたる書籍凡數萬卷、十三經廿一史はいふに及ばず、一切經迄眼をさらし、少しも色の道を明めんと、肺肝をくだ〜といへ共、いまだ男女の情に通せず、何ぞぞ地色をなづけ、女郎にほれられる口傳ありや、きかまほしとありければ、大通人答て曰、そのまあ主が、高慢の四角な文字といふ奴が、近年以ての外の禁物、一トたびその字をよむ時は、大通變じて不通となり、女郎にふられ、武にたかられ貧乏神の氏子と成、出世榮花は思ひもよらず、今は周の史籀と大家も、親和織の煙草入と成、孔子の自筆の四書大全も、切艾のつゝみ紙と成、かゝる時節を見通しの、弘法さんの思ひ付の、かなにやはらぐ大やまと、繩を結んで丸の、字、鳥の跡で片かなの、ヨの字計出来る様な、そんな不自由な事にあらず、論より證據、大通の奥義をしるせしわれらが祕書、色事でも甘事でも、何でもこつちへ黄色表紙、凡一百廿有八卷、天もひげとよみ上たり、

寅歳新板總目錄

▲立役之部

極上上吉	夫は小倉山景清百人一首つ	たや
上上吉	是は鎌倉山景清百人一首つ	たや
上上吉	金涌物壬歳	鶴や
上上吉	七福人大通傳	いせ次
上上吉	樂和富多數奇砂	西村
上上吉	長生虎之卷	奥村
上上吉	寫音通風いせ物語	西村
上上吉	男邊瀆見通占	奥村
上上吉	兵衛淡把姑譽詞	同座
上上吉	祝増福壽相	岩戸
上上吉	四天王大通仕立	松村
上上吉	天竺徳兵衛花珍奴茶屋	いせ次
上上吉	石川五右衛門	鶴や
上上吉	鎌倉通信傳	松村
上上吉	教訓蚊之咒	同座
上上吉	男狩毛氈帽	同座
上上吉	介六利生嘶	村田
上上吉	うそから出た傾城の貞女名高江戸紫	岩戸
上上吉	誠から出た町人の男氣	岩戸

▲實惡之部

上上吉	擲討鼻上野	いせ次
上上吉	春狂言御仕着恆例間違會我	鶴や
上上吉	市川三升園	いせ次
上上吉	思ひ付たり五郎兵衛商買松	松村
上上吉	替つたり五郎兵衛商買松	いせ次
上上吉	化物通人寐語	西村
上上吉	道樂早出來	西村
上上吉	世界早出來	西村
上上吉	通神多佳樂富年	松村

▲敵役之部

上上吉	跡を老松我頼人正直	鶴や
上上吉	東へ飛梅	同座
上上吉	龍宮方便網大慈大悲換玉	同座
上上吉	淺草利生	同座
上上吉	唐土魂石千屋繁昌	岩戸
上上吉	日本住	同座
上上吉	地獄沙汰金次第	西村
上上吉	敵討染分手綱	いせ次
上上吉	敵討梅と櫻	西村
上上吉	化物會我物語	村田

▲道外形之部

上上吉	風雷神天狗落種	鶴や
上上吉	花が見芳野の由來	つたや

上

飯嫌女は同斷何 鶴や

▲若女形之部

上上吉 昔咄虚言桃太郎 岩戸
 上上吉 珍説雷婚禮 同座
 上上吉 御代參牛時詣 奥村
 上上吉 名響鐘龍都 村田
 上上士 むかし〜岡崎女郎衆 松田

上上十

舌切雀三の切 奥村

上上十

はんじ物やら 松村

上上

去御子様 奥村

上上

御好に付猫嫁入 西村

上上

藝者五人娘 村

上上

何所の紺屋 西村

上上

が染たやら 西村

上上

▲若衆形之部 村

上上

▲子役之分 田

上上

▲うろ子之分 田

上上

▲若衆形之部 村

上上

▲子役之分 田

上上

▲うろ子之分 田

▲立役之部

極上上吉 夫は小倉山景清百人一首 二冊
 大せい「卷頭はだれじや〜」、頭取「今年もめでたく相
 かはらす、喜三二丈の名作、太刀とりさかへ兵七、本
 名悪七兵衛かげきよの役、先序のひらきの口上よく、
 かげ清の人がたは北尾がよからふ、これは鳥居もの
 だとは尤、百人のしらびやうしに、百人の黒仕立ぎん
 みのてい、見功者「るびすや大六なんぞはきつひ物さ、
 ひいき「ちつとも如在がある物か、頭取「さてかげ清に
 にたるこつじき龜市をさらへしに、かたなの中に杖
 がしこんであるとは大笑だ、みほのやが上下やにさ
 がりて、しころをひかせ、太刀取がうしろより廻れ
 ば、かくごした身はきつひこつたど、むだの有たけ、
 しまひのつきそふもない所を、きよもりしげ盛の名
 のふみ繪にて、さかへ兵七とはかりの名、まことは七
 兵衛をさかさにして、悪七兵衛かげ清と名のり、しん
 のよじやう半とやら、だいすとやらの故事とは、唐で
 はない日本でござへす、兩がんをくり出して、目出た
 き御代とは、當世名におふ目出た男もしらぬ目出た
 さ、めでた〜のわか松さまよ、枝もさかへてはもし

座付評判後に
付間に不都合

青本
總巻軸

大上上吉 手前御存商賣物 鶴や

▲太夫元之部

鶴や 村田 奥村 松村
 西村 いせ次 岩戸 葛や

▲作者之部

喜三二 戀川春町 芝全交
 京傳 可笑 通笑
 岸田杜芳 宇三 南陀伽しらん
 雪岨 豊里 舟 から井さんせう
 魚佛 風物 古風

▲畫工之部

鳥井清長 北尾政演 北尾政美
 勝川春常 春 朗 國 信
 以上

げる、萬重の新版を、ごつくご細見あられませふ、ひい
 き「袋入にしてもよい位だに、青本とは有がたい、
 上上吉 金涌物壬歳 三冊

上上吉

金涌物壬歳

三冊

頭取「みづのへのとらのとしの初春、雀の千聲、鶴やの
 一聲、此度しはやのから右衛門にて、金銀せいをまつ
 り、にはかに富貴になり、番頭の金をつかふをよろこ
 び、梅がへが三百兩に、二わりましのむげんのかねを
 つくに、男ゆへなら石となつたる女もあり、はだかに
 された女郎もありとは當世々々、金づかいのあらひ
 むすこを見て、さて〜たいきな生れ付、あれでござ
 ぼうでなければよいがどの事、芝組「全交さんあたら
 しいぞ、
 上上吉 七福人大通傳 三冊

上上吉

七福人大通傳

三冊

頭取はしり大こくの本地、大通天の尊像、一にたはら
 のそばこが出て、二にた山の風俗を、三にさんく
 たておろし、ひはかたははかまぎのぼうさま、とび
 色ごんすはけらひごの、あはせばおり、ひはちやは
 きなこのぼたもち、あひさひは願人坊主が十徳を引
 かけた様だとは、可笑さんの名言出來ました、
 上上吉 樂和富多數奇砂 三冊

頭取「忠右衛門美顔の役、茶番の紋所のあんじより、まつ先でざるそばは、品川で山やごうふ、高なはでいけすの鯉の自由じざい、しまいは夢にでもなりさうな場を、きつねのかけどり、野原にもならず、まぐそもくはず、せうの物をせうでとりよせた趣向、おらが内は、しやうぞく榎かと思ふも出来ました、

上上吉

長生虎之巻

三冊

頭取「扱當世教訓の先生、通笑丈の新作、酒や庄藏の役、はなしがめに酒をのませ、つるは下戸と見えて、酒をのんだるめしもなくとりおかし、むだ口根本はふもとのつるや生つらん、米まんぢうは玉子なりけり、と下養が狂歌もこの事か、頭取「左様々々、龜のせなかにきのじやの松といふ身で、りうぐうへゆき、かめは年こしの夜、豆二升ぐらゐるふとは出来ました、

上上吉

寫普 通風いせ物語

三冊

頭取「光陰矢のごとくは、かたきうちめくから、ひらつたく、子供ののびるは竹の子のごとく、でつちの幸介徳吉が身の行末、わる口「幸介がたつた百兩計の金で、五六年いきにくらすとは、一年が甘雨たらず、そんな仕送りがあらばたのみたい、ひいき「そのこんせうで

は、こもをかふるぞ、頭取「もうせんよりはましかもしれず、一體いせ物がたりの文句になづまず、いせものに見たてゝの教訓でござる、

上上吉

阿部清 見通占

三冊

頭取「あべ川より茶の思ひ付、いんきよ一徳と安べの清兵衛、茶にうかされての身ぶりは出来ました、

上上吉

淡把姑譽詞

二冊

頭取「三人詰一分に評しませう、たばこのはしやぎかへつたやつと、くざりをふくていよく、つゝしむべきは火の用心なりとの勅諭もよいぞ、福壽相殿は西宮三郎兵衛にて、るびすがみのいはれ、ついに若るびすとなり、きんねんの草ざうしに、仕舞の夢になるも、

上上吉

祝増福壽相

三冊

久しい物とのいひわけ受取ました、四天王殿は大通のしやれ、馬道のゆらい、いばらがゆび切なごきいてあきれる、盲都は辛苦をおりてはなすといふ、四角な文字は、通俗の水滸でんをよむやうで、ちとうつね、

上上吉

四天王大通仕立

二冊

其外の五通りは、口の目録としやれました、

上上吉

虚から出たけいせい真女 誠から出た町人の男氣

名高江戸紫

五冊物

頭取「ひら井でん八、ばんすい長兵衛、小むらさきの事は、めぐろのひよく塚以後よく御存じ、五冊物とはかさ物ゆへに、巻軸にいたしました、

▲實惡之部

上上吉

擲討鼻上野

三冊

地廻り「間違會我をなせださぬ、この頭取のめくらめが、頭取「景清ではござりませぬ、大通はさいけんをかへりみず、にはどりをさくに、なんぞ神田の納太刀を用ひんや、此度たゝきがなりうの役、ゑし岡舟より出ばに、むかしくげん州しかまの家中にて、八百石をれうしけるとは、まじめな所が有がたい、扱丹右衛門を土手にて打、はなちの出しにおごろき、丹右衛門はきせつ、がなりうはちくてんとははやまつた事、ひいき「杜芳さんきつもの、古今にないあたらしいぞ、去年の御作のあたかより通ります、頭取「一子たんの丞、たゝきうちに出、がなりうが留主に、かべにかきおきの文句もおかしく、大詰たゝき打の場まで、大出来大出来、わる口「いく萬年も、つる屋の榮といふせりふがあるが、板元が間ちがひはせぬか、頭取「そんな事もあ

るものでござります、

上上吉

春狂言 恆例間違會我

三冊

頭取「作者において、たれあらふ工藤左衛門助つねの役、いつものかたの大間違、十郎が石べきん吉、五郎がよはむし、まんこうがかたきをうたせたがり、とらが性わる、せうくがきやば、鬼王がほうらつ、團三郎があほう、小藤太が實事、かち原が心よし、かげきよがそさうで、しゆりけんをうけはづし、兩がんをつぶすなどは、かんしんく、もろ直、助つねのわからぬも、みんなはこねのべつとうが、うはごさだこのほごき受取ました、さうし好、此まへめづらしい、獻立そが三ぶく對、むらさきそがの大あたりの跡では、頭取「それ故春狂言、おしきせと申した物、ひいき「そいつ引づり出して、福山でぶつかけをくらはせい、

上上吉

市川三升園

三冊

頭取「左は岸田のかきつばた、右はなんだか紫蘭の花、いづれあやめとわからねば、御一所に評しまする、三升園はちくさいの名方、難病りやうちうけ合に、おもへば此かねうらめしやと、かもるに手をかけ、いざ

りが立、にんめんてうがいろ、おしがこはいろ、つんぼの早み、大づめの能書の薬料まで大出来々々々、りくつ者」かりにも市川三升といふ字のある本を、實悪の部へいれるとはいか、頭取「口は去々年のいわ平太のひらかたき、其顔見世の金時で、しばらくの引立はごでござんす、さて五郎兵衛がせうばいは、なんでも五色に百花鳥、うりことばかり詞、げいしやをよべばごぢやうをやり、むこやく、やうしむすこや、うしむすめ、しうとあり、しうとなしのせりうりは、出来ました、見功者」茶みせの女が、茶だいへ手をいれて居る畫はこまかい、三升圓の下の巻の吉原の小用所のでいも出来た、

上上吉

化物通人寐言

二冊

上上吉

道樂早出来

三冊

上上吉

通人多佳樂當年

三冊

頭取「三通り共一通に評しませう、通人ねごとは、しほやさまりかふつたてん、日本うつなご、のしやれ、先年うろこ座でことばだ、かひ、新らしいの根といふ、名だいであてた趣向、道樂せかいは、しやか十郎がゆめに、しやか十の像よし、大川はしのていもよくかい

た、土手でぶたれ、かみゆひ床で跡へまはるは、去春の極通人のゆらいのかくで有そうな事、通神多佳樂當年とは、細見の名の様な文字、所々に唐詩せん詩がみへてうつとしいが、七ふく神のなかまわれなごはおかしい事、おそこがふたりほしくば、ごこやらの町へゆけとは、あんまりあたらしい、

▲敵役之部

上上吉

跡を老松 東へ飛梅 我頼人正直

三冊

◎魁「春町さん打ませう、祝ふて三冊うりませう、近年袋入計おつとめゆへ、青本では久しぶり、頭取「上を學ぶ下とはいへごも、下をまなぶかみのゑんぎ、左大臣時平の役、名におふ建部源藏と、名のつて通るほど、ぎす、き、に北野の開帳に、湯島の湯の時宜水になつて、色のさめたる袋入を、そめ直したる青本の仲間入、そさうの天神、雷通のしやれ、十一人の子ぶくじやは、七天神にうまれました、戀川に水たへす、つきせぬ春のはる町と、ホ、うやまつて申、

上上吉

龍宮方便 淺草利生 網大慈大悲換玉

二冊

頭取「喜三治門人宇三太夫のはつぶたい、にかは太郎の役、七太りう王のあくぎやくに、たいのひれたる、

三つ道具、めかりの神事のやつしに、しんのしくはうのこちつけ、大詰に此さうしに、女がないとて三人の女房を出し、はいかいのなごりのうらに、此まきじにんぎがないとて、花さあげ句へじんぎをいふとは出来ました、むだ口「龜遊さんはごふしなんしたへ、頭取「おかたじけよ、

上上吉

唐土魂 石千屋繁昌

三冊

頭取「此度宮ざき八郎にて、かはゆげといつては、きわう丸の一粒もない仕打、さん娘子が人を馬にするは、怪談全書でちらりと見たやうだが、むぎの出来る間が、一冊半ほどかゝるとは、ろせいがあわめしより手間のされる事、旅人が半分馬になりか、つた畫はおそろしい、せんごくを引くりかへして、こくせんやは、とほうもない出来で御座る、

上上吉

地獄沙汰金次第

二冊

頭取「あさひなから子遊び後日狂言、ふるきをたづねてあたらしい工夫、さうづがのば、が、はかりにかゝるを、鬼がなだめて、ばあさんごうもせう事がないもよいぞ、見るめかぐはなの臺が、けつこう廻る、かめの子ざるへいれて、やねへ上るとは大出来々々々、其

外かたき打の御兩人と、百年ほごまへの化物は、口の目録にのせました、

▲道外形之部

上上吉

風雷神天狗落種

二冊

頭取「おくめにててんぐの行水するを見て、通をうしない、天上へまつさかさまに落のくる仕内、わる口「かみなりの子の、こよ、はかんしんだが、風の神の子の、ふう、はおかしい、おこなは颯々ともいふかしらぬ、頭取「夫よりおやてんぐが、子供を夕立の會へつれていかふもよいぞ、へそのまふ、も有がたい、てんぐはかみにいは、れ、おたふくはべんてんかと思ひの外、てんにんとはないてん、其外は口の目録にのせました、

▲若女形之部

上上吉

昔咄虚言桃太郎

三冊

ひいき「藏前の岩戸をはやくあけたい、頭取「此度りうぐうおとめの役、も、太郎にうらしま太郎、ませこせの大きがい、わる口「たから船は去年の當り、りうぐうももうないかい、吉の字が黒すぎるぞ、頭取「巻頭ゆへに位もよくいたしました、きん、出るのう

ち出の小づちもよく、おごめかめの子にのりてどか
いする時、かめの子が、もし女中さん、ごうぞ引すり
といふ所はごめんだ、開帳ばのかくに、ぬいでもらお
ふとは出来ました、しのだの森のうらをかいて、おさ
らばくくの書置も、しめたぞく、

上上吉

珍説雷婚禮

二冊

頭取「戸左衛門女房おかやと成、わる日」さよごろもの
歌といふ所を、さよごろの歌とかいてあるが、ごろ
ごろといふ事か、たゞし落字か、頭取「エヘン」二
役かみなり女房いなづまにて、いなづまのかんざし
よし、扱なるかみのまくまでよさはよいが、ちつこ末
がつまらぬ、なるかみはごこへかいつたと、お見物の
おうたがひも御座らうが、そこがくもをつかむやう
なちんせつ、尤々、

上上吉

御代參牛時詣

三冊

上上吉

名響鐘龍都

二冊

頭取「御代參は、松山かげゆの姫君の役、わる日」姫君の
名はなんといふ、頭取「春長に申ませう、姫ぎみの夢の
うちに、牛の時参りのごとくをかふに、三本あしはら
うぞくがた、ず、四ほん足はき、およばずとはおか

しい事、二役けいせい瀧川にて、女同士のぎりとなさ
けの教訓は、例の作者のゑて物、鐘龍都はけいし
役、なまぐさじの、かつほぶしの本尊ふんじつして、
むかし此所にまぐるのさし身といふもの有、あのあ
んこうこそ、なんちがつみ入りおつけよと、道成寺
の所作事出来ました、

上上士

むかしく岡崎女郎衆

三冊

上上十

舌切雀三の切

二冊

上上十

はんじ物やら蟲盡紋所
ちぐちやら

二冊

上上

御望に付猫嫁入

二冊

頭取「岡ざき女郎衆は、けいせいさんしうの役、高尾う
すぐも小むらさきの名ごとも、くちせぬは通笑丈
の筆の跡、舌きりすいめは、むすめお松つらを取
てかへる所で、みがはりの共より足早な事、むし盡し
は、玉蟲にて序の口上よく、役所とは思ひ付、ねこの
よめ入は、ちんのよめ入の跡は跡だが、御望とあれば
先大てい、其外五人娘はげいしやのあたり、ひな
がたは通すぎて、三味せんなしに河東をかたる様な
れば、口さみせんのにせました、

▲若衆形之部

上上

隅田川土手の青柳

三冊

頭取「むかしから梅若は若衆、八百やお七はむすめで
もつた物、よい時分にしなれて名がのこります、もし
長生でもされたなら、ぢいさまばあさままでござらう、
其外子役の分は、ちよつと口々、
青本總巻軸

ほうび

立役

手前御存商賣物

三冊

頭取「寅歳のゑざうし、總巻軸、作者京傳とはかりの
名、まことは紅翠齋門人政演丈の自畫自作、ごぞん
じの商賣物の本づくし、中にも一まいゑが、はしらか
くしの娘になれそめ、黒本が青本のやきもちをやく
どはおかしい事、一まいゑが、ざうり取百に三十二ま
いのおごとも出来ました、ついたての書付に、此本何
方へまいり候とも、御かへしとはこまかい、あづ
まやにしがざしきにて、あふむ石がこはいろ、いろ
はたんかのふうふいさかひを、ごうけ百人一首がど
りさへ、源氏物がたり唐詩せんの見にあひてあや
まり入、黒本赤本下りの本の本たいち、一番目の大づ
めまで、古今の大出来々々々、畫なら作なら、お繪に

稗史 岡目八目終

跋

右に見へたる位付、大極上や黒吉より、上等にいたるまで、必あてにし給ふべからず、御句到來次第不同、にくい／＼はかはいの裏、善悪不二の片手打、拍子を揃へて打ておけ、しやんと小づまを寅の春、正月二日の初夢に、一富士二鷹早松茸をのむと夢見て、ごんち早咲早梅の、うみ出したる趣向なれば、三千世界をたづねても、こんな作がごんちさんが、笑はんすのも大事ないが、そりやこそ鳴いたは透頂香、波錢一本うそ八百本、向ふ通ふるは清十郎じやないか、笠がよふ似た花菖蒲、いづれあやめとひき／＼を、頭に戴くつうるの羽重、千秋の雲晴やらぬ、朧夜のつれ／＼なる儘に、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つる短なる筆と墨、つかい果して一部の書と、ならの旅屋三輪の茶屋、合の宿にて隣村の、おかげで腰が抜参り、島さん紺さん中乗山人、おづ／＼ら馬の後に記すと、ホ、敬てごせへす、ヨヤヨウ、

印

江戸土産序

青丹よし奈良土産は、ならの都の八重櫻木に、花を作者のほまれあれど、それにもまけぬ江戸の智と、むしやうに意地をおしてゐるや、難波土産のよしあしも、腕に覺へのなきからは、批判といふもおそれあり、上手のてから水がもり、弘法にも筆の誤有事を、わきからてんをうたれぬ内、さがし出せしも又一興ならんと、もとより最負のさたなきは、親のあたまに松三本、此本を見て腹辰ごしは、咽に十の字十五枚の、餅かけぬす人の名をゑぞうし、奈良のなにはの名にない、花の東の江戸土産とだすこと、云すと粹しやれ氣はざんざと、いふことしかり、

辰の春二度目の正月

同穴野狐宿屋 女房移乗述之

江戸土産

卯曾我まこと同姉妹

上中下

○先ほつたんの書入のうち、母おやはすぎしころ、三郎兵衛がもとのめかけのために、やみうちにあいけり、かたきもたれともしれずこの文句つゞきなり、□めかけのためとあるからは、たとへ人をたのんでがいしても、すなはちそのめかけがかたきでありそふなもの、かたきもたれともしれずとは、しれてゐてもしれぬといつて、たづねるがしゆかふか、ちごせませぬ、○下の終に、口上の所の畫に、ゑんがはへ出て手をついている所は、ア、むねがわるいと、おしつてもごしそふなみへだ、△笠、そこがさく者のひげする場だ、是迄にはいたしたれど、つたないさくで、われながらへごが出来ますと、いわぬばかりだ、

吉原大通會

上中下

○先いつたいがくやおちと見へて、所々にわからぬ事有、中のはじめに、ふとんを三七廿一ぶとんしきて、はしごであるといふ所は、まだむたい記のくせ

がのこつているよふだね、○そしてほこ染の花火をはじめめてみやした、△答「そんならなせ南鎌の雪も、はじめて見やしたとがめぬ、そこが天通の通力のなす所だは、ぬしのよふなさをはじめて見やした、

混雑不通太傳記

上中下

○下のはじめに、ふつう太は松ばやのかなむらさきになじみけるが、けふはそう仕舞にして、くれまへからくるといふ書入あるに、□晝を見れば、おいらんもかぶろも、みな三ツひ扇のもん所なり、松ばやの女郎のもんは、こくもちにたかの羽、桐はづれ、雪びしに三ツがしは、又はゑたがしはなど通りなり、△答「總仕舞にて、女郎がたらぬゆへ、扇屋の女郎をやとつてきた所だ、そんなにしつたかぶりをい、なさんなヨウ、

夜を晝星の世界

上下

○上の書出しに、多ぼし公お月様より、うさぎをつかいてとして、せかいの人をせにもち、かね持にしたくおぼしめし、金のきねさづけ給ふといふほつたんなり、□扱お月様の思召とは大ちがい、なんのいらざる物をさづけ玉ひて、其杵が始終世の中のそうごふの種

となりしは、首尾のそろわぬしゆこうなり、○下の終に、火とぼしがあらはれしところの書入に、此杵をやつてつまるものかへ、是をやつては、此本のしゆこうがでないと有、□もふ此本はこゝぎりだに、もふしゆこうはいりそふもないものだ、△答「おめへの御むりは御尤、まだ後へんのしゆこうに、ちつと計り入りやす、

化物七段目

上下

○先一體のしゆこうは、化ものと見へるが、さるも有りへびも有り、犬も有り鼠も有り、馬もある所を見れば、十二支の趣向か共思はれる、又うづら、あふむ、鳶の有所を見れば、鳥づくしのよふでも有り、なんだかちとわからぬ、成程いくじのない作だ、○下の三丁めに、ちうしんぐらの狂言の所に、鯛がまんぢうおこしをうつてゐる所有り、爰へ計り魚を入れたががつてんがいかぬ、おこしふなまんぢうといふしやれを云たい計りと見へる、ちとあんじがきたなし、△答「猿はひゝといふになると、よふくわいをなすゆへに化ものなり、犬も大神とて、よふじゆつなすゆへに化物なり、鼠もきゆう鼠化して猫をはむといふ事あれば化

ものなり、うづらも田鼠化してうづらと成といふ事有り、ふなを入れたは、ア、鯛もないといわせまいばかりだ、

野會喜伽羅久里義經山入

上中下

○上の書入に、よしつね記をみれば、婆々狐追かけくるゆへ、いかいせんとあたりを見れば、ゑの木の大木に穴の有りければ、よきかくれごころなり、あにきもこんな事で命をひろつた事もあつたと、べんけいと三人、此木のうちへかくれると有り、□末に至つては、よしつねべんけいいろくの武功をあらはす所有り、なせこゝで計り此やうに、おくびやうな氣が出た事だ、たかゞ狐一疋、なにしおふ二人で、ぶつちめられねへ事はあるめへ、△答「扱もむづかしい事をい、出したは、べらぼうめ、爰でその狐をころしてしまふと、跡のしゆこうにならぬは、

正説河童咒

上中下

○先三つものそうし、あけてもく、川やみづにて、十五丁の内十二丁半は水なり、しゆこうとも見へず、又さいふ天神と有が、晝にはゑぼしひたれ、ちと天じん様にはうけ取にくし、ごふか天神様のかんぬしが

あらわれたよふだ、△答「辰年の新板ゆへ、水のおいは随分よし、いつたいがりうぐうゆへそのはづだ、又天神様はかんぬしの姿にへんじてあらはれたまふのだは、

鎌倉焼飯由来

上中下

○下の三丁めに、よりと公しゆうく、七人にて船に乗りおち給ひ、海のかみへ十町計りも出ければ、さつと一吹ふきくるあらし、まつくらやみとなり、くつたものはこまのみせ、いきたこゝち一人もなく、よるかひるかのわかちもなく、三日程のころにてせんごうもすはつて見ているとの書入、□なにしおふゆうしのめんくさへ、こまのみせといふ仕うちをするに、すはつて見ているせんごうは、へいきなものだ、どうに目でも廻しそふなものだ、△答「そこがもちやはもちやだわな、

新田通戦記

上下

○下の二丁めに、いしやつうあんのおもひ付にて、こくぶのはに大通と云字を、墨ぐろ仕立に書附、はんゑりのよふにまくと迄はきこへたが、つう小紋のごとくきざむとは、よもやぼんぶわざでは、これはきざめ

まへす、△笠扱もわるいきざりだ、たばこのはをは
んろりをまくよふに巻て、小口きざむとうづまきの
やうじや、つう小もんとは今のうづあられの事ぞ、

江戸花名畫譽

上 下

○上の初にはせべのうんこく、かのゝもとのぶが寶
藏へ忍び入、くりから丸をぬすみたちのく所のむだ
に、大ぐわんじやうじゆかたじけないと、うらしんじ
ゆく、此ばを早くにげずしんちとてよふと有り、口
にげずばぢきに、つかまりそふなこつた、△笠あんな
りうれしさに、つい出そくなつたものだ、きさまのよ
ふなこみづな所をどがめる人は、人がいやがりさふ
なこつた、

運開扇之花香

上 下

○下の初丁に、大友げんぞくして、名を千右衛門とあ
らため、きせるをしやうばいしけるが、そのころ大坂
の大じん、江戸へ下られる折ふし、千右衛門に七十
兩餘りがきせるをあつらへける、又是にて、六十九兩
三分二朱計りもふけたと有が、さすればもとは、たつ
た二朱のきせるとみえるが、なんぼ大じんでも、二朱
のものを七十兩にかいもしまい、あんまりうそらし

いこつた、△笠あんするに、大ゆうは追はぎさへした
ほどのぬす人ゆへ、此きせるもごころであけてきた
と見へる、さすればすいぶん、そのくらいはもうかり
さふなもの、ちとあさきをよくかんがへて、なんを
うちめさい、

諸事無世話會我

上 下

○先書だしに、和田が三男小ばやしのあさいな、て、
つぼとの勘當をうけ、大いそのとらがへやごとなり、
つまらぬのはじまりで入れば、時宗もは、のかんご
うをうけ、是もとらをくいたをして、遊んでいるとの
書入なり、口とらも當時六合のうちまきを、けつきの
わかもの二人にくひたをされたら、さぞ内證がせつ
なかるう、まづげだいたは大きにちがいが、とらが大き
なせわ有りそがだ、△笠おみさんは大磯のとらさん
をしらねへか、とらさんといつちやア、どうしてくる
わ第一のせんせい、かまくらの大小名はいふに及ば
ず、われも、ときやくをあらそふ程の事故、此うへ
十人や二十人へやごが有つても、鼠をかつておくど
もおもはねへのさ、そのうへいもと女郎のけわい坂
せうくもすけるゆへ、なをさらの事だ、たいめん

に、あふみは和田がわる口をいわぬゆへ、五郎もかん
しやくをおこさず、それだからあさいなが、とめたど
めたといふせわもなし、工藤が赤木づくりを、しゆり
けんにつせわもなし、なんど是でもげだいがむり
か、しかしおめへが評をなさるのは、大きにおせわそ
がさ、中カうりのお茶でもあがれ、

忠臣藏十二段目

上 下

○寺岡平右衛門、やくし寺次郎左衛門にいしゆがへ
しをせんとおもふ計りにて、よふく、此頃くがいを
はなれたおかるを、又大磯へ二度のつとめをさせし
は、なんぼうちう義でも、おかるはよつぼぎきのよい
女だ、○末の半丁に、寺岡平右衛門去る御方より、一
生あんたいに御扶持をてうだいて、あまつさへ百
餘才をいきたこの書入だが、口夫程なら、おかるを又
うけだしてやりそななもの、それが噂もないは、やつ
ぱりねんあく迄、つとめしたと見へた、かたの時は頼
んで、なんぼいもとでも、平右衛門はぎりしらすだ、
△笠まづ忠義には命もすてるから、二度のつとめは
猶更の事、又平右衛門がゆたかな身となりしゆへ、お
かるを身請して、そふおふな所へかた付るか、たゞし

勘平がためにあまご成つたか、それはいわすとしれ
た事、おかるを身請しましたと、い、事ではなし、き
んじよをふれてもあるかれぬものだ、せんたひやし
きへ、どうりうとかいつておいたのさ、

御無文字片沓晰

上 下

○きやうくんのひはんをするにわあらず、末の半丁
に、いつすきをもつばらとして、板元をお先につか
い、作者のきしやうをあらはわす事、へんくつなこ、
ろからは、子供衆にはわかるまいこの書入、口ちとか
んしやくにさはります、末によしかくウ、とい、ね
へと有るが、おいらはウ、とはいわねへほうだ、△笠
「あんまりちがいはござへすまへ、

千歳御船の吉例

上 中 下

○ほうそは、らんぎくといふ女郎と深き中となり、
おかぎきをおちする程の中なるに、よくおもい
切てなんの事もなく、もろこしへかへつたのは、ち
としやうなした、らんぎくはそれからごふなつたか
しれねへ、一體長壽なものを、よせたしゆこうだが、
中の巻へちつとの内、女郎かいの所をいれたうちが、
ごういふしゆこうだしらぬ、其くせ一體かたい作だ、

△笠、初から仕舞迄おし計りて、ゑんな事がないから、作者のはたらきで、女郎の事をやわらかみに入れたものだ、貴公は作にもよふと云事の有を、しりめさらぬか、

もふくく怖嚇

上 下

○一體此しゆこうは、度々きいたはなしだ、その上馬の事を書たる草しなるに、もふくくこはいはなしといふげだいはちとつかず、もふくくとは、うしのなきごへなり、△笠「おまへはうしのなきごへをよくしつていなさる、おいらはついぞきかねへよ、

返々目出鯛春參

上中下

○一體が七ふくまいりのしゆこうなれ共、あけてもあけても、あるいて計りいるやふなそうした、△笠「それは作者のことがではないわな、ほかになんはもふないか、

能魂膽氣

上中下

○先すべて、ゆいこんたんきを、つふのしゆこうにしたものだが、大つうあんつう彌は、てくだのめい人といふこの書入、□あんまりなこじつた、△笠「かくくさぞうしは、むりこじつつけのおかしみが命、きかう

がよふなつうに見せるのではねへ、

料理獻立頭てん天口有

上中下

○一體がりやうりのしゆこうにて、中のはじめに、てんぐあらわれ、海道茶助につけていわく、せんざいせんざい、われはこれ秋葉のまが四郎なり、なんち太郎を、みかたにつけんとおもひしが、そのいへをしらざるゆへ、わがはうちはにてまふうをおこし、れんばん状をいけすにせしかは、さてこそ太郎みかたにつひたれとの書入なり、□先手前のはたらき計りをつげ、有いのちに、今よりゆくすへまいるべしとあるが、爰ざりて末にはかほだしもせず、かいたう茶介は、三度ふしおがみくどあるが、三度おがんだだけほうまるめへ、△笠「大ぞうをつなぐに、女の黒かみをもつてし、そばをつなぐに、たまご山のいをもつてする、きやうげんをつなぐに、有事を知らぬか、爰へ天ぐを出したのは、しゆこうのつなぎだは、

闇羅三茶替

上中下

○上の書だしに、ふきや長兵衛、いまだこれといふしやふばいもなくと有所に、中のはじめに、長兵衛今は大金もちとなると有り、□きつねのつげで、かまをほ

りだしたところまでは有が、何つの間にそのやふに、金もうけをした事かうたがはしく、○末におきくを、三日替りの女房にするといふしゆこうにて、むこは帯屋長右衛門、八百屋半兵衛、かたなや半七と有、□三日がはりの道行に、お花半七はなし、おなつ清十郎の間違なり、△コタエ「けして間違にあらず、おなつはきやうらの姿にてあしきゆへ、お花に書かへたは作者のはたらきなり、

不案配即席料理

上中下

○初春早々、ぶあんばいといふげだいは、ちどうちやす、上の巻にて、たのぶがよしつねにかんきをうける所で、何ゆへにしんじゆ佛のしやれをいふか、がてんがいかず、高尾が身うけ代千兩も、あんまり安いのだ、△笠「まづげだいが、殊の外作者のひげのもじゆへ、たいがいは青梅じまに御らん、高尾も末に下切にして仕舞代物ゆへ、おもへば千兩でも高いものさ、高尾も安いもいろの道さ、

吉備能日本智恵

上中下

○下の巻の三丁めに、きび大じん、くれは、あやは兩人の女郎の身請するとして、先てつけに千五百兩渡と

の書入、□書を見れば、一萬四五千兩ほど金が有、そのくらいなら、てつけのなんのときたなびれすと、みんなわたして仕舞ばい、△笠「そこがうりものかいもの、あたまからみなわたしては、あんまりせきこんだやうでやばらしい、

親動性桃太郎

上中下

○下の巻に、北國のまめがしまより、梅干おやじがかへりし所に、みのはみのだがみのおとん、是は駕にひきやしたとあり、□四ツ手駕にみのおとんを入れたら、人の乗せきは有まへ、△笠「そこもとは、しやべつといふ事を知らねへ、わたのうすいとあついが有る、

天慶和句文

上 下

○上の三丁めに、月水天つきのさはりを司ぐる神と有り、□月のさはりをつかさどる神を、月水天といふ事ついにきかず、下にくわんがくいんのすゝめが出たも、ごふ云ゑんか、がてんがまいらぬ、△笠「もふぎやうのくもはれやらぬ、史記おりく、のたはむれといふ、むだをい、たい計りささ、是はしゆこうのくさびといふものだ、あんかけにわさびとはちがいや

他不知思染井

上下

○先一體がしゆびのそろわぬ作で、なんだか一つはもわからねへの、鴈金文七はこんやのむすこだから、染ものづくしのむだをいふが、がてんがいかなぬ、作者は女の事ゆへ、くわく中の事はききとり計りこの書入れたが、末の方分へいつては、だいぶくわしい事は、△答「ヲヤ此おぢさんは、やおがみのごしやうだから、そんなにわるくいつてくんなんさんなヨウ、お師匠様のおつしやつたは、本屋夜なべはひつきやうにうれ、ばこそといわしやんした、がくやで計りしやうちゆへ、人知らずといふげだいは、おまへの目には見へやせんか、むすめ子供をあいてにして、おとなげないによ、女の中の豆入りへ、みんなはやしてやんな、

太平記萬八講釋

上中下

○上の巻にて、むりおしん王、松ばやのきせ川を、かつて見んとおぼし召、ちや屋の二階へで、いるとき、よび出し、むり引つれて松ばやへ行遊給ふと有り、□畫を見れば、ちや屋の女房が出て、しん王をこめている所へきつい間違、その下のい、ぐさに、是あまり御むたいでおつすにと有が、おすとは松ばや

ふ云所へ評をい、なんすと、評をのきしやうが見へんす、ちとおたしなみなんしヨウ引、

漢國此奴和日本

上下

○上のまきのゑんしやうさい、詩も歌もおもしろからず、やまどうたより、長歌をならわんと、二十四橋のみつけ前、ふもんぶせんだいふがでしと、よみつごうじと、よまつごうじと、よまきごうじといへる三人のごうじを呼、長うたをきくと有、□ふせんがでしなら、ぶんごぶしをかたりそふなものだが、長歌とはきがつかずにいつたのか、しかし下のい、ぐさに、三日がわりをはじめてきくと書て有からは、ぶんごぶしのはづなり、△答ばかなつらだアといつたら、蛤がひたいをぬくといふだろうが、あんまり評のしようが大べらぼうだ、唐で日本のことをまねるのだから、間違たといふ所がしゆこうだは、こゝなのしよるまやろふめ、

夫は本歌 是は狂歌 萬載集著微來歴

上下

○上の巻は、すべて忠のりがきやうげんのすじだが、末の半丁切で行がた知れず、きへてなくなつたか、こころもとなし、そのすへには噂さへもなし、下の巻に

のどふり言葉なり、ちや屋の女房が、そふいふはづはなし、△答「ぐつともい、なさんな、是作者のあやまりならず、二かいからさせ川が、つけごはいろをしたのだ、

従夫以來記

上中下

○下の巻の初丁に、けいせい高利の金をかし付ると有は、なるほどいらいきでも有ふか、三會めに女郎より客へとこ花をやり、客より禮の初ぶみを出すとは、まゝある事めづらしからず、ほれた男がひんなれば、そふして、いも呼が、けいせいのきしやう、新内ぶしの文句にも、ちや屋ふなやごの付と、け、やりて禿の仕着迄、みんなそなたのくめんづくと有からは、夫からいらいでなく共、女郎が客を買て身をうつ事、今の世に多く有仕うちなり、△答「おやばからしい、なんぼほれた男だつて、まだなじみのない内から、そんな事をしんすものか、ふかくなつたらすいぶんだが、ぬしのい、なんすは、しやくしじやうぎとやらでおさんす、そふしうちの有事を、作者さんはとふにしつていなんすけれど、そこをあるまいと書ておくは、作者のきぐらいさ、わるくすると作がげびになりんすわな、こ

て、くまがへほんどうにもとゞりを切し故、さだめて木あみと、名をあらためるしゆこうならんと思ひの外、是これが木あみになるくらいなら、くまがへにはやつぱり、もとゞりを切まねをさせてもよさそふなもの、これもりではなくて、これはちつとこれむりだね、△答「それだから、くまがへがもとゞりを切ところ、あつもりが是々くまがへごの、もとゞりを切にはおよぶめへといへば、せんたいするふと思つていたとこさといふ、書入が目に見へねへか、目くらめ、

大千世界牆の外

上下

○上の巻のげだいの畫に、たいまつをさぼしているばけもの、かほは、ちとゑんりよな人には見せにくし、べにでいろごりしゆへ、なをさらなり、あたまへ下太をのせているを子供が見て、異體の化ものか、いかい事いるとい、しももつともなり、まだ人間の五りん五たいさへさだまらぬに、草木や岩の有もちとさこへず、○下の書入に、せかいあらかた、とりきまりたるやふなれども、鳴さはぎて魚がとんでにげるなごは、まだざつなごころが有けると有が、□いまの世にもとびうをとて、海をさぶ魚があれば、其時飛ん

だも此魚の先祖と見れば、あへてぎつな事でもなし、もつともな事なり、△笠、今でこそ飛魚を見なれて
いるが、その時分ははじめて見たから、ぎつな事と
いいしはもつともな事さ、ぬしの評がちとむりでご
んす、

龜遊書雙紙

上 下

○下の巻に、いんぐわ地藏、三じやごんげんの金を百
兩ぬすみ、品川へ行ておごらんと、新ばししがらき迄
行て、本田よし光がせがれよし助にあいしゆへ、さ
いふの金は、せんくわうじの如來預しが知れ、今度は
まことの百兩ととりかへないしかば、ちきに氣が
わつて品川へ行のはやめて、新ばしから吉原へかへ
り、しほ衣がとこへ行しとは、地藏ばかにした事、き
の多佛なり、△笠、そふきのかわつたのが、やつぱりく
わんせおん、せん光寺如來の佛力さ、こんなきやうな
作者が外に有ものか、

梶原二度の賭

上 下

○上の巻きよもりがやかたへ、火のふる所の畫に、ざ
とうが大せいいる所は、五百らかんの土用ばしか、と
うぐわぶねのふきながされたやふだ、△笠、おきやあ

て、はぐらかすのだわな、いたこやかるいざとは江
戸の内か、

八橋調能流

上中下

○中の巻で、才右衛門が琴をかついで行所の見へは、
大師様の御みくじ本に有畫だの、下の巻におとみと
才右衛門が道行の所へ、又琴をかついでいる、とか
く琴がじやまになる琴だの、先一體としよりにはく
へぬ作だ、△笠、かたいといふ事だろふが、此そ
うしはよつぽごよしある事だよ、

跡目論嘘實録

上中下

○此そうしの仕舞も、まくの所やぼ大名の仕舞もま
くの所だが、きつすきさ、しまいの書入に、おそ川
かし元かねて仰られるは、評定すへは迄たさば、
むづかしくなるべし、よいかげんに打だすべしと、げ
さくしやに仰おられるも、あんまりせつない云ぶ
んだ、仕舞のくゝりができなんだか△笠、こいつがこ
いつが、いわせておけば、だいそれた事をぬかした

がれ、おもしろくもないしやれたごうのかほみな
書わけたうちはごふだく、おそろかんしんまたを
くやるだろうが、

全盛大通記

上中下

○將門は下總のさるしま郡に、新女郎やをこしらへ、
何もかもよし原の通なれども、霜中の月計りは、黒ざ
とうでこちつけるゆへ、そのあち大きにおとれり、又
女郎百くわん名といふ有、ひすべしと有が、□そ
れほどにかくさすともよさそふなものだ、△笠此さる
松め、かくさづとい、事だから、ひすべしと有は
かしみだは、くさぞうしへもつともな事を書て、おも
しろいものか、もふ外に評のしよふはねへか、このか
づねへめ、ふみのめすぞよ、

狂言好野暮大名

上中下

○中の巻にて、松葉やの女郎を總仕舞にして、おやし
きへめし、きやうげんを申つける所にて、おいらん
の云書入に、わつちらは、ついにしはいを見た事はお
せんせんと有、□なにしおふ松ばやのおいらんが、芝
居を見ぬはづはなし、いたこかかるいざはならしら
ん事、△笠、此人もしやうじきな人だ、わざとそふいつ

な、すべていせ源氏の物語にても、みな末を水のなが
るゝ如くに書が法だは、そこをわるごりにこらぬは、
作者のこゝろいささ、

萬象亭戯作濫觴

上 下

○一まくの淨るりと、すぢのわからぬかぶきしばい
は、きつもののだが、下のまきのごくやくをのませる
と、すいくわのしゆこうは、もうかびがたかつている
はづだ、△笠、それだから書入のむだに、御ゆだんなさ
るな、此末はいく久しくやきなをしますと有は、一
ごんもいわつしやるな、ヨヤヨウ、

化物家髭松明

○上の巻にて、半勝宇右衛門がばけものをやといに
行し所にて、おれもぬしたちをたのんで、半きんもや
らずにやあ、文右衛門町でも、かりにやあならねへと
の書入、□よい事をとんだよく御ぞんじだ、△笠、抑く
さぞうしの作といつば、かみはみかごのしりの毛迄
をかぞへ、しもはこじき小やのはきだめ迄をさがす
が作者のはまれだ、それを知らねへでつまるものか、

江戸土産終

跋

御江戸土産に何をもらつた、作者の評判、ひんがらかさの骨折で、晝難房もそつこのけ、作難房の名を得んと、同じ穴の野狐ども、いまだ鳥居もこさずして、鼠のわなにかゝらん事を恐れず、装束板のもとに集り、關八しうのゑぞうしをひろちやくして、ごふ書んしたこふかゝんしたと、おのゝく作をかげごとにしる事甚し、予隣穴にて是をき、いろゝく返答、△印の如く、よふゝ腹を、入相の鐘に鼻やひしぐらん、御家のほらづゝみをハアホンゝ

隣穴のあるじ

いきな狸の榎木のもとにてしるす

はん元

前川庄兵衛梓

三題嘶作者評判記跋

春雪坊がなぞゝは、都川の今に流れて、野暮鶯も氷解と囀へど、三笑亭の三題嘶は、一分線香の煙りと消、誰しら雪の燼を積、年を累て絶たりしを、花の舎兄の好文大人、去年の春邊に魁頭、再び興す三題の、扇の風の四方に薫りて、此枝葉都鄙に繁茂せり、さるからに連中各、辯を勞し才を磨き、互に稱譽とりゝの、聽主の批評を柱礎として、粹狂連の頭取何某、其善惡を難波人、八文字屋が口調に倣ひ、上と吉との黒白を、漫に擧て梓にもせし、卷の頭に敍せよと乞れて、憎まれ役のおさき者、禿たる毫をはしらせつ、

文久三亥葉月

春廻家幾久誌

三題嘶作者評判記總目錄

- 粹狂連 家元 好文舎花兄
- 興笑連 春の屋幾久
- 見立當時流行物に寄る、左のごとし、
- △總卷頭
- 大極上上吉 春廻屋幾久
- 御全盛ならぶ方なき 大川ばた清正公
- △立役之部
- 極上上吉 木しら雪
- 工みな趣向を疊み込む 三十間名古や扇
- 極上上吉 雪松園みさは
- 書とつて見ざめのせぬ 菱湖の法帖
- 大上上吉 山衣細道
- 御趣向に延ちゝみのない 絲網の根がけ
- 大上上吉 菊の屋柳美
- 意氣で人がらな 御召こじり
- 上上吉 露の屋梅我
- はつきりと聞とれぬ 水調子の小唄
- 上上吉 大梨園樂之

御趣向はつくされても まだ甘い紙入服紗
 上上吉 文桂舎榮壽
 短い處にうがちのある 腰提の袂おとし
 靈上上吉 山閑人交來
 お手際ほどにはさへかねる 上方うた
 靈上上吉 一惠齋よし幾
 此頃はめつきり油の乗つた 家鴨
 △實惡の部
 至極上上吉 河竹 其水
 どうでも賣れ物と定つた 行列のつき繪
 眞上上吉 梅 素 玄 魚
 おうがちは聞へてあれど 茶のうすは 小倉庵の温泉
 至上上吉 出 揚 扇 夫
 おゑぐり過てチト安手な 丸忠の 三尺織博多
 靈上上吉 假名垣魯文
 時によつて出來不出來のある 一筋染の手拭
 至上上吉 冬の屋嘉遊
 上品なれど其席による 草色の献上博多
 上上吉 全 亭 愚 生
 甘口ながら御老舗の やげんばり龜の年

上上吉 五葉舎全後
 なげられてゐる落のくる 素人角力
 功上上吉 立川談志
 此頃少し直うちの上つた アメリカ更紗
 △若形之部
 極上上吉 綾岡輝松
 しぶい所にだれる場もある 都羽二重
 眞上上吉 瀬川如阜
 長くても目新らしい 掛かへの大橋
 功老上上吉 春風亭柳枝
 目先は替れどはれ着にはならぬ 手拭のゆかた
 大上上吉 三遊亭圓朝
 上上吉 柳亭種彦
 地あいほどもあれ名まへのやさしい
 上上吉 川素眞
 へだてがあつてよしあしのしれぬ 陰芝居
 △頭取の部
 山々亭有人

大上上吉 寸法が極つて落つきのよい 眞鍮の紙入留
 柳亭左樂

三題嘶作者評判記

朝な／＼ささかへて目新らしい 入谷の朝がほ
 △總卷軸
 大極上上吉 好文舎花兄
 徳をしたつて群集する 身延の開帳

大極上上吉 春廻屋幾久
 頭取、扱此所が、興笑連の家元春のや丈でムリ升、好事家、待てゐた、三題ばなしも世界一派の流行となりましたは、幾久丈と花兄丈の全御徳でムリ升、殊に此度の御催の奇人傳は、廣大の御陰徳、折角是迄の流行も、書殘したものがなければ、後世のかたり草にはなりかね升、板に残るものは、後の世にも吾がごとく好事の人に珍重され、粹興兩連の美名を、千歳の後までもこのころといふもの、見物、御尤でムリ升、しかし皆さまざま御待かねの事ゆへ、すぐさま藝評、頭取、粹狂連にては、御身柄の事ゆへ、いつ迄も有人の代舌なれど、御趣向のほどは、いにしへの可樂の形をうしなはず、恐れいつたものでムリ升、やき連、興笑連にて、毎度おつとめのよしは、噂にも聞てをりましたが、王子の櫻餅、芝居の鳥追などは、すごい程うまいものうまいもの、ごうぞ粹狂連の席でも、御自作の御咄しが伺ひたうムリ升、眞國「イヤ」頭取もいふ通り、御身が

三題嘶作者評判記總目錄終

らゆへに、柳やではどうも御披露がなりにくいはず、しかし興笑連で度々伺つたが、お趣向はいつとてもお行ごいき、おしむらくは、今少し咄しに死活があつたらよからう、聞功者「イヤ〜、あれで死活があつたら、商賣人ははだして欠おち、それではかへつて不見識、咄しの作意はごこ迄も幾久文にかぎり升、わろ口」おいらもなんぞあらを目付て、わる口を聞うと思ふけれ共、此うしにはへい口〜、ひいき〜、ごにもかくにも、粹興兩連の大立物、跡々は又手がるい御趣向を待升、ヤレ春のやさん〜、

極上上吉

木しら雪

頭取「此所が古人柳亭翁の末弟、戯名柳亭種春、藏書の問丸しら雪丈でムリ升、いつとても御趣向はたくみにて、狸の小間物や、大佛餅なんどは、今の人の語草となる御妙趣向、流石御腕まへの程があらはれ升、譯しり「席上にては、御身分がらゆへ、河竹丈が御代りなれど、陰の作者は割のわるいものにて、たどは、戯場で、河竹丈新古未發の御妙案でも、皆俳優の手柄になつて、作者の苦しんをあぢあふものは、十人に一人りか二人り、しら雪丈もそんなものにて、毎度の御妙

案もあらはれぬやうにはあれど、いつとてもあだ矢なく、恐れ入つたものでムリ升、川竹家「イヤ〜、たごへしら雪丈が、何ほどの御妙案にもせよ、河竹丈が下手ならば、どうしたもの、折角のはなしも死ませうが、此うしゆへ咄しいかすといふもの、頭取「東西東西、仕人と作者は勇士と軍師、いわゆる河竹の高島や相持でムリ升、ひいき「また〜、秋は御名趣向をまつてをり升、ヤレしら雪さん〜、

極上上吉

雪松園みさは

頭取「此所は興笑連一方の大立者、御所行は奇人傳の棚書にて御承知の通り、藏書に富たる博覧家、いつとても御趣向は、御調べ方が行届くゆへ、一言半句の仇矢なく、耳の穴の明ぬ方にはせひもなし、むだ口「ライライ、まつすぐならば、中へたれべしか、頭取「東西東西、評言にむだ口は御無用、孔子曾子に聞せても恥しからぬ御咄しは、此うしにかぎり升、見物なる程頭取のいふ通り、都の御咄しなど、いふものは、言ふにいはれぬ意味あひ、わるく申せば、御口調がほこれぬといふ所じやが、かやうな事にはなれぬ御身分、御口調のさばけぬも、かへつて奥ゆかしい場もムリませ

う、わる口「しかし興笑れんは、さのみ聴手もなく、皆耳のあいた人ばかりゆへ、御骨折もみへますが、兩國で此うしのはなしをしたら、俗物れんがやかましくいふであらう、聞功者「辯じ過るをしやべることなへ、口きかぬを唾といふ、實にむづかしの世の中、兎にもかくにも大立者、このつぎには、はな〜しき御趣向をまつてをり升、ヤレみさはさん〜、

大上上吉

菊の家柳芽

頭取「此所興笑連の通客、かねてうはさにもお聞および、京都祇園町にて、おだまきの縁が切ぐさつたばつかりと、トンだお三輪の仕うちありし、菊のや丈でムリ升、びいし「ヤ〜、わたしやさつきから、みつさんの評が聞たうて待てゐた、娘れん「ごて〜なしにすぐに藝評、頭取「お初舞臺の謠づくしは、見物一統きも玉をでんぐりがへし、後世おそるべしとへい口せしが、その後とても、わるいといふではなけれど、謠づくしのやうにはムリませぬこのうはさ、聞功者「イヤ〜、はじめより仕舞のわるくなる道理はなれ程ではあるまいとあなごつてゐたゆへに、お咄し

がト際引立ましたのでムリ升、その、ちは段々に見物も耳がこへ、それにはじめのがうま過たゆへ、跡のよいのが目だぬのでござり升、譯しりなる程、おことばによごみはなけれ共、あまりことばがきれい過て、遊ばすの、なさるのといふのが多くて、かへつて耳だつやうにぞんじます、ひいき「ヤレ柳美さん柳美さん、

上上吉

露の家梅我

頭取「此所が興笑連の好男子、あちらの格子でも熊さん、仲の町でも熊さんと、かの助六じやなけれども、吸つけたばこの雨がふる、露のや丈でムリ升、娘れん「ヤレ待てゐた〜、ごて〜なしにすぐに藝評が聞たい、頭取「いまだしんみりとしたおはなしも承りませぬが、どかく御小音ゆへ、何やうの御妙趣向でも、はつきりと聞だれませぬ、見物「鍋の中で芋を煮るやうだ、といふ評もあつたさうじやが、じつに露のや丈などは、全體が小音、その上にこいんでお出ゆへ、たにかい通りかね升、大音じやうに願ひ升、娘れん「可愛さうに、熊さんは素人なり、旦那げいでありませぬもの、どうして〜、はなしかや作者なんぞと一ツしよに

されてたまり升ものか、きざナおたんちんだヨ、ヤレ露のやさんくく、

靈上上吉

文桂 舍榮壽

頭取「扱此所が榮壽丈でムリ升、はじめのほどは、はかばかしきおつとめもなく、いつとでも御代舌御代作ゆへ、見物」此うしには、かやうな事はおできなさらぬとおもひの外、御趣向も細やかにて、ご迄も素人ばなしの意をうしなはず、かんしんく、開功者「何をいふにも、かやうな事にはおなれ被成ぬゆへ、いかゞと思ひの外、黒人ははだしにて、御趣向の品もよく、御咄しぶりもおちついて、諸事あや岡丈といふ工合にて、うまいものでムリ升、譯しり」榮壽丈の御幼少より、古人鯉丈、英賀、英泉、春水などの茶ばんを聞て、小耳の底に残つて居られるゆへ、いわゆる勸學院の雀でムりませう、ひいき「またく」此後とても、よい御趣向を待てをります、ヤレ榮壽さんく、

靈上上吉

山閑 人交來

頭取「此所が佐野槌以來、白石街道二代の好男子交來丈でムリ升、いつとでも御趣向はたくみにて、横濱の國せんや、筑波根の咄しなんごは、誠によく行届い

て、見物一統よろこびました、見物「何御趣向も意氣事で、相替らす評のよいはお仕合、おしいかな、御辯舌が今一ト際ほごれかね升、あれで辯舌がほごれたら、河竹、あや岡にも、おさく、おとる事ではムりません、天二物をあたへずとはよくいつた物じや、やき連「ナニ交來丈、とつ辯といふ程でもなければ、いはゞ咄しなれぬゆへ、追々と功がつんで、少し咄しに死活の工合がついたら、意氣な咄しにつくものなく、廿一人の冠と賞べき人になられませう、ひいき」ごにもかくにも交來さんく、

靈上上吉

一惠齋 よし幾

頭取「扱此所が、駄じやれの問丸よし幾丈でムリ升、昨年蟲づくしの久松、佐々木へく、の落は、切おとし一統の大よろこび、追々口調もほごれ、最はや一方を持れる大將分となられました、見物「一部の御趣向は立ませぬが、お貌さへ出さるゝと、ごつと落のくる御愛敬やくしや、ごもかくも人氣がよふてお仕合、開功者「どうかするとよし幾丈、戯作者ぶりの筋立をはなさるゝ事もあります、先生はせんせい風にしやれて、しやれのめす方がよろしきやうにぞんじ升、やき

連「しやれ先生の十八番、よしあしは申す筋もムりませぬが、先日興笑の御連にて、玄魚丈と懸合咄しに、一來法師に筒井淨明、御賑やかな立廻りが有つたさうなれど、全體二題ばなしは、いにしへの手振をしたは、死活がなふて質朴で、いはゞ春のや丈の御趣向が、真面目の三題ばなし、しかし不殘其形がよいと申ではなけれど、太鼓の聲色、人形の身ぶりなごを被成ては、ごうやら三題咄し家と異名が附ませう、咄しはほんの座興、素人の白きを捨ず、黒人の黒きにそまらぬやうに被成ませ、一惠齋の御芳名にきすが付ます、ひいき「イヤく、夫もほんの座興なれば、業道の邪魔と申ほごでムリ升まい、しかし以來は身ぶりは御無用、やつぱりだぢやれがよいぞへく、ヤレいくさんく、

至極上上吉

河竹 新七

頭取「扱此所が皆様御待かねの、粹狂れんの大棟梁河竹其水丈でムリ升、ちくせん「ヤレ待てゐたく、ごてこてなしにすぐに藝評、見物「柿の木金助以來、艶事を十八番となされし所、近頃はしうたんばを専らにされ、いつとでも見物をよろこばせ、乳もらひはわけて

の大評判、夫より引つゞき、源光和尚の因縁ばなし、うまいものく、やき連「なる程、名にしおふ當時の才子河竹丈何を被成てもすきはなし、其中にも取わけ、三題ばなしは粹興兩連の大立もの、點の打どころもムりません、しかしながら此うしは、題にも落にも構なく、趣向のたくみと、筋立を専らとなされるゆへ、百人に九十九人までは、わらいご申ものもムりませぬが、われく「がおもふには、いはゞ商賣ものをそつくりともつて来て、遣ひものにするやうな物、よいにちがひはなければ、ごかく目先が替りません、うなぎやさはらのてり焼も、度々ではあさるゆへ、たまくにはあつさりとした鹽やきものもねがひ升、ひいき「イヤく、夫が流行におくるゝといふもの、名にしおふ廿一人のれん中、おのく「一家の十八番、あゝその筋になつた日には、やつぱりうなぎで目をつくやうなもの、なんでもかんでも河竹丈がいつちひるきじや、跡會には、せりふいりのたつぷりとした、しうたん場をねがひ升、ヤレ河竹さんく、

眞上上吉

梅素 玄魚

頭取「扱此所が、皆様先刻よりお待兼の玄魚丈でムリ升、見升連「ヤレまつて居た〜、淺草の親分はやふ高評が聞たい〜、わる口」だれかと思つたら、崎人傳で見かけた黒船稻荷の神主ごのか、定めし評言もおそれみ〜うやまつて申サにやアなるめへ、ひいき」やかましいはへ、先生はやまご魂で、大のおみち家也、殊に忌部の正統なり、本國には神代からつたへた、六尺の燈箱のある家がらだ、譯もしらずに口をた〜くと、横ッつらをはりまげるぞ、頭取「東西々々、當時筆頭の大才子、即案頓智の達人ゆへ、定めし御趣向もたつぷり、お口調もお軽い事とぞんじの外、はじめの程は古落をおかまいなくお用ひで、いつも高座へおのぼりなさると、き〜てに向つて、りくつをおほせられるやうじやこのおうはさでムリ升、ヤキ連「イヤ〜、そう一がいにはいはれまい、既に魯文丈の前評にある通り、筆は黒人、口は素人、ここに年ばいの顔役、流行におくれぬため、若い者と一座はすれど、餘り不見識なたはごを、まはらぬ口でははれては、業體のすたれにならうと、わざとりくつばるが此人の十八ばん、大見識にさういない、頭取「しかし初會に、神田祭

禮ねり物のおいひ立、御記憶のほごを一同舌をまいたといふ事、わる口「舌をまいたものもあるかしらねへが、當人の舌が廻りかねたゆへ、聞てゐてじれがきた、其後はなした兩國の道行は、いまだにおちがわからねへ、頭取「この節は追々の御上達、かり宅のばけ物、天神記の田地場などは、三題咄しの眞面目にて、故人可樂丈も、草葉のかげでサゾよろこんで居られませう、又兵衛「人はさしおき可樂の正統、此又兵衛が影辨慶、うしろにひかへたたしかな證人、見升連「兎にもかくにも大達者、イヨ〜おらが親分々々、

至上上吉 出揚 扇 夫

頭取「扱此所が、扇夫丈でムリ升、げいしや「わたしや此お人の評がたのしみじや、三甫「全體河竹の前にも評するべきを、又候せんぶとはだういふものだ、おゐらがひるきの、如阜はごうしてくれるのだ、頭取「へい〜、河竹丈にも負すおとらぬ瀬川丈は、奥座へおもくすへおきました、井街道「尤だ〜、せんぶもおゐらのひるきやくしや、はやく藝評が聞たい、頭取「かしこまりました、扇夫丈根が御器用ゆへ、何をなされてもぬけぬがない、その中にも三題ばなし、正行流の一派を立

られ、チト下品にはムリまするが、一方の達者も、人氣のよいのはお仕合〜、ここに歳旦會村先の代ご公事は受ました、開功者「イヤ〜、あまり受もせぬ、此うしは、かやうなこじつけ方を、かの正行風とかなづけて、十八番となされども、心あるものはごもかくも、初てや二度目ぐらゐるものは、あまりにやすく思はれて、風好子のせんがムリません、おなじ正行風ならば、興笑連でお辯じの、中汲の八幡といふ工合にねがひ升、御咄しのお達者では、極上上吉がものはあるはずなれど、餘り御趣向がやす〜ざるゆへ、選者も至にされたと見へます、兎もかくも一方の大將分、今少ししんみりとした御趣向をねがひます、ヒイキ「そこ所は、扇夫丈百も承知なれど、わざとこつけいをむねとされるのであらう、ヤレ扇夫さん〜、

至上上吉 假名垣 魯文

頭取「扱此所が白石咄しにかくれもなき好男子魯文丈でムリ升、たのみ連「待つてゐた〜、おゐらが連のひるきやくしや、此せつはかた人の仲間入をされたから、白石すじはぬいてもらひたい、梅園「さうださうだ、おゐらもだいのひるきやくしや、此人ゆへならご

んな散財でもする氣だ、ナント頭取、魯文丈はどんな氣であるか、おらがほうはその積り、見物「おうちわの相談はあとにして、早く藝評々々、頭取「はじめの程は小音にて、お趣向のすぢの聞とれず、實はあれでも作者かど存じたくらい、ならうよりはなる、のたとへ、此頃はめつきりと御上達、ことに趣向はれいの頓才、毎度御手柄のほごがあらはれ升、ヤキ連「イヤ〜、頭取なんぼひるき連のたのみでも、それではあんまりほめすぎやう、全體此お人は、角力なら二番取から取あげて、幕のうちになつたやうなもの、そのお達者な腕まへなら、最う少し趣向にも、うまみがなふてはならぬはづ、素人衆ならば冠たるもの、物かく業のお人には、今一トいきでムリます、ひいき「イヤ〜、夫は開功者れんのお評なれど、筆と口とは大きなちがひ、さつする所、魯文丈の横書を見たならば、たくみな趣向もあらうけれど、皮へかけてそのわりに行ぬのは、筆は業體、口は素人、魯文子近日御よこ書が拜見致したい、ヤレおのぶさん〜、

至上上吉 冬のや嘉遊

頭取「扱此處が、興笑連の頭取冬のや丈でムリ升、いつ

とても御趣向はたくみにて、そのうへ例の御能辯で、一段と聞事でムリ升、見物嘉遊丈も、はじめは左ほごにもおもひませぬが、三四會頃より一ツ足飛の御上達、ごくに點の打所もなく、うまいものでムリ升、聞功者なるほどうまいに違ひはなけれども、柳美丈の評にもある通り、嘉遊丈の能辯すぎて、遊ばすなざるが多いので、かへつて耳だつやうに存じます、此御ことばづかひさへ氣をつけられたら、河竹、綾岡にも、さのみおどるものではムリません、ひいき、殊に咄しに愛敬があつて、外の御方はともかくも、わたしや嘉遊さんの咄しにかぎり升、ヤレこちの冬のやさん、

上上吉

全亭 愚生

頭取「扱此所が、むかしの好男子唐崎求女の再來、女がうるさいとて浮世を捨、日蓮和尚が悟道をしたひ、清僧の身となられしが、賣僧の諸行を見るに忍びず、再び俗に立戻り、風月雪花を友として、世に遊ばる、一派のみやび男、愚生丈でムリ升、見物「崎人傳の棚書、餘紙がなうて書たらぬを、評判記へ持出されしか、あだし事はさておいて、すぐに藝評々々、頭取「いつとて、はかしくしき御骨折もみへませぬが、祇園守の御

趣向は、見物一統よろこびました、ひいき「イヤ、祇園守ばかりでない、御趣向はいつとてもおど、のひにはムリ升が、何をいふにも今ひといき、お口調がほぐれぬゆへ、せつかくの御趣向も聞とれませんが、聞功者「イヤ、聞とれぬといふではなけれども、いはゆる茶ばん口調にて、受人のない咄しには、少し聞延びに聞へます、今少し死活をつけられたら、今の間に立もの、奥女中「ヤレこちの正さん、

上上吉

五葉舎 全語

頭取「興笑連の滑稽師、鶏なげの大先生、全語丈でムリ升、ひいき「待てゐたく、頭取「蓋の淨辨、初音の僧正、白雲の喜六なんぞ、秀句をもつて名とするは、いといとかたき事とて、粹興連のうちにて、正行の扇夫、乳もらひの河竹、千草の有人、鶏なげの全語など、落語の四天王ともいひつべし、かく申さばとて、よいといふではなけれども、いはゆる人徳でムリ升、見物「お愛敬は申までもなければ、今少し咄しに實のあるやうにねがひ升、あまり尻きり蜻蛉にて、頭取「尻尾かわかりませぬ、ひいき「イヤ、實のある咄しは、河竹丈はじめ、銘々におきそいなれば、やつぱり實のない

滑稽咄しが、よろしきやうにぞんじます、しかしいつとて言出しは、さも趣向がありそう、末が立消へがいたして、今一ト際引立ませぬ、定連引立てもた、いでも、相替らす一ト口咄しでは前に乗し、一ト口咄しでは又すわる、いつもの格で、おもしろい趣向を待つてをり升、ヤレ全語さん、

△若女形の部

極上上吉

綾岡 輝松

頭取「扱此所が、粹狂連一方の大將分あや岡丈でムリ升、見物「待つてゐたく、ごて、なしにすぐ藝評、頭取「いつとて御趣向はこまやかにて、すみ、く、に行届、素人ばなしの冠たるもの、そも、最初の孔明をはじめ、豊の明りもめいさいの御調べ、題を生して咄さる、は、此お人にかぎり升、切、なるほど題を生して咄さる、に違ひはなけれども、豊の明りの長い事は、實にたいくつ致しました、やき連「イヤ、此うしの咄しは、切おとしへはチト不向なれど、お調べがたしかで、一々感心いたす場がムリます、たとへば豊の明りなら、殿上の節會を下世話にとり直し、花りん糖なら、くわりん糖が、なるほど此工合で出来るか

とおもふやうな、言ふにはれぬ味ひ、實に河竹丈とあや岡丈は、東西の大關でムリ升、しかしあまり趣向に念が入すぎて、ツイ、長談になりますゆへ、せつかくの妙案も、果はあきるやうになり升、御如才もムリますまいが、最う少し手みじかに御工夫を願ひます、ふじ藤「何といつても大立もの、しかしやき連の仰せの通り、チト御趣向に念が入すぎるゆへ、ツイ、長談にも成行、長旅の同行なぞといふ巻も出来ました、ひいき「少し長いかしらぬが、趣向と咄し口調は、此うしの右に出るものはたんどはムリませぬ、ヤレ綾岡さん、

眞上上吉

瀬川 如臯

頭取「扱此所が、馬道の狂言堂如臯丈でムリ升、やき連「やれ待て居たく、ごて、なしに早く藝評、頭取「かこまりました、いつとて御趣向はこまやかにて、いち、御骨折のほごがあらはれ升、俗物「おほねをちのほごはごうだかしらねへが、實に長いのは恐れ升、仕舞の方を聞時分には、はじめの咄しをわすれるくらゐ、殊に早こで聞とりにくい、やき連「なるほど有人丈の評にもある通り、大聲里耳に入らずだ、此

うしの評を、俗に長いとばかりいふのは、いはゆる俗中の俗だ、頭取のいふ通り、いち／＼節々に落がつて、その風情の凡ならぬは道の信切、扇夫丈の即案は、道に對して不信切、如阜丈のは聞人をはじめ、金方を敬すの道利、こののちとても相替らず、長々とした御趣向を待てをり升、見物「ヲイ／＼、やき連の御評言中ながら、なる程道の信切は聞へましたが、十人よれば十色とやら、好事の衆へはよかろう共、又俗々たる人もあり、一度は長く、一度はみじかく、雙方に受のよいやうに、なされたがよろしきやうにぞんじ升、ふじ圖、しかし御茶湯日と茶釜咄しは、おもしろい事でムりました、ひいき「種彦丈が御加入で、先哲の名をくだすには、はるかに増つた事、又此つぎも相替らず、たつぷりとした御趣向を待てをり升、ヤン馬道の先生々々、

老功上上吉

春風亭 柳枝

頭取「此所が、落語家隨一の名人柳枝丈でムり升、ひいき「待てゐた、早く藝評々々、頭取「此うしは古人可樂丈が形をいれる氣か、素人れんを助る氣か、いつとてもみじかな御趣向、しかし流石は柳枝丈、みじかい

ちにうまみがムい升、聞功者「うまみが有かないかわからぬうちに仕舞になるから、よし悪も附がたいが、察する所柳枝丈も御老功、素人れんと張合て、力瘤を出してもおとな氣ないといふ場合か、太刀うちをしかられたか、いづれにしても譽たせん氣でムりませぬ、ひいき「イヤ／＼ほめてもらはにやならぬ、此中で柳枝丈が、やんやとやつてもあたりまい、やらいでも柳枝は柳枝、やらぬ方がたしかであらう、やき連、しかし此うしは、奇人傳の棚書にもある通り、なにほど大酔のときでも、落語をなすに正氣にかはる事なし、いつとでも大酔ながら、こゝでといふ時は雜煮ばしの工合落、大山の四天王、此二つは眞面目にて、いつものあしきを取かへされました、しかし落語隨一の柳枝丈ながら、作るとは素人ゆへ、趣向のあまいを小ごをいふのは、聞人のむりといふもの、作者の口調のほこれぬと、落語家の趣向のあまいのと、よい引張でムります、圓朝ひいき「圓朝なんどのすじはごうだ、左樂「み「左樂の趣向もわるいか、頭取「此御兩人は別ものながら、わるい所もムり升が、紙員にかぎりもあれ

ば後へんに申上升、ひいき「ヤレ柳枝さん／＼、

大上上吉

三遊亭 圓朝

頭取「怪談、つゞき物語、道具入の本来、圓朝丈でムり升、娘連「ヤ／＼／＼圓朝さんの評判でござい升ヨ、うれしいねへ、おしやく「モシゑんちよさん、待てゐましたヨ、ゑんちよさん／＼、頭取「東西々々、チトおしづかにねがひ升、扱此お人は、本席においても、一兩年此かためつきりとの御上達、落語道若手の冠たるものになられましたゆへ、三題ばなしもそれに准じて、いつも雅俗の評判よく、こゝぞと申てなんじる所はござりませぬ、木ば連「ひるき目でいふのではないが、おいらが圓朝の三題ばなしを、外の賣人と一列にされては迷惑だ、聞功者「それはおつしやらいでも、耳のあいた譯しりもござい升、すべて粹興の兩連へ加入するときは、素人口調が眞面目ゆへ、賣人の口ぐせは、さらりと捨てしまはなければ上品にはまいりませぬ、圓朝丈はそのけじめを、よく心得られて、ひんよく辯じられるゆへ、わるおちはこぬがりつばなご、やき連「圓太郎も、鳶が鳳凰をうんだやうな物だ、ひにく「まだ若年だから、海のものとも山のものともわから

ねへ、あれで一つまちがやアさうごうはたへやアしねへ、ひいき「ばかをいハッしやい、餘人は兎も角も、物の本の勸懲をあたはふ男だ、たゞのはなし家ごんぐるめにされてなるものか、イヨ／＼代地の若大將々々々、

上上吉

柳亭 種彦

頭取「此所が二世偽紫樓、和漢にあかるき眞淵の末弟、當時の本居、仙果丈でムり升、中度より粹狂連へ御加入にて、一兩度のおつとめゆへ、いまだ御腕まへの程もわかりませぬが、名にしおふ種彦丈の事ゆへ、御趣向も定めしたくみとぞんじの外、見物「お國なまりのごつ辯で、少しも意がわかりません、やき連「こ葉は國の手形とやら、辯も生れついでのお持まへ、辯がよいから上手だと申のではムりませんが、全體の御趣向が、平生の御腕まへのやうにもぞんじませぬ、ひいき「イヤ／＼、種彦丈とても御老功、こゝには戲作者の冠たるもの、進退常ならぬの意も御承知で、落語はらくごだけに、つきあふてゐられるのであらう、聞功者「夫はさうでも有うけれども、龍も魚となれば漁人のうれいあり、物知りでも愚のまねをすれば、かへつ

てそしりを受ますゆへ、以來は切おとしにかまはず、ひと見識ある御趣向をねがひ升、ひいき「ヤレ種彦さんく、

上上吉

立川 談 志

頭取「此所が、滑稽者風の立川丈でムリ升、御老功といひ、多年の御腕まへ、いつとでも見物をよろこばせ、粹狂連になくてならぬお人でムリ升、見物「西洋人の三十一もじ、市川壽美藏の聲色等は絶世無るい、三題咄しに、軸のお半、網代守人、いつとでもおかしい事でムリ升、開功者「おかしい聲はしせん滑稽、實に腹の皮もよるばかりながら、席でお辯じのお咄しは、一家の風調ありて、聞ものをして感せしむる笑談ことに多けれども、此三題ばなしは、ごういふものやら筋立がはつきりせず、咄しの意が聞へませぬ、ひいき「ごはいふもの、御老功、そこらは百も御承知で、わざと素人だすけの爲に、アンナくだらぬことを十八番と被成のかもしれない、やき連「夫なれば立川うしは、菅公、貞信公が賢にもおとらぬ、聖人じやと申さにやならぬ、ごにもかくにも琢磨の老功、またく相替らずの滑稽をまつてをり升、談志さんく、

上上吉

川 素 真

頭取「此所は、名だたる歌仙今人丸の素真、松花ぶしの立三味せん、花紅丈でムリます、名にし書見のいさほしあらはれ、いつとでも御趣向にたくみでムリ升、見物「御趣向はたくみでもあらうけれども、いつとでも御自身でお辯じのことはなく、扇夫うしの御代舌ながら、前もつて御草稿を御わたしなさらぬのかして、本よみが腹にはいらぬと見へて、せつかくの御趣向が引立ませぬ、わる口「引立かひきたぬか、丸で咄しのすじがわからぬ、れん中「實に扇夫丈だから、よみ咄にするやうな物、外のものには、おのれ一人前の咄しさへ、もちにつくくらゐなもの、此以後は御草稿を、一兩日前におわたしをねがひ升、やき連「さやうく、夫は御れん中の仰せがもつとも、代舌程つらいものはなく、咄させるほうでは、あゝでも有まい、あれじやアせつかくの趣向が、むだになるなご、おしかりもあらう、なんでも素真丈、以來はやく御草稿をおわたしにて、なんぞすごい御趣向を待つてをります、ヤレ花相さんく、

△頭取の部

大上上吉

山々亭 有人

頭取「此處が、三題ばなし中興の發起人、公家踊の根元はべる有人卿でムリ升、下谷げいしや「有さん待てをりましたヨ、ひさしぶりでおうはさが聞たいンですヨ、おきくさんがおいでなら、ごんなにうけさせるかしれないンだネ、頭取「此うしは風雅にたづさはりたる事、いづれも器用にて、狂句沓附にも名譽あり、戯作も近年の事ながら、わづかの内に立者の數に入、世の中ひろく附あはれただけ、忽地に名をなされ升た、三題ばなしは、いつも趣向たくみにして、素人に似合す死活の呼吸を呑こまれ、殊に即題の頓作、餘人の及ぶ所にあらず、ひいき「コレく、頭取、そつちは有人からまいないでも取たと見へて、べらぼうにほめすぎるせ、咄しに死活があつて、賣人ぶるのは、本町のあき家をかり込で、まいばん稽古をしたから、その位なことは有うが、せんでへ聲色の大ごゑと違つて、はなしが小音で、遠くにゐちやアき、取ねへ、俗物「そしてはべるふうだとか、しやべるふうだとかいつて、夏尿のにへるやうにぶつく、いふのは、ごちとらにやアさつぱりわからねへ、やつぱり芳幾のやうにやつて呉ン

な、何のおもしろくもねへ、半可「大聲は里耳にいらす、待人にあらずば待を獻する事なけれ、定會の聴手も、切おとしは首にしてみれへてへ、實におそれる、實にあやまる、まつびらく、やき連「是をほむるはへつらふなり、是をそしるはそねむに似たり、有人丈のお咄しも、中ずみをとつていふ時は、素人へ賣人のころもをかけたのにて、ごつちつかすの表裏口調、しかし趣向はたくみな事で、かたみがり道の行、西行の雨やごりなどは、餘人に真似のならぬ事、粹狂連の催司といふても、朱のうちごころはござるまい、ひいき「かたみ替りも西行も、本店がたしかだからサ、やき「そこがいわゆる奪體換骨、種のない品玉はつかはれまい、わる口「おちはいつでも狂句落で、仕込が澤山だから骨は折めい、しん生の身ぶりど、川竹のこは色はよしてもらはふ、ひいき「それも一時の滑稽、左樂とよい一對の催主の本元、ほめては山々、ありさんく、

大上上吉

柳 亭 左 樂

頭取「當時すばなしのしんうち、柳亭丈でござり升、こしま「ヲヤさらくさん、おそかつたヨ、げいしや「はやく評判が聞たいンです、サアく、頭取さんねがひ升く、

頭取「當節は落語道も、道具なり物、こは色をもつばらとして、咄しは附たりになつたゆへ、御本業も一ばいお骨の折る道理、此お人は、元より扇子一本にて、諸人のおとがいを解、これまでになられた御骨折が見へまして、三題咄しは鬼にかなぼう、あいた口へぼたもち、おもちまへの軽口へ、御せい來の頓智を用ひられるゆへ、いにしへの可樂丈にも恥ぬ御趣向が、たび／＼あらはれ升、取分ちかごろ、そろばんの即案、張子の虎の滑稽、大象の頓作など、みじかからず長からず、柳枝丈と如阜丈をあいませになされた呼吸、申ぶんはござりませぬ、ひいき」ことにこのせつ、本席で即題をとられて、三題ばなしを辯じられる頓智の絶妙、可樂以來中興の元祖といふても、朱のうちてはござるまい、三ッ扇れん「コレ／＼、こちらの圓朝も、同時に本席で辯じるぞ、中興の元祖といふ名目は、左樂ばかりとおもふは身びるき、すこしは圓朝するがい、ひいき」三日でもさらくがさきた、三ッ扇れん「イヤ圓朝もそのまへから、頭取」どうざい／＼、このあらそひは合持で、この頭取であづかりませう、花雪「どうぞそうしておくんはい、わちきも中よしになつて、あいぼ

めにさらくさん／＼、

△總卷軸

大極上上吉

好文舎花兄

頭取「扱此ところが總卷軸、粹狂連の魁頭花兄丈でムり升、御身がらゆへ高座に御出席はなれども、いつも左樂丈、談志丈の御代舌で、御名趣向があらわれました、その内桃太郎の自然落、竹田街道の轉變などは、すこぶる滑稽の冠たる者でござりました、譯しり楠氏の泣男、孟照君の鶏漢を用ひられたごとき、花兄丈代舌の人を見て、その人の得たるごころに法をとき、そつくりつばへはまるやうに、咄しをこしらへらる、だけ、左樂は左樂だけに引立ち、談志は談志だけにおかしく聞ゆるゆへ、聞功者にも切おとしへも受のよいのは、三略にいわゆる、彼を知己を知るといふ語に似て、魁頭だけのお骨折が見へ升た、通者「コレコレ頭取、花兄丈はごまをする者は、いつでも味憎をつけさせるといふ事だから、悪きアわるいと遠慮なく評をし給へ、頭取「イエ／＼わたしは末生の人物ゆへ、皆さまのお髭のちりをとり升こゝろはムりませぬ、此後おわるい御趣向があつたときは、耳いつぱい

わるくもそしりもいたしませう、まつこんばんはこれぎり／＼、

△追加

上上吉

大梨園樂之

頭取「扱此所が、興笑連の好男子樂之丈でムり升、ひいき」此お人は藝事にかけては、一中ぶしを初めとして、のろま人形、義太夫、碁、將碁にいたるまで、點のうつ所のないお人ながら、落語は又味はひの違ふものど見へて、左ほごには引立ませぬ、頭取「そのはづでムり升、御連中のおつき合で、よんどころなく高座へおのぼりなさるゝの故、むりこじつけにも、おはなしのまごまるのが御氣象でござりませう、すぢ言しかしたんなげいには、もそつとまづく、口調もほぐれぬはうが大見識、御性來の美男子で、おざしきをかた側持ます、女中れん「大梨さんは咄しをせずとも、高座へちやんとすへておいて、いつ迄もながめて居たいヨ、伺いやみがなくつていゝ人だねへ、連中「ヤレ／＼おらが樂之丈、イヨ大和屋ア引、

三題噺作者評判記終

樂屋 鳴久者評判記

興言の筋立は

勸善懲惡の玉金體ちどき

樂屋雀の百轉に

言立めかす喜怒哀樂

評言の原意は

病根腑分の竹齋流

正好論の素讀から

見立違ひの素人療治

作者は阿彌内の

誓ひにもれぬ

宮戸川の邊に住ふ

惡文舍他笑

校訂は藜堂の

草かり連中

淺草寺の麓に居る

善哉亭夢窓

慶應元乙丑季秋

樂屋 鳴久者評判記總目錄

版元

傳馬町二丁目 足立德三郎

松田町二丁目 染谷藤七

佐賀町三丁目 白縫功助

彫刻の板面ラは、持たが病に意案の見立、筆の配劑
左の如し、

△實惡卷頭

大極上上吉 瘤墮羅ク興

醫者も七をなげた評判の 戀病み

△實惡卷軸

無類 盛衰競

はうハへ惡イ筋をひく 疝氣

△實惡敵役之部

大上上吉 南子の馬鹿

往來で泡をふいた てんかん

眞上上吉 嗚呼笑止

おつかふせて汗をかカせる 風邪

大上上吉 大津イゑぶし 痢病

六二連中の腹をくだす

大上上吉 惡玉相撲

東西おのノ持まへの 瘡毒

上上吉 邪魔くじら

おいノふき出す 楊梅瘡

上上吉 舌出し蛸

評ばんほど數類のない 癩病

上上吉 盛衰奇術

跡で醫者に舌を出す 戲病

上上吉 團食堂

ひもじいめを見た 餓鬼病

上上吉 辻賣眞黒

くさらせるつもりひやうそ

上上吉 破衣

欲にくクむ 眼びやう

上上吉 のづら川

障子まではづす 骨がらみ

上上吉 女牛の石摺

姦いからおこつた 寸白

上上吉 小刀板木

水かけろんの おこりやみ

上上 小和連物

いのちどりの 内損

△寫本實惡別座

至上上吉 浴衣の道之記

「ないものづくし」

出板したらおのノ驚風

△立役卷頭

至上上吉 脚色の種本

はらわたを見ぬく病ひの 腑分

△立役卷軸

大上上吉 地獄變相

根づよくはりこぶす 癩

△立役之部

大上上吉 萬八番乗組

日灸でなをす 脾疳

大上上吉 大ほゑぶし

小刀細工で骨をけづる だつそ

上上吉 醒醉競

せんきから引出した かつけ

上上吉 善玉競

寝るほどではない 鼻風邪
 上上吉 安久散
 引札ほど薬のきかぬ 血の道
 上上吉 重ノ字小地獄
 ちくく／＼なやます くわいちうの蟲
 上上士 あくむ石
 もますにおしきる 頭痛やみ
 上上士 鼻競連合
 さつぱり目にたゝぬ りん病
 上上 悪紋附
 額天狗
 上 逆サ船
 竹馬鯢
 悪玉千社
 つける薬は ないといふやまひ
 △若女形巻頭
 大上上吉 穴婦仕合
 きれいにひにくをなやます 癆症
 △若女形巻軸

大上上吉白石くごき
 身の上をうは言にいふ 逆上病
 △若女形娘形之部
 ほうび 玉梅錠
 一トばんさわいだ 霍亂
 上上吉 ふんごし洗ヒ
 すこし血のまじる 痰
 上上吉 柳の悪玉
 婦人の多い近ねんの はしか
 上上吉 若柳
 ちよつと色氣のあるは やり眼
 △濡事二幅對
 大上上吉 雨夜の封切
 若草筋
 よき一對の 離魂病
 △近刻下り悪者之部
 似々人競
 悪萬遍
 伏魔殿
 悪錢鑑
 照魔鏡
 親娘精推鏡
 譏奏精推鏡
 悪玉評判記
 假名根本不忠臣藏

キンクワの帳消 狂八重菊内チ話

珍變金瓶梅 悪憲夜興

見本大口記 色破短歌

不知假名盛衰記 狂舌出志三馬

是等の諸病は内攻の症にて、診察に能はず、追々發病を待て見立をつけべし、

畫工筆耕摺校者之部
 落合幾次郎 高橋彌太郎
 宮城喜三郎 野崎文三
 村川芳春 甘堂砂燕
 大宅重次 村橋昌三
 葛飾爲齋 清水柳三
 三木芳盛 松島大次郎
 歌川國孝 太田多七
 市場艶豊 朝倉萬次郎
 綾岡岸雄 朝倉友吉
 武田幾丸 柳亭相女
 安立富貴女 奥山東玉
 柳亭左樂 壽笑亭あゐ玉
 浦月上清 岡本大幸

都角女 川鍋狂齋 興言作者之部

福井正藏 武田勝次郎

足立座

假名垣魯文 安久堂竹馬 絞吉兵衛 甘同坊凹得 珠數屋五郎次 石井一庭 出揚扇夫 梅素玄魚

染谷座

一惠齋芳幾 全亭於呂加 柳亭種彦 葛飾醉櫻軒 小歌才吉 會目家十九勝 山々亭有人 スケ假名垣魯文

樂屋 鳴久者評判記

白 縫 座

山閑人交來
大笑坊銀馬
瀬山兼吉
菊廼屋柳美
都松兵衛
千住淫邑昌
卒端樓羽扇
假名垣魯文
二世仙果歸號萬石亭積丸
ヌケ 翫善舍餘慶
春廼屋幾久
十萬桐雨
雪松園美佐尾
瀬川如阜
楓阿呂成
河竹其水

△頭取之部

千辛萬苦大キ名世叶

樂屋 鳴久者評判記總目錄終

△實惡卷頭

大極上上吉

瘤墮落興

頭取「此所が先し御評判の、白石くごきの敵討、瘤墮落興でムリ升、下谷連、是はご迄に世の中をさわがせた、盛衰くらべはごうするのだ、頭取「御尤でムリ升、諸悪ぶツさらいくらべは、おもくご巻軸にすゑ置升た、まづ目錄の順にならひ、こぶだから申上り、見物ぐつとしようちだ、いざくごなしに評言々々、頭取「此こぶだらは、わるいたづらの中興にて、もちろん作者は名にしおふ、たうじ名うての筆才子、ろぶん丈の事なれば、一庭「イヤ頭取、せけんいつとうそのうたがひなれど、ろ文丈はしらぬとの事、これにはなんぞしようこでも、頭取「イエべつにしようこもござり升ぬが、これはたゞいまも申通り、白石くごきのかたきうち、ことに文中に、お高の勘定なご、あるは、其いせんきやつ、夜すがらよし町に、氣をあぢにしたうはさもあり、さもなくとも、文のはたらき、ほかのものにはま

ねもできまい、けむ連「文はよいかしらぬが、當時らしいめいの先生へ、あまりしつれいがすぎるではないか、ろ文組「もとよりさしたるいこんもなし、たゞいたづらの事なれば、あんじにのりがきてからは、こゝらでとめるといふわけにもゆくまい、やちん馬「さうして頭取さん、此ゑかきはたれであらう、頭取「これはまうさすとも、眼のわるき小兒のいがほ、りやく畫ながらも、しせんのしやしん、よし幾丈より外には書人もムり升まい、筆工はいはすどしれたる交來、ごうばけてもかんでいりうと、しやうけんふうが、ひとつになりたるお書ぶり、見物、夫で何もかも分り升た、ごにも角にも瓦板の中興、イヤおやだまア引、

△實惡卷軸

無類

盛衰くらべ

頭取「大あたまをはからぬ、はんぐわんもごきの小ざいくも、ごびそこねたかざるちゑの、諸悪をかねしせいすいくらべでムリ升、自娘「此ひやうげんをこゝでされては、かみの毛でもつめねばならぬ、おもひ出しては、はらのたつかうらいさんじや、頭取「おやごの心を思ひやり、そのおなげきは御尤ながら、もくろく

の順なれば、ざつと評言をいたし升ふ、くろふね「面白面白い、ないくの事迄も、おれにはたねがあがつてゐる、ゑんりよなしに、はやくげいひやうく、頭取「ろ文丈と仙果丈、そのつみあんくとして、わかりかね升たが、ぎやくをもつてじゆんにてきせず、ごふやら仙果丈とつみが極りました、場より「ライく、一庭丈のあつかひから、よし幾丈の御りつぶく、ありんごぬしのひまつぶしも、はなしには聞やしたが、まだ正じんの番付を見やせん、仙果丈がこしらへて、ろ文丈にみせたるを、世話掛の羽扇丈が、淺草連にはなされたゆへ、何が扱はな高やの事なれば、羽うちも力もかりず、たねひこ丈をたきつけたところ、風に柳のぶらくご、れいの多べんでいふだすき、神主殿のそこつから、絲に絲がごぐらかり、師匠の方から、破門状といふ一札をわたされるしぎに成ました、連中實に神主殿も、鼻高のあおりぐらいを證にして、世けん人ののしらすにすむ事を、おほぎやうにひろめたのは、一世のふてぎは、夫に只わからぬのは、仙果丈とかながきは、ジイのたれ迄なめあふ中で有ながら、つみをぬるの、かぶせたのとは、ごふいふりくつかさつ

ぱりげせない、頭取「これは賣物に出たせいすいくら
べに、好以さんと菊の屋ぬしに、ろ文丈が筆をくは
へられてから、いろくごたくがでさ、夫らもおも
しろからぬ所へ、又こんども、じぶんがごめて置な
がら、たねわりをした、立腹でがなふり升ふ、譯しらす
「イヤ〜、いたづらはやらす、のがさぬろ文丈、どう
きいてもくさく思はれやす、譯しり」連中一同、其ぎね
んも有升たが、仙果が一庭丈をかぶせた一條から、い
ろ〜書物などもあつて、やう〜瑁が明きやした、
始め交來丈が柳庵翁をあをつたのも、意味の有る事、
たねひこのふでかし、ろ文丈のぬれ衣、連中「此くらひ
なぬれ衣では、これ迄のつみの帳けしがなり升まい、
頭取「何はともあれ、番附はちひさうても、さわざは太
きいゆしまのおさる、また近日御しゆかうをまつて
をり升、

大上上吉

南子の馬鹿

頭取「藏まへ通りの鶴の一こゑ、坂本の石の間に、あや
ふい立廻りも有さうで有た、なんこのばかりでふりま
す、老人「やれ〜まつてゐた〜、先の評言でつめた
いあせをながしたかはり、此度もなが〜とやつて

もらはう、クシヤ〜、頭取「正行忌のけいりやく
も、南子の寄手に水の泡、出あけのちそうにもれたれ
共、せんやうていのおく二かいに、わりぶしんのくば
り物、お手ぞろひとは申ながら、お早い事でふり升
た、配り先、あまりにお手ぎは過たゆへ、かへつておの
れが板元と、わかつたやうにぞんじ升、譯しり「イヤ〜
これは此せつがらのことゆへ、手のびに成つたら、藤
七や徳三郎の兩座元に、先をこされやうかと、夫でい
そがれたのでふり升う、しかし嗚呼執心はよくはま
りました、他連「はまりもよし、お手ぎはもさつそくで
はあつたなれど、ひろをかやを、たのむにはおよばぬ
とは、チトふてぎは、なんば夜中と云ながら、道でも
かへておかへりなら、これほどこんまにはふります
まい、ぬひ秀「こんまも〜、第一御連中先生の、御息
を受ないものはない、殊によし幾さんは弟子もごう
やう、交來さんは、さかさまにはつきてもよいこのこ
ど、あやまらぬとは、ろろちがひ、見功者「イヤ〜、
それはひでさんが、くはしくわけをしらぬゆへ、よし
幾丈が、この人にをしへられた物もなし、交來丈とて
も、師は師ながら、いろ〜意味も有るとのうはさ、

両方きかねばすぢがわかりません、れん「イヤ〜

大でも小でも悪事はあくじ、そんなわからぬ評言は
しようちせぬ、頭取「夫も是も、河竹丈、羽扇丈、ろ文
丈、染谷丈、竹馬丈、大笑丈、六人のあつかひで、壽仙
樓の席不足も少しは有たれど、まづ〜丸くをさま
り升た、イヨめ「たい〜、

真上上吉

嗚呼 笑 止

頭取「せいすいくらべの二番目、嗚呼笑止のなりもの
でふり升、これは皆様ごぞんじの、南子の馬鹿のおひ
かけにて、作者はいまだわからぬごげたいのはまり、
玉金のはしが、りを、高はしとされたるおてぎは、そ
のほか六尺の火打箱の目付、ものすごいほどよくと
とのひました、見物しかし粹興奇人傳でひやうばん
の、わるい六尺の火打箱に、ねこをのせ持せた所は、
他人のやうにも思れやす、頭取「イヤ〜、めつたな事
は申されぬ、いづれ近日、作者のわかりしだひ、かは
らばんをもつて御ひろう申升、た〜、あくご過る
所もあれど、出来におゐては、おそらくこれほどの物
はふり升まい、よつて眞の位にすゝめ升た、イヨおて
ぎは〜、

大上上吉

大津イゑぶし

頭取「いせ町の定九郎も、やぶれかぶれと立腹したる、
大津イゑぶしでふり升、かうじ町の與一兵衛、娘はもた
ねど六二を賣つて、しまのさいふのほころびた、うち
そとまでをうがたれしは、さすがかながき丈、おてが
らでふり升、見功者「イヤ〜、夫も其はづ、もと一連の
得賀丈からたねのあがつた事、六二だうりこそ、連中
の見物の日に、玉金のたぬき殿が、ひたりふうじを持
こんだら、海如齋ぬしのかほいろが、じつに妙でふり
升た、頭取「夫より得賀丈が、玄魚丈の犬になり、くだ
んのはん木をぬすみ出し、早がはりのおてぎは、後
段に評を申升が、又一段でふり升た、ごにもかくに
も、組合の衆をくばりにたのみ、高島や丈へのけん
つくなどは、又一ツ興でふり升た、イヨじゆごたまア
引、

大上上吉

悪玉 相撲

頭取「悪玉くらべの小股をすくひ、人のしゆかうを反
古にした、悪角力でふり升、黒白の文字のお手ぎは、
おや代々の戲場家だけ、一統かんぶくいたし升た、見
物「お手ぎはのほどはしようちじやが、ごじぶんを外

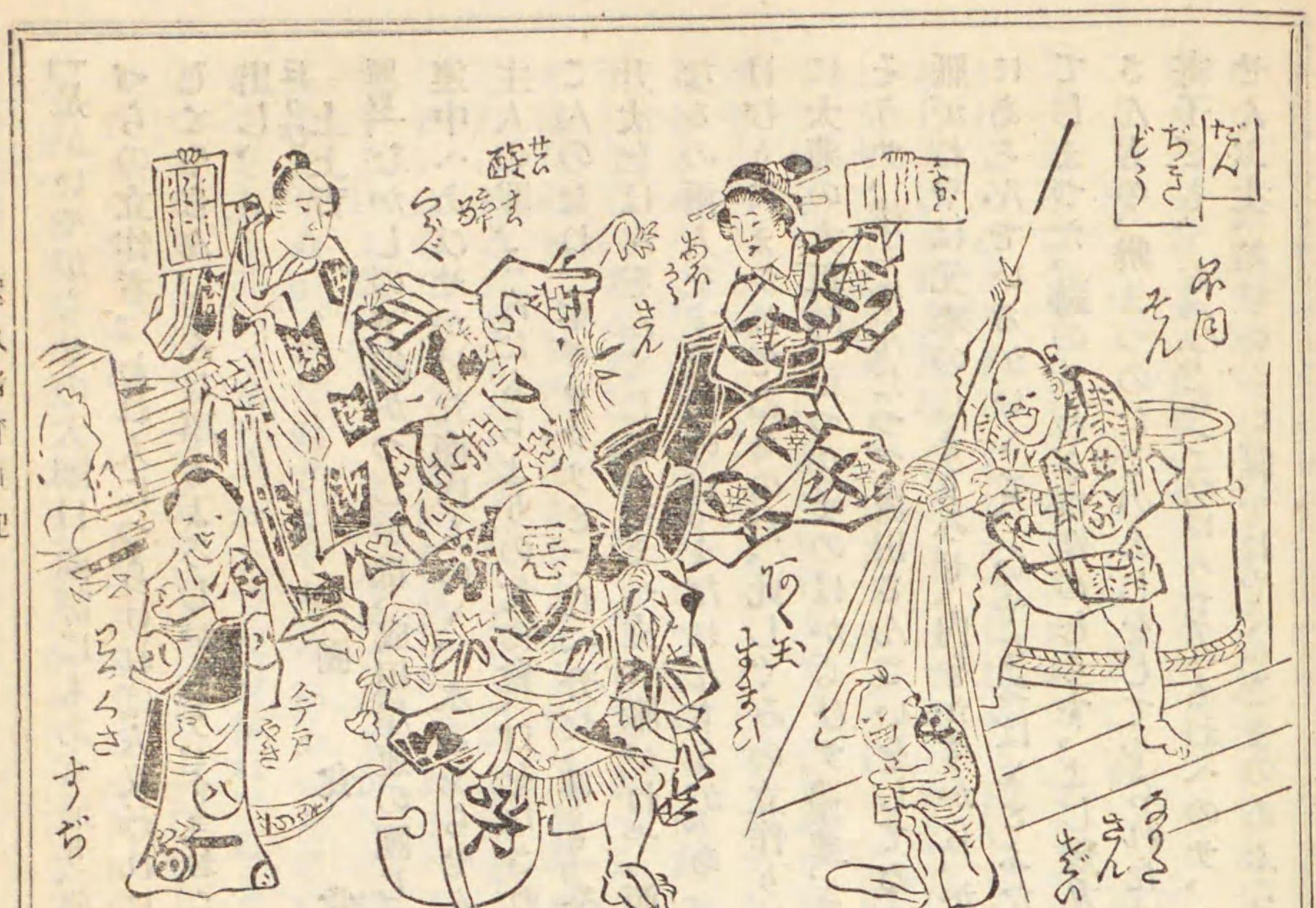


悪として、まく下の三枚目へだされたは、いづみ町ゆ
 づりの大百目、實惡の仕打こたへ升た、譯知り「イヤあ
 まり實惡とも受とれぬ、人が見たらかいるになれど、
 幸ばうのあぶらやへかくしたを、みあらはされたそ
 のふてぎは、手代敵のやうであつた、笑しり「しかし此
 一事はふてぎはでも、竹のそのをや、その外の隠あく
 すべて多ければ、三よし丈の市介の役廻りにうつて
 つけ、頭取「しかし慾の一字に老人をいからせ、倍鹿
 の二字に親分をもませたるは、いつものふで先、イヨ
 高らいやのあく玉く、

上上吉

邪魔くじら

頭取「七うらならぬ大裏に、おつな虚説のいちの森は、
 一の鳥居でござんじの、紀州にあらで尾州の船頭、ど
 んだところへ乗合の、じやまくじらでムリ升、見物「す
 り物もいろくみだが、畫師や作者の名を入れてかい
 たのは、こんどがはじめて、よもやわが手に名を入れ
 る人もあるまい、譯しり「夫が苦肉のはかり事、じぶんで
 ないといふしようこに、あらはに名まへをいれられて
 も、その手にはのり升まい、頭取「作者のせんぎは兎も
 かくも、花川戸のさらさや迄入られたのは、すごいお



手ぎは、いつもであればいつかごの大當りとなるも
 のを、飛入のせいすいくらべに、人氣をとられたのは
 ざんねんく、しかししじうは、しりッばねがするで
 あろう、ヤレおそろしやく、

上上吉

舌出したこ

頭取「一人りかふたりが手切レの小摺、舌出したこで
 ムリ升、大かたこれは仙果丈、たね彦丈の謀書をこし
 らへ、師匠に罪をぬりつけた、其帳けしをする心か、
 たしはやつぱりる文丈を、くさいといはせる小細
 工か、なんにしても、はなはだふひやうでムリ升ス、
 連中「一庭ぬしがせんさくにて、畫師も作者もしれて
 はあれど、取るにもたらぬ半道敵、さしてひやうする
 ところもムリ升せん、なんぞ花々しい事をまつてを
 ります、

上上吉

盛衰奇術

頭取「何事にも氣をもまぬろ文丈、惡名にやつきとな
 つた、其虚につけこむ盛衰奇術、艾屋姫のおうがち
 迄、いやがらせの手しぶい御趣向、受取ました二庭
 「内外のおうがちは、いかにもとやいたが、白石姫や
 艾屋ひめは、此場に出すともよさそうなもの、譯しり

「是がいやがらせの大關目、前評にもある通り、悪いたづらの立作者、われ人につられれば人又われにつらしとやらん、こんな事もよろしからう、イヨおらが舌出し、
ほうび

上上吉

團 食 堂

頭取「むかしの下總かつしか郡、成田屋連の團じき堂、連中へあびせかけた商内もの、水あぶらせんぶら主人の罪、こんだもちよりの食物會、口をなされたのこんたね、本ギツクリとこたへ升た、譯しり」全體三升丈をほんぞんとして、おまへ立に雁がねや、西川おなるの兩人をすゑたのは、まだれんちうが、あぶらのけむりにまかれてゐるのだ、此しぐみの立作りは、名に大菊の大軍師、正つら丈のはからひサ、團連、そうサそうサ、權ちやんだつて成田さんさいをしてゐるし、雁がねやは元來のしまりみせ、内をかすから、かつてにあそんでゐるがい、と、いやなおば、とふたりねてしまつた、跡のさわぎはゆめしらす、よし幾丸のぢさんもの、辨まつたこのあしをしてやられたは、年寄りども、おやちにつみはみぢんもねへのサ、うがちせんぶ丈、箱根いらい雁がねやへ、ごまのあぶらで連

中をそゝりたて、斷食をさせたのはお茶番とも思ふが、じぶんは一寸そのばをばつし、するきやうれんの家元で、茶の會のあるをかぎつけて、會席をしらべこみ、くらひふとつてゆうく、と、もどつてこられたたつしやなしうち、よく目立老人がかしこへおどづれたゆへ、たねがわかれての御急案、例のこんさくの句づくりに、師走を滅る月とこしらへ、腹の蟲がなくとよまれしは、眞實庵の風骨をうけられた悪玉の老舗、ねがはくはせんぶ丈を、モウすこし手ひごくたいぢられたら、正つら忌のをり、南子のばかなめにはあうまい、頭取「しかし名代のごま悪をくじかれたお手ぎは、さすがはふでの喜三郎丈、ぬひ秀、イヨくおらがおやぶんく、

上上吉

辻 賣 眞 黒

頭取「さかなの直うちを下げさせる、わるぢゑのつじうり、眞黒畫合を魚屋とよませたは、すこしはお手がら、しかしなんのしゆゑもなく、おのれがこんをはらすためのぶおもひつき、夫ゆへ瀬川丈へごいけられた、猿わか町へのくばりぶんは、あつためてしまはれた、しかし思ひ付はようムリ升た、見物「よい思ひ付

とは、此魚屋の事か、頭取「イ、エ如臯丈のしんせつつ事でムリ升、イヨ正眞の善玉々々、

上上吉

破 れ 衣

頭取「此所はごぞんじの、絲のみだれのくるしさに、ついはころびしやれ衣、しゆかうにほめる所はないが、おしあげの田島屋迄、わざくもつてゆかれたは、ごしんせつでムリ升、せんでへよくねへ、このおしやうがしゆぎやうに出ないけりやア、おれが言つた事がたゝぬが、人の心ばいもしらねへで、すりものでもあるめへ、わざく田島へいつたのも、向島へんに下じよくのある男だらう、さるや十ゑのきへふんごしと書たのも、其おかたでありませうねへ、百姓「イ、エそれは外の人でもあらうが、ナゼこの名僧をふんごしといふのだ、わる口「大かたはだか、衣がへもなんじうといふ事だらう、頭取「イエころもがへの儀はぞんじませぬが、わたぬきとやらを、かぶつたといふうはさでムリ升、不案内「かぶつたのはわたぬきで、しよつてゐるのはなんでムリやす、譯しり「むかししよつたものはしらねへが、このごろしよつたはのづら川、いつも四五三二六と、なめかへしたにてをやい

て、きつねを脊なの春右衛門、三ッぶと川へしづんだる、身うけのくめんもたねがわれ、實にいまではどうせう寺、たゞかんしんのは女人きんせい、とにもかくにも一連の愛敬もの、大笑「夫ひやうばんが直つてきた、皆さんきいたか、くみ「きいたぞく、

寫ほん

浴衣の道の記

至上上吉

ないものづくし

頭取「東西々々、扱此どころへあらはれましたは、いまだおめみえはいたし升ぬ、寫本の祕物、かくれたるよりあらはる、陰惡の二ふくついでござり升、ねこにえんあるしほりのゆかた、つゑはつかねご下駄ばきの、道の記より申上り、梅ゑん「まつてゐた、玄魚丈、扇夫丈、彌次喜多の北國道中、その道々の滑稽を筆記されたは、古人十返舎ならぬ十萬大人、校者は有人、ろ文の兩子、さだめてうがちのあら垣が、山々であらうぞへ、頭取「記行の内、雷門にて玄扇兩子、渡月主人にわかれてのいそぎあし、中田の角にて往來のけんくわに、足をどめめたこまかひうがち、みなどやの前を、見付らぬ様にその心配、ド、大もんをくり、江戸町一丁目尾彦の見世先にての仕うち、扇夫丈

二階と下々のけあひせりふの所へ、玄魚丈くらやみから、色氣をふくんで出られたこなし、御兩人のゆかたごしらへのきれいな、御連中におめにかけたうござり升た、わる口「さだめしほうしよの紙へ、たごんをくるんだやうで有たらう、地廻り「イヤさうでもねへ、あくる朝かへりを見たら、ゆかたは白地かねづみいろ、髪はもぢや、手足の爪はながくはへ、前ばなをの延た、いかんな日より下駄で、仲の町をゆう／＼とほられた仕打、じ、むそうムリ升た、さすがのせんぶも、にが／＼しいかほで有つた、吉原「何はともあれ十萬大人、さすがはかつばの家元だけ、穴をほじられるところおごろき升た、悪玉「十萬大人はなぐさみだらうが、そのうしにひかれて、善ならぬ悪行の有人、ろ文は、よつぼごなするきやう連だ、羽扇「しかし明地の草の中で、見てゐたらおかしかつたらう、交來「犬にはへられたのはこまつたさうだ、折米「御連中の悪評は扱置で、ます／＼ごさかんの花がたぞろひ、白つぽい仕打はゆかたごしらへゆへ、イヨい、人のおそろい／＼、頭取「作者もひさきはひき立ち升ひき立ち升、切落し「ヲイ／＼頭取、道の記はわかつたが、な

いもの盡しはない物にするつもりかエ、頭取「イエ引つゝひて申上り、扱さき／＼かくれもないものづくし、あしやべり「作者のうがちにぬけがない、ごうでかかねばたまらない、ほつたら常人めんぼくない、ろ文「自筆のはりこみ云譯ない、有人「もつともひどりちやござらない、よしい／＼ぬりつけられてはうまらない、頭取「東西々々、問におちいでかたるにおちる、本文のあらまは、きやうぐわ合せの別世界、外へはない／＼ないものづくし、なか／＼こまかくひろはれました、無名「一寸口繪を見かけたが、○印のまごひに、よ組組のしるしのはたらき、かつほしまでそへられたのは、ねこにえんあるなぞであらう、頭取「帳中の祕物、ふしん／＼のおかたは、趣向よつて、はりこみを御拜あられませう、

△立役巻頭

至上上吉

脚色の種本

頭取「扱此所が諸すり物の大詰に、見出しやくの脚色のたね本でムリ升、つゝみにつゝむ陰悪を、天眼鏡にかけたるふでさき、作者畫工はいふに及ばず、彫摺迄の名目を、こまかにしらべ上たるお手ぎは、立役の巻

頭にすゑましたは、ひがごとではムリ升まい、けむ連

「コレ／＼頭取、萬八番の筆者を玄魚丈、補助を大笑丈など、跡かたもない事をかゝれたはふせんさく、巻頭などはチトしよくすぎやうぞや、せんさく「しかし作者は、れいの舌だし小僧と、しつかりおさへた仕打はかんしん、もちろんろ文、有人ぬしに、さしていこんはなけれど、一寸興にのる人物ゆへ、持たがやまひのふで先で、モシ文さん、有公をちよつくりたいじるしゆかうはないか、此大役は足下にかぎると、持上げた人は得意先、名まへはだされず、さりながら、ろ文丈ひとりにあびせるも氣のごくと、ほうゆうに信ある作者の遠慮、實にかんぱいぢやテ、わる／＼「なにサ、蛇の道はへびで、連中がせんさくをとげたら、名目のわかるのはあたりめへだ、まくうちちの樂や咄して、おいらチにやアさつぱりうけとられねへ、頭取「東西々々、さうはおほせられ升が、祕中の祕とする穴をうがち、いまだ草稿であるもの迄を、おしらべのお手ぎは、立役ふつていのじせつ、巻頭は此物にかぎり升う、見功者「さうだ／＼、實に一チ夜づけの興言には、作者のほねをりがあらはれた、イヨ／＼おらが

悪だまア引、

△立役巻軸

大上上吉

地獄變相

頭取「つくりしつみはふか川の、善悪のもんじにえんのある、さが町の新案、しやばいづばいの評判者、地ごくへんさうの圖でムリ升、ふりき連「コレ／＼頭取、くわんちくへするたはい、が、しぐみのたね本にも、ろ文作とあるを、羽扇のあんじのやうにだしたのは、ごういふ間違だ、粹狂連「イヤ／＼、書入はかな垣丈に違ないやうすだが、此ほつたんは、交來丈に悪玉ばん付をなすられたいしゆがへしに、孔明もどきの羽せん丈、はかり事を荷箱の内をめぐらし、勝公を千里の外になげいださんと、すは町を味方につけ、一ッしやうけんめいの、ちゑぶくろからしほりだし、じやうはりのかゝみにつけたせんさくに、もうとうちがひは有さんの、角力のゆうれい、ねこのふみだい、竹馬が馬頭のがくやおち、いんあくろけんやしゆらばのかしやく、此巻ぢくは頭取が、よもやむりじやアあんめいと思ふ、みな／＼「へい／＼地ごくごもつとも、イヨひろ岡屋のはで男さま／＼、

△立役之部

太上上吉

萬八番乗組

頭取「去暮より當春へかけて興行致された萬八番の、狂畫角力勝負附の名まへづくし、ひにく待かねた待かねた、せんたい一枚ずりの瓦板とはいへど、兼題の喜怒哀樂をはめこまれたはたらき、すべて一部の趣向と、のひ、小刀にさびをつけた手ぎは、白大ではチトふしようちだせ、頭取「御尤でムリ升が、此しゆかう、過たるは及ばざるの道理、元來風韻のいたづらが、き、すぎてやばになり、チト興がさめたといふうわさゆへ、ごてくなしのまんはし、くろい事が白くなつたといふ思ひ付で、位づけをひく、いたしたは、ようじんのある事でムリ升、通り者さうだ、ごかくいたづらも、かうじすぎると破れんのもだから、あつさりがよからう、さすがは悪玉の頭取、善にもつよいさばきやう、女れん「誠にくかんしんだねへ、

太上上吉

大津ゑぶし

頭取「前評大津ゑぶしの早替り、海如齋得賀丈、黒ふね代地の犬となつて、黒しやうぞくの忍び出立、かながきを切やぶり、うばひとつたる此板木、玄老丈へ手

わたしなし、跡しらなみとなりしものち、玄老丈みづからの小刀細工に、前板を爰かしくごぞうげんせられ、あふむがへしの當意即妙、しかし五段目づくめの二の替りゆへか、格別の評がなくてさんねんでムリ升、うぢ「あれももつと、評をとる所で有ツたが、ふたをあげぬうち、ろ文丈にたねを見だされたゆへ、わづかばかりのくばりであつたが、前板ごくらべると、手からはこちらがうへだらう、縫ひで「すべてかういふ事は先生の十八ばんで、外にるゐなしサ、渡月「そこは名にあふ大立もの、重間「わちきは、その手ぎはに買かぶつたのざまス、ねへせやまはん、

太上上吉

醒醉くらべ

頭取「當時ひやうばんのさわぎもの、せいすいくらべの穴をゆく、因果連中醒醉くらべ、見功者「森羅萬象の口合から、東西の二幅對、換骨奪體と小むづかしういふ筋もねへが、てつきりこりやア黒人の作だらう、頭取「おさつしの通り、例の立作りが意味をふくんだ書おろし、お手ぎは、見えてあれど、先板の術ゆづりに、大ドロでかきけされ、さまでの評のないのはさんねん、悪れん「なんぼ手ぎはでも、先の盛衰くらべと見

くらべにやアわからねへ、仙果のところから、一まいもらつておつかふせやうかしらん、種彦「それはまことにおそれみく、コレ手をあはして、あやまつてまうす、ガラくくく、

太上上吉

善玉くらべ

頭取「立役よりは敵役の方がまさるごごく、悪には染やすく、善には赴きがたし、あゝ孟母三度所をかへ、白絲をみてなげきしひじりのふる事も思ひ出され升、ぞく物「これく頭取、何をいふのだ、白骨のおふみなら、おとりこしにするが、わろ口「こぶだらきやうなら、徳正寺をたのみなせへ、せつかち「ごてくなしに、評言が聞てへき、てへ、頭取「かしこまり升た、善は悪ほどに評がないと申す、引事の長口上、ごたいくつでござり升たらう、此御趣向、やんやと申程の事もござりませぬが、へきな善と書たばかりで、名目を出されぬ仕打、實惡にもまがひ升、樂々通「そのはづよ、作者はみなさんが、かんでいの高麗やだものを、

太上上吉

安久散

頭取「書おろした筆の拍子、扇都松兵衛丈のたんせい、悪玉れんのおめみえ興言、なかくすごい御趣向御

趣向、あかく「おとつさん、おまへもつごひごく書てやればい、のにさ、あのあくたうが、コリヤくせんせいををるので、ときん「おこられてこまつたよ、松兵「だまつてきいてゐな、じやまにならアな、頭取「右の御しゆかう、かきおろしたま、かはにかけず、正本のま、おいたのを、このせつしぐまれたやうすゆへ、チトリうかうにおくれましたが、ごまかくもでき升た、

太上上吉

重の字小地獄

頭取「重の字のてうちんじるしを、くらやみちごくへはきおとされし、そのいんえんの小すり物、このゑあはせはたれのぢやと、かぐはな見るめのすばやい御しゆかう、大笑「モシ羽扇さん、よつぼごよくでき升たね、うせん「わたしじやアねへ、をはりのせんごうだヨ、

△若女形之部

巻頭

太上上吉

穴富工仕合

頭取「ひやうばんの馬之丞に、桂木が命をかけた、穴富工仕合でムリ升、七富の形をその儘にて、ねづみをねこに取かへた立廻り、小手の利た物でムリ升、見功者

「山臺に七人の出がたり、音もてうしもよくと、の
 ひ、第一外のきたなざいくと事が違ひ、きれいな事でも
 り升ぞ、夫より道具がはりのみだしとなり、ばうずや
 つこの半道は、ごつとおちがまゐり升た、命ぐみせん
 てへ何も先生が、そんじよ夫で何ンしておくものを、
 やれすりもの、おきやうのこと、びやうぶの外でこし
 をつがふやうな、やすい役は店を出し直し、すこし先
 生のまねをして見るがい、すなうまらねへのはお
 ればかり、此すり物にも引合にだされ、大笑坊のにせ
 手紙で、いたくもない腹をさぐられ、はりのむしろに
 坐す思ひで有つた、去る婦人「たんとひやかしておくん
 はない、これにはわけのある事ですヨ、人の心もしら
 ないで、チョツ、頭取「夫はまへもつて、立作者の野崎
 氏、おまへの心もさつしられ、こぶだらきやうにする
 されました、長來「何といつても先生は先生だけ、奉書
 半紙ねづみ半切まで、すりもの、かすをつくされた
 いろ男は外にはあるまい、イヨ色悪々々、

△巻軸

大上上吉

白石くごき

頭取「かはら板の元祖、いたづらの種まき、しら石くご

きでムリ升、ひにくなもんくをならべたは、くろ船り
 うの十八ばん、手しぶいいじめは受升たぞ、石井「作者
 は有人、せんぶ、よし幾合作の事ながら、隣り琴じよ
 のかみさんとは、ふせんさくにもほどのある、外の物
 なら大やぼをいふ所だが、名にしおふ、つま戀いなり
 のちごあがり、ふだん着なれたごんつくを、曲てこよ
 ひもしつぼりと、舌出し小僧と名にたかき、くらうに
 んだけなみかせなし、モンじやまくじらを何ンとか
 いふなら、おれが出てかけあひませう、頭取「イヤ夫は
 ごとにおよぶまい、當時ぬれ事師の極めふだ、色男の
 ばん付迄、お手につけられたいきない、人が、よもや
 やぼはいはれまい、交來「何は格別村昌が、抜すりをし
 て樓上へ、前夜にもつていかれずば、又一トきはな御
 趣向も有升たらうに、ざんねん、せんぶ「むらはし
 めが、ぬきすりをしやアがつたか、おいらは有人がも
 らしたかとおもつた、頭取「やかた船で、二題のはなし
 にとりませ、くごきぶしをうたはれたは、やけかごき
 やうか何にもせよ、あやしき迄にすごいお手ぎは、江
 戸「ヲヤ、文さんにはそんないきな事があるの
 かね、くやしい、頭取「どうして文さんのいんねんは、

評言ぐらゐには書とれ升ぬ、近日人情本でごひらう
 いたし升ふ、色悪ともに、鳥羽やのかねさん、
 ほうび

大上上吉

玉梅錠

頭取「染谷座の當り物、泥中の玉梅錠でムリ升、玉梅錠
 の三字のはまり、一字として遊びなく、よいぞ、
 山の手連「趣向は實にかんぶくだが、ろ文の子分の名か
 らして、愚かおやちにおさへられ、夫からたねのばれ
 たのは、藤七流の性は善、はがい、やうでムリ升、福井
 「「イエ顯に當人をおさへてさへ、ろ文丈か有人かな
 ぞ、れいの凡眼でしよいこむところ、もし當人が
 つかまらずば、又よし幾丈がへどもごするであらう、
 頭取「何は格別、玉金丈の泣はじめ、能ぶたひも夜梅と
 やらも、シテ仲間のがれぬなかでムリ升、中よなかな
 か、やられたりなく、

大上上吉

輝あらひ

頭取「扱此ところが、ゑんかうのかたはださむき、ふん
 ごしあらひでムリ升、ごういふわけやら、頭取も評言
 まち／＼にて解しかね升が、晝組のかきわり、狂歌の
 仕出し、あまりにつたなうムリ升、連中「唯狂名を悪童
 子、梅惠子にいたされたのが、すこしくおてがら、物好

「ごういふわけで、交來丈の振身でゐたのがしれやし
 た、頭取「江戸町邊へたづねものによかれたところ、み
 ちづれのうかれ人、ごろねをしやうといつた所を、ふ
 んごしがないうへかへつたごのはなし、わる口「なる
 ほど、ざりとふんごしははづされぬものサ、

△滯事二幅對

大上上吉

雨夜のふう切
若くさすち

頭取「つくばやま、はやましげ山しげけれど、もみぢに
 ちなむ楓阿彌のふう切でムリ升、興笑「コレ頭取、か
 はら板の一枚すりより、番附や摺物で名の高い、若く
 さすちはどうしてくれる、見升連「たごへかはら板で
 も、世界は江戸町の、みせだは、わる口「ぶたいはい
 いが、つごめト二朱臺、二ほんゆびではみがきをつか
 ふ、い、人もねへもんだ、むだ「おほかたしよしきが高
 いから、けんやくをするのだらう、頭取「東西々々、評
 言なかば餘事は御無用、此所は封切に、若草すぢをぬ
 れ事二ふくついといたし升たが、申ぶんは、か「ねへ
 ぞ、早く評言をくせれ、頭取「此ふう切は近頃
 の當り物、しうたん場はとりわけ見ものちやと申ま

した、他連「かやうな事迄こまぐと、どうしてたねをあげられたか、大ろじの八右衛門迄、おごろひたやうでふり升た、ふっき連「そこはいはゆるすいきやうれん、あるひはじゆんれいふるてかい、せきぞろと迄すがたをかへ、やまとぢならぬをはりやを、あらつて来たゆへ、しれるはひつぢやう、わる口「此封切の忠兵衛は假の名にて、實はある玉やの喜多六、重岡「ヤ、夫ではよしだやの様です、譯し「道理でむかしはやりがふり、いまはやうく長刀の、さうりはおろか白なめし、上ざらしの二枚ぐつ、とんだじぶんのけんせんぐるひ、小川「なんでもおいひなさい、いくら皆さんがわるくいつて、せんせいをころがさうとしても、さうしてもころげまへんよ、せやま「それぢやアだるまさんの様だね、ヲホ、頭取「おまらかねの若くさ筋、こはれもの、悪評を、まとめるためのたばこ入、御さんざいだけ又一きは、はへた様に存升、粹狂連「此たばこ入のけむにまかれ、くごふはいはぬがよみ人しれず、トことはられたは何とやら、うしろぐらいやうに存ます、譯し「イヤ、御當人がことわらずば、あるかないかは餘の人のしるべきいはれもな

いといふもの、しかしこはれもの、いたづらも、するぶんやばになり升たが、さすが名にあふとほりもの、根こじてうゑた手いけのきくのや、今紀文とよい一對、御全盛でふり升、仙果「それもせんたいさる人と、好以さんにした物を、ろ文丈に筆を入れ、めんぼく玉をふみつふしやした、そのへんぼうに小摺をば、こしらへたのを、ろ文丈とめて置て世間へふいてう、夫から事がおこり升た、頭取「其儀は前評にもふり升れば、餘事は興言のさまたげ、たゞ柳橋花街おしなべて、アレみつさんと夕がすみ、立るやいづこみよしの、山口三うらうらと、河東一中太ざほ迄、やらすのがさぬ今光氏と、みづからきはめた好男子、しかしのごの御器用さは、旦那げいにはをしいものをしいもの、

△若女形追加之部

次上上吉

大平 幸氣 散

頭取「三題講談の御藏から、夜あかしの病人へ、ほごこしに出た大かうさんでふり升、取次ごころの連名から、能書のおはたらき、毎度のことながら、お手に入つたもの、はこやカ「文句はよいかわるいかしらぬ

が、うらがしの大こくやで、たのまれてくばつた所、岡もどやのおばアさんに、談事られたおつかなサ、すでにげんくわん迄よばれる所であつた、岡本の「ごなたの洒落かしないが、じやうだんもい、かげんにおしなさい、お成かいだうのつらやの例も有から、ごんなにきをもんだかしれやアしない、大かう「其かはり、わちきが元日によこやま町で、ろ文さんをおもいれこづいてやつたはね、頭取「しかしろ文丈も、お酌にむなぐらをとられたのはこれがはじめて、引つゝいて大切に平氣さんが出升たが、文中すべてのおはたらき、大幸散にもおさ、おとらず、大でさ、興笑連「冬のや丈の花押に、蛙のつらはうがつたもの、大かう散と平氣さんは、よい一つついでふり升、イヨ花がた、

上上吉

あて 筒放

頭取「扱此所が駒木の道行、色物の開山、ひやうばんのすはへまでふり升、興笑連「ましかねた、見立目錄にもれたゆへ、かたなしかとおもつたら、有人丈のうき名もつけ、奉書の金すり、こつてりとした評がき、たい、頭取「作者は名におふみさを丈、畫筆ぐるめのお

手ぎは、又別だんでふり升、を「き」じゆご玉に蟻がすがると、金の蜂がとんで行ところ、あてづ、はう、すはへまのどんちんかん、一部の大意よくとふた、せんさくはかんしんでげす、譯し「あてこまれたきん八丈、おしやくも、さすがは女悪、あいきやうをけさぬやう、有人丈へ天まくのさんざいは、ことわり手がみの進物と見へた、山々連「イヤさうではないのさ、情談泊の一夜ごまり、大きにかたが有さんサ、狂句連「きやつも亡妻の格で、げいしやにえんの有る男だから、まさかすはへまの、あてづ、ばうでも有やすめへ、頭取「しかしいたづらのかきおろし、はやいうがちはしんざうならぬ、としま町の大出来々々、

上上吉

婚禮 ぐさき

頭取「こんごサ、エ、どのうたひだしも、早二々とせとなりひきし、菊のや丈のぬれ手ぬぐひ、湯治評ばんたか、と、ちまたにきこへしこんれいくさき、作者はれいのかながき主人、板木も一ちばい氣をはるのや、幾久敷もかたりつぎし、名代ものでふり升、松坂やで、のり付物のさくをしただけ、くごさぶしは

手に入つたものさ、有人「此てぎはで合巻の中身がい
くど、大作者でゴステ、わけしり」なんば當り物でも、き
くのやさんの身に成つたら、物あたりとおなじ事で、
はらを下したのは恐れたらう、頭取「そこが悪ずりの
お家興言、しつかりとこたへ升た、連中「イヨ本店なア
ア、、引、

△敵役之部追加

上上書

犬のよみうり

頭取「評者にもワンだかわけがわかり升ねご、追加つ
ひでに一寸御ひろう、樂や通「コレ頭取、その譯をしら
ずばはなしてきかせやう、夫はてんま町の藏板、よみ
本「コレ、足下のやうに作者の隱微をぶちまけち
やア、曲亭流の一大奇書が安くなるせ、此一條はごう
かふせひめとして、仁義はつかうせぬやうにたのみ
升、頭取「さやう、此すり物については、定めしお
もしろくろい譯合がムリ升ふが、ごうもこ、では、よ
み本「もし又くはしくしらまくほりせば、後の回にと
きわくるをき、ねかし、

上上吉

胡麻まんぢう

頭取「此所亦々、追加に御披露申上は、れいのごまま

んちうでムリ升、此先生人には、あく迄柳しまと敵た
ふなど、おほせらるゝが、ごういふわけで、ついに
ないきのへね待にまんぢうのしんもつをなされたや
ら、悪玉「このせつ四五人首に成た所から、月ごろの御
不評を取かへす氣であらう、渡月亭「イヤ、一端口
外なされた事を、へんがへるやうな先生ではない、此
まんぢうはごまなどといふわけではなし、近日先生
名まへの小會をなされるゆへ、ごぶさたを理に、まん
ちうでごまかしたのでムリ升うが、わたくしが、ツイ
箱のふたのうらに、紅のついたのを心づかず、うはぞ
なへにべにがついたを先生がなめられたが、それを
ぞんじてるは、私かせんぶ丈ばかり、ごうしてせけ
んへしれましたやら、種彦「そればかりでなく、日記帳
の一大事、左樂丈がけむに成たの迄、あきれてものが
いはれない、悪玉「實にこわいよの中、身の用心さつし
やりませう、

上上書

眷屬 狐

頭取「きのへね待のお手みやげ、回得さんと幾さんの
外はくばらぬ愚な御趣向、ぬり付狐でムリ升、扱わか
らぬのは此狐、これを見ると盛衰くらべは、甘阿大人

の作といはぬばかり、ふせんさくにもほどのあるこ
と、譯しり「此譯は、柳亭の日記八月十九日の條に、よ
し幾、有人、回得宅へゆくどあるより、ふみちがへたの
か、たし又、あく迄ろ文にぬり付て、近日仙果の
わびでもするさか、神武以來、破門をするに名札と額
の受取を、師匠が出したを見た事がない、見物「此愚摺
はしやれもなく、風流もなく、唯人を取ておとす、近
頃やすいをち敵、見功者、やすいにもほどがあらア、や
まごだましひごか、學者だとかいはれる人が、わづか
四人におしこまれ、ぶる、ふるへて、詫状と板木迄
わたすとは、扱々あさましき次第也だ、合巻好「さだめ
しそのわび状にも、柳亭種彦とあるであらうが、三題
ばなしのますいのでたくさんなところへ、かさねが
さね先哲の美名をけがす、近頃にくいおやちやア
ねへか、頭取「夫ゆへアノ連中で、たねひこの外、悪摺
無用といふものができました、やれ廣小路のふるへ
ぎつね、

上上

一對くらべ

頭取「さして評する所はムリ升ぬが、本元と出見せを
おしらべの御丹情、いつもながら御心はいなことで

ムリ升、好事「さうさ、おいらはこのうちで、皇國
有史の神罰をかうむつた一條のうつしが見たいが、
是も板にほるだらうか、頭取「そこはいか、かわかり
ませぬが、まづこの評はこれぎりにしたし升ふ、

上上

清濁くらべ

頭取「虎の威をかる老狐の、しらばけ皮をかぶつてか
かれたれど、手ぶりはれいの愚癡趣向、尾をつかまつ
た黑白論の、正法にふしぎなく、すんだつもりのご
りをも、水にながしてさらり、岡且「おや子はらひ
ませう、あくおとし、

上上書

田舎おやぢ

頭取「にせむらさきのゆかりから、あなかおやぢと外
だいをつけ、ごまのゑんでのお家ものを、せりふまは
しにならべた仕打、手づよい悪の二十餘條、しつかり
とこたへ升た、合巻連「アノ中に、なせひなのおもかげ
と、足利絹の一條がぬけたらう、頭取「それは追てひや
うげんをくはへ升て、次へんにごひろういたしませ
う、

上上書

追加立役之部

太上上吉

清濁黑白論

頭取「せいだくくらべのをぢがたきを、見あらはしたるさばきやく、あふむがへしの仇うちを、新手に書た黑白論、ひいきの引だをしを、ひはんされた理づめのせりふ、見功者」せいだくくらべのいなりまちとくらべては、げたにやきみそ、朱ぼんに月、八まん太郎に番太郎、やくしやがぐつとおほきい、江戸ッ子「ごうせ、水道の水をのんでそだつたあづまッ子と、宮しげだいのふた股おやぢとは、きもったまがちがはアな、いさみ」ごうりで先板は、二三枚しかくばりやアがらなかつた、頭取「清きはかへつてにこり、濁りはかへつてきよくなつたも、此立役のおうでまへ、切落し」イヨ、おらが天道さまア引、

至上上吉

小狐あふむがへし

頭取「此所がけんぞく狐のあふむがへし、都て是迄のかへし、大津イゑぶしより大津ゑぶし、嗚呼執心より嗚呼笑止と、返しがいつでもお手がらながら、取分狐のあふむがへしはよいぞ、連、イヤ、よいかしらぬが、此おかへしでは、せいするくらべもたね彦といはぬ計のお作なれど、せいするくらべは、たねひこの作でないといふ事は、おわびのできたのが何より

しようこ、譯しり」たね彦丈の作でなくとも、まんざらしらぬとも申されまい、もと仙果といふ仁は、たねひこ丈がすのきよして、柳島へつれこんだわけ、交來丈よりはなしをきいたら、自己が弟子のしたごと、しんじつじぶんもしらぬのなら、さつそく仙果をぎんみして、板をけつて、此事は是ぎりにして穴かしこと、交來はじめ番付に、だされた人にも一應わび、口ごめでもするはづを、柳島の主人につげたゆへ、なんにもしらぬ人迄に、思家のはぢをしらせる道理、夫はごたはけたお人では、もの、しなんもできぬはづ、さうして見るごこの事は、しらぬとばかりはまうされまい、頭取「もとより短氣のお人にて、つきつめてくるご、跡先のかんがへもなくなるお氣性、あはて、やなぎしまへ飛だしたのは、今更御當人もこうくわい、何はしかれ、あふむがへし、きつねのお手ぎは、神べんふしぎはござり升、ヤレ、野狐さん、

大至上吉

誹 客 行

頭取「此所が猿蓑ならで、なんでももの、ほし氣なる、慾惡老狐の誹客行、御附合はあたらしい御趣向、淺草連「これまでのかはら板と事かはり、奉書すりとはお仕

合々々、頭取「殊に口晝も無銘ながら、四條風とたしかにかんてい致し升た、發句は豊芥子、玄老人、ろ文子なごのたんせいで、小會を催された摺もの、自句「種ひたす門田にぞく柳かな」これを脇おこしに被成たお手際、よいぞく、柳島連「第三に、」愚癡らしくざうにくはぬを日記して」ごは、なんの事やらすこしも解やせん、連「是は近頃の御こんいはごぞんじないはづ、たね彦いまだ仙果たりし頃、本國を出奔して江戸へ出しとき、狂歌の友淺香園より、毎年元日切餅を貰う例なりしが、あるごしの元日、淺香園の使仙果の宅へ、例年のごとく持行しに、折あしく留守なれば、夜に入つて持行しが、仙果是をも日記帳の正月元日のくだりに、人心ほごたのみがたきはなしと、此時ざうにくひはぐりしを書しるせしより、淺香園と絶口したことが有やしたが、錢のかゝらぬと有より、ざうにくはぬをと、貧家のあはれをつけたのでグステ、頭取「四句目のわたり、五句目の句作り、申分はムリ升ぬ、しかし「月に呼れてくやむ總菜」とは、御附心がげしかね升、月によばれての月は、俳諧の定座、總菜をくやむといふは、たね彦近頃つくだ煮で夕飯を

くはせるの、やれ總菜でくはせるのと、自己の宅へ來てもくやみ、如阜丈へいつてもくやんだといふはなし、そうざいこの親父は氣にくはね、頭取「夫よりウラの五句目に、日雇にもでたき心地の年の關と彼老人大せわ場の時、玄魚丈へ述懐の手紙をおくられた文中に、日に二百文になれば、日雇にでもよいとあるゆへ、前句の鹽引鮭とあるに、此述懐を年の關として、附なした手がるい句作り、「前借に哀れ娘の身受して」迄、いづれにおろかはムリ升せん、好以「名ごりうらに「無用の札はもつともな川岸」と、拙其むかし、たねひこはやくびやうよりきらいゆゑ、たね彦無用といふ札を出したの迄、御せんさくがとゞき、此連句へ御加入とほありがたい、頭取「白魚しらす邪魔と魂といふ揚句迄、すべて一折の句作り、摺といひ御うがちといひ、かんぶくのいたりでムリ升、しかしたね彦が見たらば、高魔がはらの立つ事であらう、イヨ神主さまア引、

△追加之部總卷軸

大至極上上吉

邪 魔 妬 魂

頭取「東西々々、此所がこれまで有ふれた、かはら板あ

く摺の世話場をすて、籠家臺奉書摺、金ぶすまの箔入、伊達上下の上ぼり上ずり、時代もの、じやまごだましひでムリ升、通り者待かねた、近頃でない上物ゆへ、黒装束の闇試合、だんまりで門並配る定例の悪摺とちがひ、ゆかりがなふてはもらはれぬ新奇妙案、此間さるところで一才見物したが、やまごだましひのうらをゆく、百鬼夜行の繪まき物と、たしかにしぐみのたねほんど見うけました、物しり、此作者は例の立作りかと思へば、文中に正史の意味をふくまれたお手ぎは、皇國學びの筆さき、誰だかさつぱりわからぬが、百鬼夜行の繪やうは、古事記に曰、爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此常夜往、於是萬神之聲者、狹蠅那須皆滿、萬妖悉發云々、このわけは、神の代は天照太神天の岩戸にこもらせ給ふ御時、天地くらくして、つねに夜るゆくがごとくなれば、もろくの禍の神、ひまをうかいひて、はびこりおこるといふことわざる、狹蠅那須神といふ事のおこりをひいては、けものづくしの見たてもの、鈴のおばけに神主がおびへてゐる、神前の畫わり、いちくの大當込、たれやらに見せて、はやくまよひをしりぞけてやりたいもの

じや、せんぶなれどもわたくしは、いまだはいけんいたし升ぬが、ごうかお手つゞきで、一枚てうたいはでき升ぬか、ごうぞ恩人の迷ひをはらしてあげたうござい升て、無名、かんげんは小男鹿の耳にさかひ、良薬は口にもろくのふじやうだから、なかくもちるはさつしやるまいが、只こつた所を一目見せてあげたいせ、不通、お化のうちには、薦のばけもの、茶がまのばけもの、ほろの化ものなどは、ごういふわけだかわからぬへ、頭取はつきりわからぬところが、おばけのもちまへ、るときは世けんのとほり、悪魔惡玉連におき、なされ、兎にも角にも高評の追加巻軸、まきをさめたる一軸も、納る御代の遊戯三昧、善玉連の手うち格で、皆さんごうか大七五三に、みなく「ワットしやうちだ、いはふて一つ打ておけ、しやんくく、シヤンくくくくくく、頭取、扱おめでたい、かうもあらうか、

惡玉の鬼は外へと打出しや

まづ今板はこれでごろうく

かべのむだ書
りんじうくごき

綺談無盡藏
さかさ獅子

此分來春追て評板致し升ふ、

評者 惡文舍他笑
校訂 若哉亭夢窓

慶應元乙丑年十月刻成

惡文字舍惡左衛門

樂屋鳴久者評判記終
興言

犬夷評判記序

洪鐘懸るといへども、敲かざれば鳴らず、絀絲長しといへども、解ざれば延びず、微言崇論亦若是なり、唯彼諧語劇談は、乃巴人の曲太鼓、拍されどもおのづから鳴るべく、恰口中の錫に似たり、味ざれども解易かるべし、しかはあれども、郷談に方言多く、市語は故訛詛たり、その言耳に在りといふとも、その字は眼に熟すといふとも、音義濶滋、侏儻虛謬、にじり着たるものは通せず、寓言方便巧にして、且意味深きは曉り難し、是故に唐山には、彼金毛二氏の若き、よく小説を見ることありて、外書評論又奇なり、よしや狐父の戈をもて、牛矢を鑷に似るといふとも、なし易からぬわざなるべし、伊勢人三枝園、その才亦こゝにあり、されば和漢の小説を讀むことを好るまゝに、屬者拙著犬夷の二書を、戯れに批評して、もて平安の櫟亭に示せり、櫟亭これを余に傳へて、果否を問ふこと亦切なり、その評判數十條、視れば甚趣あり、われ得がたきの知音を得て、歡しさに敢辭せず、聊的否を答述

して、亦復笑ひを二子に取れり、さるを書肆山青堂、櫟亭と相謀て、やがて梨棗に登しつゝ、又余が言を求らる、推辭せんとするに刻成れり、嗚呼故障は掩ふといへども、竟に隠すに由もなし、放屁して後に氣を籠、口に紫蘭の芳を説とも、亦何の益かあらん、駟も亦舌に及ばねば、語も亦録する因果あり、さは今更に何をか祕ん、此舉や癡人面前に、夢を語ると相類す、澆季の婦幼、才あり智あり、看官眼力横行して、穴を知ることを蟹の如し、これを時好に投せんこと、いと嗚呼がましき所爲なるかも、
時文化十五年、歳値の著雍攝提格の夏肆月上浣、杜鵑はじめて鳴くゆふべ、燈を燒、硯に呵して、飯臺著作堂の南牕に序す、
馬琴癡叟

凡例

犬夷は里見八犬傳、朝夷巡鳥記の二書をいふ、評判記と名くるよしは、これを評決判斷して、その巧拙を辨するなり、
翁の著編多しといへども、いづれおろかなるはなし、しかるを今更に、件の二書をとり出て、ものごとくしく評するよしは、その書第二の編より下は、久しけれどもも嗣出さず、これを作者に促せば、嬰疾いまだ瘥らず、よく養ふてこそといへり、せんすべもなき事なれども、待わびしきをいかはせん、いでや此書をあらはさば、作者を獎す爲にもならん、われにひとしき見物をなぐさむる爲にもと、入らざるせわも數奇の道、商ひの道達者なる板元さへに同腹中、外に思案はあらたまる、年始狀からいひあはせて、又來る春の新板とす、
われら翁にちなみあり、ことさらのひいきなれども、判者のこゝろに私なく、譬へば秋後の蛇のごとく、穴をさがすを專文とす、しかれども豆眼牛馬をあやまりて、うつ太刀しごろなるもあり、翁の答述に詳なり、
櫟亭琴魚識

總評

- 三枝園主人評決
- 櫟亭琴魚考訂
- △里見八犬傳肇輯五卷第一回より至第十回
 - 上上 季基訓を遺して節に死
 - 上上 白龍雲を挾て南に歸く
 - 上上 一箭を飛して俠者白馬を悞
 - 上上 兩郡を奪て賊臣朱門に倚
 - 上上 景連信時暗に義實を阻
 - 上上 氏元貞行厄に館山に従ふ
 - 上上 小湊に義實義を集む
 - 上上 色内に孝子讐を逐ふ
 - 上上 良將策を退て衆兵仁を知
 - 上上 靈鶴書を傳て逆賊頭を贈
 - 上上 倉廩を開きて義實二郡を賑
 - 上上 君命を奉て孝吉三賊を誅
 - 上上 景連奸計信時を賣る
 - 上上 孝吉節義義實に辭す
 - 上上 行者石窟に翁伏姫を相す
 - 上上 瀧田近村に狸雛狗を養ふ

上上 盟誓を破て景連兩城を圍
 上上 戲言を信じて八房首級を獻
 上上 大輔孝徳伏姫を救んとする段
 大上上吉 伏姫父母に辭して富山に入る段
 右第十回の兩題目素より本文と合はず、その辨本書
 第二編に見えたり、よりに題目を省きつ、

△同第二輯五卷 第十一回より
 至第二十回

上上 仙翁夢に富山に榮す
 上上 眞行暗に靈書を獻る
 上上 富山の洞に畜生菩提心を發
 上上 流水に涙して神童未來果を説
 上上 尺素を遺して因果自訟ふ
 大上上吉 雲霧を拂て妖孽肇て休
 至上上吉 轎を飛して使女溪澗を涉す
 上上 錫を鳴して、大記總を索
 上上 金蓮寺に番作讐を擊
 上上 拈華庵に手束客を留む
 上上 白刃の下に鸞鳳良縁を結ぶ
 上上 天女廟に夫妻一子を祈る
 上上 妬忌を逞して墓六螟蛉を求

上上 孝心を固して信乃瀑布に禱す
 上上 簸川原に紀二郎命を殞す
 上上 莊官舎に與四郎疵を被る
 上上 龜篠姦計糠助を賺す
 上上 番作遠謀孤兒を託す
 上上 一雙の玉兒義を結ぶ
 上上 三尺の童子志を述
 右褒貶の批點、敢題目に拘るにあらず、譬ば端場あり、仕込あり、褒美の重きは當場なり、輕きは仕込、端場としるべし、

△朝夷巡島記初編五卷 第一條より
 至第十條

上上 栗津原六出
 大上上吉 鎌倉山鼠麴
 上上 月夜竊立鳥
 上上 鷄鳴野鳥船
 上上 遠山寺兒櫻
 上上 山脚村教草
 上上 濱驛館蒲黃
 水曾よし仲う
 ち死のだん
 こもゑ自が
 いのだん
 野島の浦お
 つてのだん
 してりてあざ丸を將
 てかづさへ赴く段
 阿三郎手な
 らひのだん
 秀作きやう
 くんの段
 大ひやう定井にた
 へまさらばるゝ段

上上 修善寺走湯
 上上 絲奈幡太薄
 上上 促死秋蟄居
 上上 截落刀野幣
 上上 返汝湯島檜
 上上 林原牛奔車
 上上 榎虚崑崙佛
 上上 歸郷野邊送
 上上 復讐記念刀
 上上 朝靄庄司暇
 上上 夕立許我郷
 上上 在旅宿元服
 上上 大石山遺弓
 射向鳥證據
 樹間隠返命
 卜繕葦夜臘

のり頼つみか
 うぶるだん
 はたの方さ
 い期のだん
 のり頼主從せ
 つぶくの段
 たち野けん杖
 さいこのだん
 よし時かんけい
 が島をこるす段
 阿三郎はじめて力
 あるこをなせる段
 ぶん六尼さん
 ぶつをうつ段
 阿三郎養父のひ
 つぎにあふだん
 しをり手阿三郎に
 すぜうをつぐる段
 阿三郎かたきづ
 ないらなうつ段
 阿三郎秀作
 にあふだん
 阿三郎改
 名のだん
 よし秀きじをいて始
 てよしくに逢ふ段
 こき夏よし秀さき
 じをあらそふ段
 ぼさ平よし秀
 をいるだん
 こき夏いつはりてぼ
 さ平を違さくる段

△同第二編五卷 第十一條より
 至第二十條

上上 黑白谷地毒
 上上 過去來會話
 上上 岩堰水煩禁
 上上 執柳ササ芥
 上上 岩神地藏會
 上上 戮惡劔山麓
 上上 慶善百田宿
 上上 迎旭汀友鶴
 上上 吟風溪澗體
 上上 磨出礪並月
 上上 占夢黒川堂
 上上 苗頃時濁水
 上上 客去雁春霜
 上上 野干玉罩燈
 上上 蘇彌染袖巾
 上上 綱總袴游偵
 上上 假裝束情郎

よし秀大蛇を
 こらすだん
 よし秀よしくにぼ
 さ平みつ話の段
 むろ平よしくに
 をさむむるだん
 ぼさ平よし秀
 をあくるだん
 よし秀いな向にや
 ざりを包ふだん
 よし秀わるものをみ
 なごろしにする段
 よし秀一總にた
 いめんのだん
 よしひで友づ
 るをめさる段
 よし秀ちかよしのゆ
 うこんにあふだん
 さなみくりから
 軍物がたりの段
 よし秀みち
 一總にあふ段
 ひ太郎なは四
 郎横死のだん
 よしくにちくてんよし
 秀廣光をすくふ段
 かつ澤のまつげらにて
 ぼさ平つけせん人の段
 こもゑの尼ぼさ
 平をすくふ段
 あやるの尼公ぼさ
 平をいたはる段
 かつひめの病床に
 ぼさ平ひきめの段

右褒貶の批點は、前にことわるが如し、褒美かろしといへども、或は一言半句によく人情を穿ち、或は文章奇絶なるものは、評論に漏すことなし、板元云「聊の餘紙あれば、こゝにて御披露仕る、八犬傳并に巡島記の第三編、當冬は相違なく出版、隨筆玄同放言も、今茲はおめにかける、でふりませう、

犬夷評判記上之巻

曲亭馬琴答述

三枝園批評
襟亭琴魚考訂

發端

ひいき「あら玉のごしたちかへるあしたより、待るものは驚ならで、鶏が鳴く東なる曲亭のよみ本、しかるに里見八犬傳、朝夷巡島記は、二編までにて物を思はせ、去年は出版の沙汰もなし、風聞を承るに、作者近年は病身になられしゆゑも、又隱逸の志ふかく、戯作が鼻に着たごやら、それで出来ぬとも申ス也、それはともあれ、掌の痛くなるまで幕を叩へて、諸見物にもを思はするよ、アもさりごては聞えぬ人、當所三四庵のあるじは、彼作者と舊識なるよし、あまりの事に堪へかねて、江戸の便りを聞まほしさに、わざ／＼出かけて參つたが、貴公は外に御用あつてか、よみ本好き「イヤ拙者とても御同前、よみ本を見かゝつては、飯時をも忘るゝ某、なれども不學のかなしさは、おもしろいと思ふばかり、深い意味はしらふよしもなし、こゝの大人三四庵は、和歌和文が持まへなれども、俗語小説をも捨られず、和漢と雅俗と、本行と

總評終

下方と、兼帶兼備の才子なれば、そのとしくの物の本も、等閑には見給はず、その巧拙を問ん事、かゝる人にごおもふ折から、幸ひなるかな、彼作者に由縁ある華洛の金魚子も、參宮がてら四五日前より當所に逗留、けふは殊さらしめやかなる春雨、賓主徒然の折りにつけ込み、大人にお匂奪申て、里見朝夷の兩評を聽聞し、彼三編を待わびたる心やりにせばやとて、例の誰渠を相伴ひ、只今口説をる最中でゐるてや、ひいき「それは圖らずよい折から、僥倖をいたしました、しかしお誘引下されぬは、些お恨のすぢなれども、參りあはせれば損もなし、大人何ぶん願ひます、三四「これは近頃迷惑千萬、世のゆるしたる妙作に、われら啄を容れんこと、傍痛き所爲なるべし、さればごて巻毎に、彼も奇なり、これも亦妙なりと譽たらんは、なか／＼に興なきわざ歟、且彼人に諂ふに似たり、かゝるべしと思ひがけねど、件の二編出版の頃、思ふよしのあるをもて、竊試みに評したる一卷の草稿を、京へ上せて金魚に見せしに、やがて東へくだしつゝ、作者の答を聞しと也、その釋評は金魚がもてり、われらが評はこゝにもあり、侍りちらせし生文章

を、讀とも聞耳緩かるべし、寔に難儀のすぢなれども、さすがにその事ありながら、情なく返さば愛相なからん、しからばわれら口づから、彼二冊子を評すべし、金魚は作者の胸中を、先刻承知の事なれば、評の的と當らぬを、件々に解給へ、金魚「おもしろしおもしろし、こゝは處も伊勢平治、景高景季かけ合に、千鳥も雜て百轉り、某佐々木になり代り、一ト問答仕らん、よみ本好き「なる程作者といふものは、ちよつといはるゝ事までも、仇箭はとんとムりませぬ、魚「痛み入たる御挨拶、ひいき「サア／＼みな様御遠慮なしに、近うおよりなされませ、ひいき連の女中「きん魚様、きん魚様、かならず負けて下さりますな、おまへのお作の窓螢餘談も、賣出しの日に求めまして、大事にかけて持てをります、三四「見ればいづれも曲亭最負、コリヤ迷惑なる役まはり、ちどわる口も申シにくい、みな／＼「そこにはトント御遠慮なう、はやく評が聞たい／＼、三四「ごちから先にいたさふ、朝夷か八犬傳歟、女中方「モシ八犬傳から評なされませ、お願ひでムります、よませてください人「イヤ／＼、しつかりとして目ざましい朝夷が先じや／＼、頭取「東西々々、さやう

に互にせりあふては、トント果しがつきませぬ、勿論人の好々にて、優劣はふが、板元の賣高に甲乙はないとの風聞、これによつて見るときは、朝夷もよし、八犬傳もよし、よいことは皆よけれども、一度に評はしがたからんに、先陣問答の秀句から思ひつゝとも、前後をあらそひ給ふはよしなし、こゝはわれらに任せ給へ、所詮賣出しの遅速によらば、いひぶんはない道理、八犬傳の初篇五冊は、戌の十一月賣出し、二編は子の年十二月に出たり、巡鳥記の初編五冊は、亥の正月に賣出し、二編は丑の早春出たり、その日數は僅なれども、聊年に前後あり、評もかくのごとくなるべし、みな御承知でふりますか、理くつひ「賣出しの遅速によつて、評の前後を定めるは聞えたが、ナゼ目録には譲ておかぬ、優劣のない時は、或は目録を先きに出して、評を後へまはし、或は評を先にすれば、目録を後へ出す、評判記の格を外して、頭取とはいはれまい、頭取」その疑ひは御もつとも、それ式の事しらぬにあらず、朝夷里見と品はかはれど、おなじ作者の筆なれば、その斟酌には及ばぬ事、目録とても賣出しの、遅速によるがこれ順なり、みな様さやうじやふり

ませぬか、みなく「頭取さばきはえらいもの、祝ふて一ツしめませう、シャンくく、シャンくンシャン、きままり、シャン、サア是からが八犬傳、頭取」評判のはじまりはじまり、

△里見八犬傳初篇

評に曰「發端結城落城の段には、さして評すべき程のことなし、但シ義實主従三騎落ゆく所に、打どあふれど玉匣、ふたり等しき忠臣の、拳は金石些も緩めず、撃るゝまゝに牽てゆく、馬壇鞍懸柳坂、煙は後に遠離る、火退林のほとりにて、なごいふもん句は、例ながら旨い事、嚼で含むごとなるも、若作者の横着にて、つくりし地名にあらざるか、さて又三浦の磯に船まちして、義實龍を辨する段、婦幼の耳には、遠くてあまりに長しとやいとふべからん、しかれども是も物識の端なれば、ひとつづくに引書を舉ておかまほしく思ふ也、本書を見しりたらん人は、この物がたりを待でもしれり、おのれらごとき、この物がたりを見るに及びて、はじめて龍の品類の多きことをしるものは、本書の名をも漏さずして、しらせたき事にあらずや、よませて聞人「只さへ龍の事が長いに、その本書迄

悉くしるされてたまるものか、物識にならふと思はば、經史を素讀して、講釋を聞がよし、慰に見る本んに、陳奮漢が長すぎては、歌舞妓で猿樂するやうで、見物はうてるく、

答「御批言いづれも一理あり、彼辨長しといふ人は、眞のよみ本好にはあらず、僅に全部四五冊の物語ならんには、これらの辨はなきをよしとす、長編大部の草紙には、かやうの辨論その例多かり、譬ば清の天花才子が快心篇の二集第九回なる美色の辨、又逸田叟が女仙外史、第十四回なる唐賽兒が九州遊歴の事などは、要なき物がたりに似たれども、其筆力を見るに足る、是全編の彩色なり、君絲竹のしらべを聞ずや、緩める場あり、急る場なくは、その曲節と、のひがたし、物がたりも亦如此なるべし、もし理をもつて推さきは、義實主従僅に三騎、落人となりて進退究り、磯馴松に雨を避て、脾撓い腹を抱る折、優長らしくだらく、と、龍の講釋どころではあるまじ、是則理屈にて、風流遊戯の意味をしらぬ人は、必いふことなるべし、作者のこゝろはそこにあらず、三浦の磯の白龍は、義實後に景

連にはかられて、釣して鯉を求るの楔たり、楔とは此をもて彼を引出す趣向をいふ也、安南龍門の鯉瀧に浜て龍になるといふことはあれども、蟠龍時を得て昇天し、鯉になることはなし、是小大の辨にして、義實此に龍を觀たれば、彼に到て鯉を獲ず、獲ざるに因て安房を得たり、か、れば此物語に取て、鯉は尤緊要の物なり、因て且ながく、と龍の徳を辨じつ、これらの意味をしらせし也、又その條下に本書を引すといへども、王麓丹が龍經に本づくよしを自序にいへり、そのことは麓丹一人に出るにあらねど、龍經尤多きに居れり、されども序文は得讀すとて、端像から見る人の爲には、龍の引書を悉くしつげんも亦益なし、

評「金碗八郎、里見義實に邂逅して本名を告る段に、金碗は神餘の一族なるよしいへれど、その事定かならず、金碗は當場の第一たり、おなじくばその家系なごをも、くはしくはせたまものなり、

答「神餘、金碗の二氏異なることなし、むかし安西、麻呂と鼎足のごとく安房國を領せし神餘氏は、かなまりと唱へたり、是神のむを横音に通はし、餘を

まりと讀るは略辭なり、是を音にじんよと呼べるは、後世の唱なり、しかれば金碗は、神餘の假字也、和名抄安房國安房郡、郷名の下には、神餘を加無乃安萬里と訓せたり、麻呂も同書には滿祿と書て、こは朝夷郡にあり、神餘金碗同訓なれば、その家譜を引ずとも、一族なる事あきらかなるべし、

評「悞て神餘長狹介を射ておとせし洲崎の無垢三は、洲崎の居民なるべし、しかるに伏姫行者の窟に詣る段に、洲崎は里見の領分ならずといへり、里見の所領は、則神餘が舊領なれば、神餘が撃れしころも、洲崎は麻呂か安西の領分なるべし、無垢三は洲崎に生れて、神餘が領内へ移住たる男と見れば、何の子細もなき事なれども、この男必しも洲崎と名告でもあるべし、すべて無垢三がいふ所を聞くに、他領の人にしては不都合なり、

登「無垢三、朴平は、金碗八郎孝吉が舊僕なり、その事は孝吉が切腹の段に見えたり、かゝれば彼等は神餘には再僕なり、その居る所自領他領の差別あるべからず、しかれども故主のため、或は又人の爲に身を忘れつゝ、思はずにことなき過失せしものは

なれば、せめて一人は、長狹介が領分にはあらずといふ洲崎の名をば負はせしなり、かくてその欲する所、故主の爲に怨ある定包を撃にあり、仁俠のこみすべからず、さるをばはじめに云々ど、これらのことをとらざりしは、金碗が切腹を、且看官に訝らせ、さてこのことある故に、死なでかなはぬ孝吉が、臨終の物がたりもて、はじめて會得させん爲なり、忘れ給はゞ、本文を今一遍よく見られよ、

評「義實安西が館に來つる段と、爲朝利勇が城に入る段と相似たり、かくてその趣をかえんこと、いとかたかるべきわざなるを、爲朝は一人となり、義實は主従三人、しかも利勇が難題は、三つながら實事なり、爲朝すべてこれをなし得て、南風原にかへり入る、安西が難題は、只一ツにして虚事なり、義實これをなし得ざれば、景連が館にかへらず、爲朝ははからずも妖婦海棠を伴ひつゝ、利勇はこれによりて亡び、義實は思はずも義士金腕を得つるにより、定包遂に滅亡す、鯉に瀧田の對もよし、榮辱得失似たる様にて、よくそのさまをかきかえたり、寔に奇妙の筆なるかな、よみ本好き「誰が見る處も違はぬもの、われらもかねて御

同意々々々、評「萎毛酷六郎元頼といふ姓名は、誰か作り名とらざるべき、おなじ作り名と聞えたる朝夷の歸堀圖内は、三郷の眼代なれども、いはゞ一箇の小吏なればさもあらん、又この酷六は、一郡の城代なれども、定包が股肱腹心と聞えたり、しからば作り名めかせずとも、重くれたる名にあらせし、安西が家臣なる蕪戸訥平も是におなじ、唐山の小説に、何龍何虎など唱る作り名はありといふども、この酷六訥平等は、山下安西が腹心のものなるに、かばかりの姓名にては、うち聞くよりはや、二枚目の安敵と見えて人品かろし、かゝてはこれらを相手にとる里見方の人の、智も勇も大人氣なく、すべてはふさはしからぬやうなり、悪人の姓名には、さし合を繰る作者の用心、かねて聞つる事はあれども、さりとしてしかたはなほあるべし、又山下定包がたには、萎毛、岩熊、鏑塚、妻立など、彼此の家臣なれども、安西方には、汁にも菜にも蕪戸訥平只一人、麻呂がたには、某甲と名を出せるもの一人もなし、畢竟里見主従は主、安西麻呂は客なれば、それが家臣を誰彼と物夥出さんは、要なきに似たれども、その無用なる相手の多きが、里

見がたの智勇をあらはす媒となるべき也、三國志演義、水滸傳などにも、この趣はあるなるべし、相手が無下に弱くては、里見の智勇がかいなきなり、ひいき「まて」評「がちがつたぞ、こゝは一番いはねばならぬ、姓名がおもくれても、人形が動かねば、對面場の範頼同様、相手の爲には何にもならず、全體何も彼も作つたものと見る故に、無理な評をもせらるゝ也、萎毛は虐の字宛の字に當て、しへたげたる事とし、酷六の酷を、酷吏の酷とし、蕪戸を兜とし、訥平を兜盔と見る故に、姓名がかろいといはるゝならん、只字のまゝに見るときは、世に絶てなき名にはあらず、酷六の酷の字を、はなはだしと讀ときは、甚六と異ならず、訥子といふ俳名あれば、訥平といふ人も、作り名にのみ限るべからず、彼等が行狀民を虐げ、酷吏に等しきものなるは、所謂名詮自性にて、實録にも往々さる事あり、しからば作者の作りし名でも、こゝらに難はとんとなし、歸堀圖内もこれとおなじ、大坂には歸堀といふ地名あれば、歸堀といふ苗字なしとせず、彼が甚貪りしは、亦是名詮自性也、もし百姓商人などの名が大將のやうに聞え、綽號を呼るゝに、小賊か幫間の狂

名めかば、ふさはしからずと難しもすべし、その心から見るときは、麻呂は男根の事を思ひ、金碗を金精の隠語とも聞かば聞べし、そこに疑難の發らぬは、素より麻呂と金碗は、作り名ならぬをしなければなり、又彼麻呂も安西も、義實の相手には足らず、さるによつて義實は、一たび義兵を起してより、僅に八十餘日にして二郡を討も治めたり、麻呂安西すら相手に足らねば、況やその下狗黨の小人、二枚敵はしれてあり、先生さやうじやムりませぬか、頭取東西々々、御ひいきはさることながら、御助言は無用、翁の答申さるゝを、御神妙にお聞下されませう、

笠、只今最負連中の申さるゝごとく、麻呂安西が家臣といふもの、いと寡きは故あることにて、原この三將の合戦は、八犬士傳の發端までなれば、はやくかたをつけるをよしとす、もし里見と麻呂、安西が合戦のみを、作り設し物語であるならば、評者の疑難さもあるべし、麻呂が家臣に名を出せるもの一人ンもなければ、獨身のものと思はれぬは、只書ざまにあることにて、既に麻呂が滅亡は、杉倉氏元が使者蛭崎十郎輝武が口上にて事濟せし、これ

を縮地の文法とす、三國志演義に、公孫瓚が滅亡をこく所とおなじ格なり、すべて無用の人を出して、その落着定かならねば、看客これを拙作とす、しかれども無用の人を省んことは、なかゝになしがたし、よしや人数多くとも、中途より立滅して、存たとも亡たとも落着のしれざるを、妙作といふべからず、麻呂安西が滅亡を、只九回にて書終しは、作者の爲には難儀の場なるに、人数が寡いとて難せられしはうらうへにて、ちと理屈にあらざる歟、今も評者のとり出されし水滸傳を見給へかし、彼高俣は宋朝の大臣にて、富貴驕奢の聞えあれども、渠が爲に奔走するもの、汗にも菜にも陸虞侯、富安のみ、そこに名を出すもの一兩人にすぎざれども、眷屬家臣多かりと、おのづからにいらるるは、只書ざまにある事にて、他作の及ばぬ水滸の妙、こゝらを本にしつる也、理屈によつて小説の趣を質問せば、横死せし人あるには、ナゼ店請が見えぬといはん、かくて理外の幻境に遊んことは難かるべし、

評「定包が撃るゝとき、尺八の竹鎗は、よくも心を用

ひしものかな、かくて義實は山下を討滅して、その二郡を獲たり、さて安西と割据して、一國しばらく無事なれば、上總より妻を娶り、竟に安西をも滅して、一國を治めたり、折から鎌倉には持氏の末子成氏、やゝ世の中廣くなりて、義實が任官を京へとりなし申せしかば、義實その歡びに、京鎌倉へ使を進らせたりとあり、しからは鎌倉への往返も、やゝ自在になりぬと見ゆるに、安房國へ渡りし後、父季基の事とては、一言もいひ出さず、父の陣歿をしるといへども、眼前にその落命を見たるにあらず、何にもせよ曩に瀧田を獲たるとき、第一番に父の菩提を弔ひ、又人をして陣歿の迹を尋ねさせ、墓所をも造り立べき事なり、さるをこの事絶てなきは、大きな不孝といふべし、こゝら作者の手ぬかりならずや、

答「これ例の理屈なり、義實安西を滅して安房をうち従へる迄を、一期とする物語の結局ならば、その事かならずなくては稱はず、すべて義實の安房を領する條々は、八犬士傳の發端なれば、苟にも要なき事は省けり、されば初篇を綴りし頃は、伏姫自殺までを、第五巻のをはりにせんと、思ひしまゝに

思はずに、筆の運びもせわしく、しれたる事は看官に、預けてしるしつけざりき、さらば義實の任官も、又鎌倉へ使者を遣ことなごも、要なき事といはれんか、さはあらず、義實の任官は、大輔が名にあはせん爲、又成氏の事をいひしは、第二編なる犬塚氏親子が爲に設し事なり、義實已ことを得ず結城を落て、安房にて家を興せしが、是則亡父季基の遺志にして、このうへの孝やある、經を誦せ、討死の舊跡を弔ひ、佛事法蓮を旨として、女々しく毎日諄諄と、亡父のことをいひ出すとも、そはその孝の小なるもの也、故にその大孝を見して小事を誌さず、縦ひこれを誌さずとも、人となりを推すときは、義實いかでか親を忘るゝ人ならんや、さるを今追福法蓮の一條を、漏らせしをもて、義實を大不孝とせらるゝこと、わが聞しらぬ所なり、凡不孝といふものは、萬事親の志に悖り、國を亡し家を喪ひ、父祖の名をくだし、子孫そこにて斷絶するを、大不孝の人とすべし、すべて小説は人情を穿の外に、あまり細しきはうるさきものなり、義實佛事の有無より、大不孝といはるゝ事、この評にのみ限る

べし、しかはあれども、評者の疑難も勸懲に係れば、そのよしなしとすべからず、いと短くも云々と、書ざりしは手ぬかりなるべし、

評「忘れたる事こそあれ、是より先瀧田の城攻に、鳩に付たる金碗が檄文、巧拙はおのがしることにあらねど、僅に安房の二郡を争ふ、蠻觸の戦ひには、不相當なる文段にはあらぬか、漢朝にて仁義の軍と唱へ、國號を建、天子と稱するとき、その臣たる大將が、檄する文書めきたるやうに覺ゆるは僻目にや、

答「おなじ理屈に似たれども、これは寔にいはれたる、うち見る所は評のごとし、さりながらそこが作者の遊戯にて、一二郡の小迫合を、さも物々しき檄文に書なしたるが趣向なり、もし理をもつて推ときは、金碗毫を揮ふとも、云々の漢文にては、當時城中に籠りたる土民には讀がたからん、讀すば鳩の脚に着る謀も無益ならん、しからは誰にも讀易き、平假名にて書こそよけれ、これ則理屈にて、虚實の境に惑ふものなり、彼漢文を誰あつて讀すといふ土民なければ、文章の物々しきは、咎めずしもやみねかし、

評「五の卷の初丁里見籠城の段に、民荒年の役につかれて催促にしたがはず、唯呆れたる云々とあり、この従はずといふことはいかにぞや、里見は素より仁義の君なり、二郡の民既にその徳になづきたり、荒年なりとも、催促にしたがはずといふことあらんや、こゝらは書やうあるべき事か、譬ば劉玄德が江陵長坂の敗軍のごとく、民さへ城に逃こもりて、仁君と存亡を共にせんとするほどに、いよく兵糧竭たりなど、いはいかやあらん、さらば義實が八房に對しての卿言も、軍兵のうへのみならず、百姓をもいたむこゝろありて、いよくよかるべし、

答「この評も亦出來たり、さりながら、聊なる言葉實質にとらんとて、前後の文を忘れたるか、五の卷第九回の初段に、安西景連不意に發つて、瀧田東條の兩城を、犇々とうち圍みしとあれば、縦義實の仁義になづきし民なりとも、城外にあるものは、共に死せんとするによしなし、又荒年の役に勞れて、催促に従はずといふよしは、敵の大軍推よせて後に、城の催促に従はずといふにはあらず、荒年のつかれによりて、定めある貢を缺たり、これ已ことを得

ざる故なり、さればとて倉廩を掌るもの、主の餓給ふを外にして、民にその沙汰せやあるべき、虐殺する事こそなけれ、或は半滅、或は三が一つの催促はあるべけれど、それすらなき袖はふられず、書ごまの拙きゆゑに、さは聞えぬかしらねども、これを催促に従はずといひしなり、その解しやうによりて、意味大きにちがへり、しかしながらよく見られたり、これらをいふもの稀なるべし、甘心々々、

評「これも亦後先ながら、三の卷第六回のをはり、玉梓が最期の宛言、金碗八郎をにらまへて、拒みて吾儕を斬るならば、汝も又遠からず刃の錆となるのみならず、その家ながく云々といへり、是は金碗が玉梓を斬らんといひしにむかへて、玉梓又汝も刃の錆云々といふなれば、そのよしあり、又義實を罵て、聞しに似ぬ愚將なり、殺さば殺せ、兒孫まで畜生道に導きて、この世からなる煩惱の犬となさんなどいふことは、縁なき辭なり、試にいはい、義實玉梓が不義を責て、げにあやまりてこの姪婦は、愛する主を害へり、犬すら主を知るものを、畜生にもおどろし姪婦なり、かゝる風犬を野に放さば、又いくばくの人をか破

らんなどいはれて、聞しには似ぬ愚將かな、殺さば殺せ畜生道云々と罵らば、言葉のもとするどゝのひて、猶よからんとおもふはいかや、

答「義實玉梓の問答を、犬づくしにするときは、求すぎてなかくに拙し、玉梓義實を罵て、畜生道へ導ん、この世からなる煩惱の犬となさんなどいふことは、不意に出たる怨言なれば、看官これを耳にどがめず、かくてその言葉の途に空しからぬにて、現さることもありけりと、思ひ合するが作意也、理屈をはなれてよく見られよ、

よみ本好「犬の子を養ひたる狸の文字を引わくれば、里の犬にて里見の犬、又伏姫の伏の字は、人に従ひ犬に従ふ、されば八房に伴れて、富山の奥に入るといふ、狸と伏の字の對絶妙なるに、こゝらの評はナゼせられぬぞ、ひいき「さうとも、寺の下男歎女中の垣間見るやうに、穴ばかり掘るが能ではあるまい、ちつとは譽てくれぬかい、評「五の卷十回犬の段に、伏姫翁丸の犬の物語をよみ居たることは、少し求め過たるにはあらぬ歟、伏姫は、その身を八房にとらせんといはれし事、しらでをらば難なかれども、既にこゝに

ては、姫の内心にしりてあり、扱は犬の物がたりなど見るも、うごましくこそ思ふべけれ、しかしこれらはその場のとり合せまでにて、その文の飾りなれば、ふかく答むべき事にはあらず、

答「その場のとり合せ、文の飾は勿論なり、しかし伏姫が枕の草紙見たらんは、あへて八房には拘らず、條々を讀ほごに、翁丸の段にいたりて、八房の犬がかけ入り、それより姫は富山の奥へ伴る、時宜になりしが、故らに怪きなり、この格は月氷奇縁鼠の段におなじ、犬の物語を見んとて、求めて枕の草紙をとり出せしにはあらず、くはしく書しは、いまだ彼書を見ざるもの、爲也、

評「おなじ段に、義實五十子に對して、かねて内心には、伏姫を大輔に妻はせんとおもひしよしを告る傍に、伏姫もをれば、聞くなるべし、さては二編に、伏姫臨終の言葉に、聊かさまたげあり、しかれどもいかにせん、こゝではこの事を、義實かならず五十子に云はでかなはぬ事のやうなり、

答「伏姫その物がたりを側聞するども、大輔が事、父の心に思ひしのみにて、正しく許せしにあらざ

れば、露ばかりも懸念すべからず、そは姫の氣象を推ても量り知るべき事なり、評の如く、こゝにて義實大輔が事を五十子にいはざれば、第二編にいたりて、神童が未來果を説どころに稱はず、この婚縁のこゝろありて、かへつて犬にともなはずれば、看官のいとをしみも倍すべく、又彼八犬士は、姫と大輔によつて出現することを、後にしかとせしむるに、此物がたりにおよべるなり、元來伏姫に色情なければ、臨終の言葉のさまたげにはならぬなり、評「すべてはこの犬の段は、親子三人別離の情、至れり盡せり、文辭の奇絶更にいふべからず、伏姫犬に對しての理論、八房遂にその理に服して、慾をおもひごまりしなど、初編の拔萃はこの一段にとゞまれり、ひいき「さやうく、この犬の段を讀て、泣然とせぬものはなし、こゝが作者の妙でござる、頭取「それゆる目録にも、初編の巻軸にすえました、よみ本好き「御兩所どもに御太儀千萬、且く中入なされまして、二編の評を願ひます、

犬夷評判記上之巻終

犬夷評判記中之巻

△里見八犬傳第二篇

評「八犬傳ノ二編第十二回目初段のおきもん句、ちと長過るやうなれども、すべて萬葉集の歌の言葉をもて綴りたる文辭のこなし、ごうもいへぬく、よみ本すき「なる程く、見る人は又格別でふる、神童にあふばかり、始終伏姫ひとりで、ながく「と舞臺をもたせたる上手の筆力、佶と見えまする、段々と讀むうちに、いと美しき姫君が、蓬髪をふり亂し、羅綾の袂敗れ垢づき、ありし悌はなけれども、寢るまゝ、になほ美しく、ひとり言する物のいひざま、谷の戸渡る鷺の、なく音にまして愛たからんと、思ひやられて目前に、姫うへの姿が見えるやうなり、

評「第十一回義實の靈夢、貞行が注進の段には、さして評すべき事なし、十二回富山の段に、伏姫思はず、止水にうつるわが顔の、犬のごとく見ゆるに驚き、それより有身たるおもしろし、これは初篇の出像に趣あらせんとて、犬の顔にうつりし圖を出せしにより、

その繪にあはせん爲か、又はじめより此趣向ありて、畫せ置たる歟、何にもせよ、犬の氣を受けての懐胎を、一時に不圖犬の顔に見えしまでにて、かろく書おき、後に仙童の辨にて解せたる、妙なり、われら此二篇を見ざりし前に思ふたは、伏姫は八房に犯しおかされず、山中に起臥するうち、ふと一夕の夢に斑衣の美男來て、思はず枕をかはせしことあり、只一トすぢなる菩提「ろには似げもなき、あやしき夢を見つるかなと、只管心にかくる程に、有身たるごどく、病わづらふなごいふ趣向にてもあらんかと思ひしに、其處を二段うち越て、犬の顔に見えたるのみにて、その氣を感通せしといふ、この趣向實に妙なり、

答「判の詞も亦妙なり、止水の面影は、はじめよりたくみおけるなり、よしや夢寐なりとも、姪奔の會ありて、さて有身たらんには、義女の爲には大きな疵なり、この間を脱れんこと、殊に難儀の場とすべし、具眼の人にあらざれば、かゝる評はあることかたし、甘心々々、

評「義實仙翁の示現によつて富山に到ると、大輔洲崎明神那古の觀音を念じて霧のはるゝと、伏姫因果み

ちて今般の經よむと、八房の最期と、三方ひとつにつばめたるあたり、奇々妙々、實に外人の及ばぬ筆なり、伏姫いつよりも讀經の聲すみわたり、八房きく事切なりなごいふもん句、そらさむきまで奇なり、伏姫も八房も、入水に心決したるを、入水させず、大輔が鳥銃に打せたる、亦妙なり、八房は姫のかたを見かへり、川邊をさして行折から、ボンと火炮の音するなど、絶妙といふべし、又よし實伏姫、仙翁仙童一方は夢にし、一方はまのあたりの事にし、大輔が來歴は物語にしたる、三方ひとつのおち合ひを、おのゝ様子をかえたる作者の用心、きつと見どころなり、

答「たび／＼譽められ、持あげられて、眞にうけるにはあらねども、金聖歎が樓に登り、毛聲山が室に入るにあらずば、いかでか評論こゝに及ん、實にわがための知音なるかな、

わる口いひ「持あげるでもあるまいが、しかし譽められて腹をたつものはなし、いづれ泣本でなければはやらぬと見える、ひいき「やかましい、黙て聞てゐる、猿唐人めが評、大和尚を、初編の端像にて見しとき

は、大輔ならんとは思ひかけざりき、これらの趣向亦妙なり、義實の胸中に、彼にゆるせし東條の事、伏姫の事あり、よしや違犯の罪をゆるして東條の主になすとも、伏姫なくなりては、君の智といふ榮はなし、さては寵榮全からずと見れば、世外の人になるぞなか／＼に缺たる所なるべき、但し八郎といひ、大輔といひ、義勇の人なるに、後榮なきは残念なり、こゝは少し作者の手ぬかりならん歎、又八郎が里見を佐けたるは、古主の讐をうたんの爲のみにして、おのが榮を思ひしにあらず、されば後なきが、八郎の本意なりといふことを、ふくみたるにてもあらん歎、しかれども八郎既に自殺して、その義勇全ければ、その子の大輔に後榮あらせんも難なるべし、なれどもこゝにては、誤りにもせよ大輔は、主の息女たる伏姫を撃し罪あればゆるしがたし、こゝにもかくにも金碗氏の微運といふべし、

答「金碗八郎は國士第一、義烈の人なり、こゝをもて功成ていく日もあらず、忽然として自刃せり、大輔その子として父の風あり、薄命かくの如くならざれば、その志操を見るに足らず、張子房韓の爲に

漢を佐け、秦楚をうち滅して、飄然として大名の下にをらず、しかれどもなほ呂氏に阿黨し、その子の榮を思ひしは、後世疑難の發る所なり、田横、陶潛が義烈の卓きにしかず、且大輔をして高祿を受さするが如きは、よのつねの作意にして、全本五六卷なる小説の趣向にあるべし、この書の主人公は八犬士なり、伏姫、大輔等は、八士を引出すの楔たり、伏姫薄命云々、大輔も亦薄命云々にして、而後に八士あり、八士を生ものは伏姫にして、八士を汲引するものは、大なり、しからばこの義烈の一婦一男は、

八士の父母なり、父母かくのごとくの薄命にあらざれば、八犬士の後榮、いづれよりかせん、金碗氏後なしといへども、おのづから後あり、伏姫子なしといへども、おのづから子あり、そは全編滿尾の後にこそしらるれ、作者といへどもいまだしらざる所なり、況看官をや、今はづかに二篇にして、只見る所をもて辨すれば、批評の疑難も、そのよしなきにあらず、

よみ本好き「しからばちよと問たき事あり、大輔が父金碗八郎は、古主神餘に義を立て腹切たりといふも

の、實は玉梓が怨靈のなす所なるべし、妖は徳に勝すこそいふなるに、さしもの金碗八郎が、一女子の怨みによつて自殺せしは似げなし、ましてその子に高祿を受させては、よのつねの作意なりといはるは、こゝろ得がたし、よのつねならぬ作意とする事、なほ深き意味ある事か、

答「そこの疑ひあるべき事なり、初編金碗孝吉が自殺の段に、朦朧として玉梓が姿見えしといふ事は、世俗のうへに譬しなり、金碗いかでか姪婦の怨靈によつて自殺するものならんや、しかれども凡眼は、玉石を得辨せず、當時必愈いはん、金碗八郎賞祿を辭して、忽然と自刃せり、これ玉梓が祟なりしと、義實は智勇の良將なれども、その疑ひなほこゝにあり、況その他をや、凡妖孽の起るとき、人疑ひ惑ざるもの稀なり、かゝれば大輔が後榮なきも、玉梓が祟なす所とし、又八房を玉梓が後身とのみ思はするは、世俗の臆斷に宛たるなり、作者の面目にはあらず、この間なほいひがたき所あり、後の評を得ば、復其處にて分解せん、今しばらく待給へ、

評使女の早うち、新奇の趣向といふべし、五十子は、伏姫の死を知らずしてむなくなり、伏姫も亦その母の死を知らずして死たる所妙なり、いづれにしても、一方その死を聞いて後に死しては、愁歎の文言長くなりて、却愁情薄かるべし、特に五十子は、伏姫の事を思ひほそりて、長き病の床に臥し、伏姫は犬に伴れて、憂年月を深山に送れり、されば母子の死際に、又一層の悲をまさせんは、あまりの事なるべし、あはで死ぬるがあふ悲みより、看官胸うち塞りて、想像しつゝ感ふかし、よつて目録にも、此段を至上上吉にしたるなり、作者も定めて満足なるべし、

頭取「作者小用にしたれし故、ちよと御挨拶仕る、この段評し得てます、妙なり、評論この一ヶ條をもて、用心の空しからざるを知れり、感服々々、たれとほしらす、口上引、

よみ本好き、十二回富山の段の幕あきから、十四回伏姫の臨終まで、始終見物に胸を痛がらせ、もふ泣事はあなるまいと思ふ所に、又五十子の最期の注進、鬼のやうなる婆々さまでも、こゝで潜然とせぬはなし、至上上吉は相當々々、又たれとほしらす、やくしやア引、評、こゝ、

にひとつのむづかしき事あり、八犬士世に出ん起りに犬の事ありて、伏姫腹をさきて云々の所、水滸傳の發端の趣を、筋をかえて寫し出したる、妙なり、その犬に、高辛氏の故事を思ひよせたるも妙なり、珠數の玉を八士の袂にしたる、いよく妙なり、これら悉皆妙なれども、その肝心の犬は、いづくより來たるといふに、玉梓が怨魂なり、姪婦の口しき心より、犬になりて里見父子に恥を見せ、金碗親子に祟りたる聞えたれども、それが八犬士の基になりたるは、こゝろ得がたし、伏姫は仙道に入り、その功德によりて、八房は善果得たらんに、これが前身なりし玉梓は、たけのしれたる姪婦なり、この姪婦のよる所、遂に八人の勇士となりて里見を佐るといふこと、いよくこゝろ得がたし、伏姫の功能にて、しうねき怨をはらし、成佛したりくらゐが、玉梓には相應なるべし、これが八犬士の基本になりたるはいかゞなり、あまり事毎にあそびなく、五分も透あらせじと思ふにより、無理なる趣向はいで來る歟、但し伏姫が、その氣を受けたる原には、玉梓の靈にもあれ、腹に宿したる母は伏姫なれば、その義烈によりて、八犬士は出來たり、と

たすけいはいほる、べけれど、既に初編に伏姫襦袢の中にあるとき、仙翁が言葉に、玉梓が祟あるべき事を諭し、後には又福ひあるべき事を示し、又二篇に至て、仙童が辭にもその事ありて、こゝにかく八犬士より伏姫より、玉梓が專文のやうに聞えたり、これによりて、看官十に三四は、われに等しき疑ひあらん歟、爰は一言伏姫に、憤激の言葉あらせて、よしやこの身は恥しき死をなすとも、後竟に家のたすけにならでやは、なごいふことあらば、八犬士は伏姫の義烈によりて化生しと、あきらかに聞ゆべし、そもそも八房の犬のことは、八犬傳の基本にして、尤大事の物なれば、うち見てより、不圖かく思はる、事はあれども、これ將例の作者なり、ぬかりあるべき筈はなし、そこもこゝも悉考ての事なるべきか、容易には批判しがたし、こゝは衆議判にて定めんより、作者の答を聞くにしかず、當場に疵をつけんは、心なきわざなれども、思ひしことを漏さじとて、試みにこれをいへり、亦是作者に笑れん歟、

ども、さらば答申べし、すべて小説は、文面に假話あり、文外に話説あり、これを見あやまるるときは、その評的らず、抑傳奇稗説は、實録どうらうへにて、話説に倚伏を專文とす、譬ば水滸傳の一百八人は、天罡地煞の魔君なり、これらが人間に出現したる爲體も、亦罪犯刑餘の人にて群盜なり、しかれどもその志おのづから義烈あり、彼蔡京、童貫、高俅が、佞奸毒惡の類にあらず、こゝが作者の用心第一なるよしは、人みなしれり、八犬士の基本も、その心操も亦これにおなじ、百八賊の賊たるは、文面の假話なり、彼等が心操に本然の善あるは、作者の眞面目なり、只見るまゝ、評すれば、世を弄び俗を誣るの罪作者にあり、退きて文外の意味を思へば、宋の徽宗帝の時、政いたく亂れて邦に道なく、奸黨權を弄し、小人君子を剋するにより、賊中に義士あり、衣冠に賊あり、これ戒ずばあるべからず、さしもの金聖歎なれども、水滸傳を見損じて、只管宋公明を巨盜と見て評せし故に、九天玄女が天書を宋江に授る段に至りて、評窮れり、こゝは無益の辯なれども、水滸の發端を取出て、八犬士の基本を評せ

られしにより、まづこの大意を述るのみ、されば批評のごとく、玉梓はその不義さらに論ずべくもあらず、その悪報にて、八房の犬になりたるは、佛説の因果輪廻の義なり、水滸の魔君の、いと細小なるものとすべし、かくて犬に生れかはりたるは、この上の恥やある、しからば玉梓が自業自得の悪報はこゝに盡せり、玉梓既に八房の犬になりては、里見に功あり、莊周が胡蝶の論をもつていはゞ、八房はおのづからなる八房にて、玉梓にあらず、既に八房が玉梓なることをしらすば、誰かよくこれを辨せん、そのはじめ義實は、犬の大功を賞するあまり、伏姫をさへ許せしは、口より出たる禍にて、この禍なきときは、安西を滅して、安房一國の主になる福は來しがたし、犬に愛女を娶せんといひし禍、又一轉して八犬士出現し、竟に里見の佐となること、彼塞翁が馬に似たり、是を名づけて倚伏と云ふ、又彼水滸傳の發端に、洪大尉が誤て魔王を走らせし禍は、一百八人の豪傑出現して、國の福となるべきなり、しかるに佞臣、これを用ることをしらす、還て害せんとせしゆゑに、義士を賊中に走した

り、こゝに至て、順逆の義なきが如し、これ順逆の義なきにあらず、賢と不肖と忠義と非道と、その位をかえたるなり、かくて水滸傳の作者、彼一百八人を魔君に比せしは深意あり、かれらが忠義は、聖人の道に齟齬す、譬ば小説に、勸懲教誨の意味あれども、經書正史とあふものあることなし、こゝをもて、賊中の義士を魔君とすること、なほ小説中の教誨を妄言とするがごとし、八房を玉梓が後身なりといふよしも、亦これと相同じ、正史實録を讀む眼睛を抜替すに、野史小説を閱すれば、作者の體面を見がたしと古人もいへり、しかるに彼も玉梓が祟なり、これも玉梓が祟なりと、毎事にことわりしは、伏姫孝にして賢、美にして姪ならず、さるをこの禍を受させんは、勸懲疎なるに似たり、故にその祟をいふものは、文面の假話なり、本來の面目にはあらず、又伏姫は、犬の氣を感じて孕るを羞みづから肚を裂に及びて、胎なきを歡べり、後々の事さへに思ひめぐらすに違あらしかし、批評のごとく、われ死して里見の家に佐あらせんなど、いはゞ、羞て死する事は外になるべし、しかことわらずとも、

八士の出現は、八房の犬より起るといへど、その功德は伏姫と大輔にあり、さるをこゝにて、玉梓が祟を多くいはざれば、伏姫の功あらはれず、これ文面の假話、文外の話説なり、又大輔の薄命と、伏姫の横死と一對なり、金碗八郎が義死と、五十子の方の憂死と一對なり、凡この主従男女は、造惡のことなし、皆善果の人たるべきに、かくなり果たる事の原を、玉梓が祟といはずば、何をもち勸懲とせん、玉づさが祟は、義實彼を赦さんとして得赦さず、只一言の失より出たり、その應報、伏姫を犬にゆるせし戲言に成れり、彼と此をむかへて見るべし、亦一言の失にあらずや、彼此ともに口過とはいひながら、元來大きな愆にはあらず、しかるにその祟の大きなは何ぞや、後に里見に八士を得て、地を闢き鄰國を并する福も亦大なればなり、しかれども八犬士は、犬より生じて、犬より生せず、審に見るときは、伏姫母子と金碗父子が功德よりいで來るものなり、この所作意の秘鍵にして、筆もてそのよしを斷らず、竊に知音を俟にあり、かくはいへども後後の編、遺りなく見果ての評ならねば、いはるゝ所

無理ならず、強て辯をなすときは、非を飾るに似たらん歟、取捨はおのゝのこゝろにあるべし、評第十五回金蓮寺の仇撃、拈華庵の奇耦は、さして評すべき事なし、但しこの巻より下、はじめて八犬士の生立を説出すに及びて、初篇第一回なる結城合戦の段にかへして見せたる趣向、人の思ひがけぬ所なり、水滸傳は、發端に魔君を走らせ、そのち遙に年を経て、一百八人處々に出生し、おのゝ既に人となりての後よりして、寫出せし趣をかえたるは、神出鬼没の奇才といふべし、就中番作、手束、墓六、龜篠が人品動作、面りに見るが如し、第十六回のするに、手束が庚申塚にて子種を獲たる所、伏姫の神靈、よのつねのごとく善哉々々など、告る事なく、又その子のゆくするなどもいはず、只玉を投與へしのみにて、伏姫とも何ともいはずして、看官に伏姫なることを預けたる作意おもしろし、又その玉を與四郎犬が吞たるを、其處にては斷らず、後に犬を砍りし時、玉の由來をときあかせしは、奇なり妙なり、又額藏の玉は出所異なり、おなじ筋の玉なるを、いろゝにどりなしたり、定めて後々に出る六犬士も、玉の出所いろい

ろあるべし、よくも心を用ひたるものかな、
答「玉の出所、おの／＼その趣をかえんとはおもひながら、こゝら尤難儀の場なり、作者の苦心を知る人ならずば、評言いかでかこゝに至らん、よく見る人は格別にこそ、

評「犬塚信乃は、初篇の端像に出せしには、眞の女子と見ゆるなり、今一人毛野とかいふ兒も女子と見えたり、今この二篇に至ては、信乃をば假女子にしたり、われら八犬士の實録を見たる事なし、先年合類節用集とかいふものにて、その姓名をしるといへども、今は大かた忘れたり、八犬士といへば、皆男なるべきが、女武者もありしにや、本傳をしらざれば、いひがたきことなれども、作者の自序にも、本傳詳ならずといへり、しからばこの列傳の第一番に、犬塚信乃を出さずとも妨なかるべきに、前編の端像には、眞の女子と見えたる信乃を一番に取出し、實は男子なりけるを、假に女子にせしといふ、こゝらの作意といふかし、素よりかゝる趣向なりしか、も少しは二編の構思に、まづめづらしき事からと、信乃をはじめに寫出し、端像の女子にあはせんとて、かくはたくみなした

るものか、是によつて見るときは、毛野も實は男子ならんか、然るときは、趣おなじさまにやならん、毛野眞の女子ならば、信乃を女子にすとも妨なかるべし、この信乃を假女子にしたるは、本傳によつての事か、かへす／＼もいふかしき事なり、

答「この段の批評は、すべて作意と表裏なり、さりながら、二編の附言にもいへることく、最初の宿構は、發端までにて、いまだ八犬士の事に及ばず、しかれども初篇の端像に、八士のをさなだちを圖せし時、聊か思ふよしありて、信乃と毛野をば、女子に畫せおきたるなり、その故は、信乃を八犬士列傳の第一番に出さん爲なり、八犬士の本傳詳ならずといへども、軍記に載する所は皆丈夫なり、女武者は一人もなし、しからば八人悉く男にすとも難はなし、これを女子のやうに見せしは、無益の趣向といはるゝは、いまだ八士の興る所以を、よく思はざる故なるべし、彼玉梓は毒婦なり、しかるも牡犬に生れかはれり、伏姫は賢女なり、その行狀丈夫に勝れり、この因縁を趣向とせり、されば信乃は男子なれども、假に女子に扮せしは、これ伏姫は女子にし

て、男子の氣質あるを反覆せり、この故に信乃をも列傳の第一とす、且出像には女子と見せて、男子になしたるが作意なり、毛野が事はいまだ寫出さず、故にこゝには分解しがたし、思はずや與四郎犬と信乃と同年に出生せしも、手束がその子を祈りしときに、伏姫の靈あらはれしも、これらの因果を示すのみ、初篇には八房ありて、二編に亦與四郎あれば、ちとうるさきやうなれども、與四郎犬を出さざれば、信乃を女子に扮せし意を曉らす由あらず、伏姫の神靈と、與四郎犬をかけて見ば、信乃は女子にして女子にあらぬ、事のこゝろは知らるべく、又與四郎は八房が後身と云はざれども、其處にて曉り易かるべし、この犬の事に就ては、猶種々の趣向あれども、こゝにて樂屋は見せがたし、
りらぎな人「開けば開程道理至極、これからの新板は、うかく／＼と讀ではおかれず、何が苦勞にならふもしれぬ、よみ木好き」三の巻十六回、番作夫婦が犬塚へ来て、墓六、龜篠が爲體を傳聞忽望を失ひて云々といふあたりは、讀でもちからが脱るやうなり、又四の巻十七回、墓六夫婦が養女を引とる段に、墓六いよく／＼たの

もしくて、よき子を勿泣、物とらせんと、袂へ右手をさし入て、とり出す果子の花もみち、實ならぬ親としらぬ子も、さすが口には孝行にて、朝四暮三の猿轡、かけたることく泣止みけり、とは飽迄筆のまはり滑稽、外にまね手はないぞ／＼、評「番作の自殺は、誠に苦肉の計ならん、しかれども今少し計策もあゝべきに、日頃には似ず短慮至極、相手は癡たる小人なり、是牛刀の譬に似たり、譬に兵を藉もの歟、猶三編の出たらば、この疑ひは解べきか、

答「番作が自殺するを、苦肉の計といひつるは、見る所のまゝにして、苦肉の計のみにあらず、又墓六、龜篠が爲に死するにあらず、その子の爲に死するなり、死でももの事に死するは、計ありといふとも拙きに似たりと思ふは、只うち見たるうへのみにて、みだれたる世の人氣は、これと相像ざる故なるべし、伍子胥を乗せて江を渡し、疑れて入水せし、彼江上の漁丈人のごとき、秦平の世をもて見れば、醉狂にして馬鹿々々しからずや、然れども義信を成り、疑念を厭ひ、偏に仁俠をもて、死して潔しとするものは、戦國の人氣なり、況番作は智勇の士な

り、その身重病に嬰りて起がたきを知れり、且その子は少年にして養ふべきものなし、姉と姉夫の奸なるはよくしつたり、番作が氣質を推ば、死ざることを得ざるべし、泰平の世の人ならば、番作といふとも自殺すべからず、金碗八郎が自殺も、亦これにおなじ、八郎は古主の爲に死し、番作はその子の爲に死す、彼は義烈なり、これは慈愛なり、彼は公道なり、これは人情なり、鶏の爲に牛刀を用るといふべからず、墓六、龜篠を敵手にして死するにあらざるよしは、番作既に、渠等が胸中を悉く見ぬきたるにて知らるべきか、

評「信乃が與四郎犬を砍て、玉を得たることは、よくも考たるものかな、與四郎は、犬塚親子が年來寵愛する犬なり、これを主の手づから砍らんこと難かるべし、ざるを犬は墓六に刺れて、深手を負ひし折、信乃は父の自殺をかなしみ、その身も共に死んとするに、犬を墓六が殺さんことを思ひはかり、さらばわが手にかけて、與四郎を砍るに及びて、思はずも玉を得たり、かくて自害を龜篠等に禁められ、父の遺言を思ひ出して、遂にその死をどいまるなど、事みな不意

に出たるごとく、無理なる趣向絶てなし、第三卷より下、八犬士の事になりては、この段を拔萃とすべし、
答「この評は、固に作者の胸臆を穿得て妙なり、わが爲の子期こゝにあり、わが爲の子期こゝにあり、評「信乃、莊助等兒輩にして、その論卓きよしは、既に作者の自註あれば、評すべきにあらず、五の巻のどちめに、寔然と足音して來るものは、誰であらふぞ、心にくし、又一人の犬士ならんか、さらずば、大和尚でもあらうか、推量するに、これ、大にて、玉の事より、兩兒輩の奇才を譽め、里見殿に仕へよなど、預めす、めおくといふやうなる趣向にてもあらんか、しかし、大の出しやうが、それでは些はやいやうなり、再思ふに、やはり犬士中の豪傑なるべき歟、穴の貉は形を見ずとも、貉といふ事誰もしれど、是ばかりは三編の初巻を見ざれば、評はしがたし、
答「足音の推評は、尤作者の祕事なれば、只今は分解しがたし、すべてこの二編の評は、聊も理屈なし、初編の評に比れば、感歎彌淺からず、それをなほ解ものは、商人はわが賣物のわろきもよしといふが如し、批評は慰み、作者は世わたり、みづから

犬夷評判記下之卷

△朝夷巡島記初編

評「まづ此作者の筆端不測、趣向に自由自在を得られしよしをいは、朝夷も爲朝も、事の趣粗似たるものなり、しかるにこの編は、聊か弓張月に類することなく、爲朝の人品と朝夷の人となりと、書ざますべて親しからず、譬ば爲朝は堂にあり、朝夷は室にあり、今小説にとくところ、凡此兩雄は、共に清和の後胤なれども、朝夷は和田義盛に養はれて、旭將軍の落胤と云ふ事顯れず、これを爲朝に比れば、その家柄劣れり、よくこの品を書分けたり、自由自在の筆といふべし、初めによりて後を思ふに、島わたりの事なども、弓張月と異にして、定めて新奇の話説あらん、板行年々に懈怠なく、はやく全本にして見たいものなり、さて發端粟津ノ原の段には、さして評すべきことなし、但し事は盛衰記のまゝにして、花やかに書たる文辭のこなし、佶と見どころなり、そが中に、瀬田の夕照に凍解る、殘雪の飛花落葉、中略、あな便なしと夕間暮、見

拙しとするときは、株板に拘るべき、板元の爲なれば、思はず過言は、舊識の心やすだてとゆるし給ひね、

評「作り物語の後篇は、見おとりせらるゝものなるに、この人の作ばかり、前編よりは猶後篇、後篇より猶三篇と、人のまつこと亦奇なり、三編はいまだ出されば、この書の愚評はこれまでなり、みなく「をしいぞをしいぞ、頭取」扱是からは朝夷の評判、大ぜい「待かねたく、

犬夷評判記中之卷終

かへる兜の星月夜、隕て石田が發つ箭になどいふあたり、わづか初巻半丁にすら、かくの如く妙文あり、五つの巻を悉くかぞへ出んは、中々なるべし、よませて聞人なる程、其様なこともあつたつけへ、評第二條に、軻畫義盛が妻になりて、操を破られず、しかも遺腹を全し、義にすゝみて自殺せし義烈のありさま、すべて妙なり、この場の立まはり、勇婦の烈しき中に、恩愛の切なる事、情あらはれて感ふかし、最初にこの一條を讀了れば、多納せざるものなし、巴は老後に尼となりて信濃に隠れたるよし、盛衰記にも、一説を擧てこの事あり、又世に巴が文などいふものもあり、しかるをその巴の尼をば榊手にして、眞の巴は、はやく節義に自殺させて、その勇敢と閑寂とを、二人りにしわけたる妙なり、巴は粟津合戦の後、再び出ずして、終を木曾に取らば論なし、和田滅亡の再寢の夢を、鎌倉に見果ては、よしや尼になりぬといふとも、烈婦とはいひがたし、さるをかくて一人にしたるは妙ならずや、巴からして直うちを付ねば、朝夷の直うちにかゝればなるべし、

答評し得て妙、

評「血字の遺書僅に數字にして、よく朝夷が生涯をこぞわらせたる、亦妙なり、こゝには朝夷を文武の英士にしたたり、されば此事なくとも、みだりに逆を思ひ企べきにあらず、又五の巻許我の段に、秀作が議論教訓もあり、しかれども猶假初にも鎌倉殿に仕んは、こゝろよからぬ所あり、さらば仕の途には進まで、世外の人とならずば、世の議論も脱れがたけん、これらのよしをよく考へて、はやく此遺書にてこぞわらせたる、實に妙なり、この遺書と秀作が教訓なくて、朝夷後に鎌倉に奉仕たらんには、文武の英士といひがたし、その行狀も見るに足らず、すべてこの母子草の一段は、一部の絲口よくたくみなしたるものかな、これを初篇の拔萃とすべし、かへすゝも奇々妙々、

答評し得て亦妙、

評「榊手阿古丸を背負つゝ、走り去らんとする條に、猝急にして介抱に、違なければそがまゝに、背に負ひつ揺揚て、彼白旗を背手に投掛て引繞らし、涙を手向の云々といふあたり、勢ひありてよけれども、血字の遺書なる白旗を、しごいてからげ物にせしは、ちと龜

末なるしかたなり、この旗は懐へしかと納させたきものなり、しかしかゝる立まわりは、常に雜劇にあるごとくにて、かくせざれば、其形勢烈しく聞えぬゆるなるべし、この段切は、秋津島八重桐の傍あり、あはれにして又潔く、しかも見物を歡する、老巧のわざなるかな、

答「かくまでにはげしき折、記念の白旗を懐へ納ん事は、あぶなきわざ也、この事實にあるとても、心利たる婦人ならば、懐へは納むべからず、すべて重荷を負ふときに、動もすれば懐中なる物を遺すは、今あることなり、さればさて、是をしごいて鉢巻にせば長過ん、且脂が着べし、或は引結で襷にかけんも不用なり、又腰帯にせば、いよく失敬といはれん、素より婦人のことなれば、犢鼻褌にはすべくもあらず、今般に母の魂を籠たる記念の旗をもて、負ふその子を括り添しは、母の擁護添るなり、されば又野島にて危窮のとき、軻繪の神靈その子に憑て、夥の追兵を投懲せしと、此彼をむかへて見るべし、記念の旗のからげ物は、野島の危窮に解せん爲なり、故なくて如此せしにはあらず、この一

條は見損じられたり、

評「野島の段に、阿三丸獸六をにらまへて、母の自殺は吾故なるに、今又父の使を阻て、不孝を醸すべくもあらねど云々といふ所、尤眼をこめて見るべし、巴がその子阿三丸をして、よし盛にいはいはしむるのみならず、作者が阿三丸をして見物にいはいはしむるなり、抑朝夷その武勇拔群なりとて、只和田が三男にて成長せんには、所謂若様育にておもしろからず、貧家に養れてその二親に孝を盡し、仇を撃怨を報ひ、一人他郷の客となる、千辛萬苦、譬ば一株の瘦梅、よく雪霜の精げを得て、更に色香をませるが如し、よくたくみなしたるものなり、げにかく書めぐらしゆかでは、彼鮫を手取りにする實録のあたりまで、綴りなす事なるべし、さてこの安房に退きたる一件の事を思ふに、巴阿三丸が爲にはこぞわりなれども、義盛がかたには理りあるべくもあらず、二の巻に、よし盛阿三丸が事を聞て、しばらく棄て再會を待んといひ、又同卷、蒲黃の編のはじめに、よし盛阿三丸がゆくへを想像ことありて、云々と思ふばかりにはかなくも、あまたの年を送りけりとは、些不慈悲にはあらざる歟、縦

母巴が靈の憑そひ守ることありとも、それに任せて外にだも、密に心を添ざりしは、義盛より誰よりも、こゝは作者の手ぬかり歟、とはいふものゝ、和田より見えがくれに附人ありては、彼苦中を喫する貧家の段なかるべし、しかれば作者もしかたなく、和田が手ぬかりにしたもの歟、定めて後々の巻にて、親子再會の日には、この手ぬかりを解事あらん、こゝにてしかとは評しがたし、

答「腰越獸六が逃てかへりしとき、義盛は阿三丸に、鞆繪が靈の憑しと聞て、かさねて追手を遣はさず、その行方だも索ざりしは、義盛の氣質素より決斷なく、狐疑ふかきによつてなり、もし狐疑の心なくば、鞆繪に自殺さすべからず、又決斷を取ること速ならば、建保の戦ひに敗死すべからず、まづよく義盛の言行に、心をつけて見られよ、後々の編に至らば、おのづから氷解すべし、

評「二の巻兒櫻の編に、栗手豊六に阿三丸が事を、おちもなく物がたるとあり、木曾の胤なるよしは、なほ告ざりし歟、そのつゞきの文に、素姓を問へば、在鎌倉に一二を争ふ武家の郎君云々といふ豊六が語あり、

り、しかるに又四の巻の四丁の右に、これを見る二親は、貴ひかねし借銭を、償らるゝより猶くるしく、うたてやな、世とて時とて、三浦黨のやしなひ子、裕といひと恰いひ云々といふ文あり、さては豊六も木曾殿の落胤といふ事を知てをるやうなり、二親とあれば、あながち豊六にのみかけていふにもあらぬ歟、豊六には、始終木曾の落胤といふ事をしらせずば、栗手が落髪の際に、云々の事はかり、夫にすら告ざりしなごいふ證あるべし、なれどもこの事は、初より告ざりし手が、夫に告てはかなはぬさまなり、豊六が氣性を推せば、これを告ることも害なき事、勿論なり、

答「かゝることは、文中にしかとことわらず、ほのめかしておくをよしとす、初より栗手が、木曾の事を豊六に告げずば、よしや鞆繪が遺言也とも、阿三丸を舍藏おくこと、俠氣のみにては骨なるべし、豊六に告たると又告ざるとは、卷々を讀もてゆけば、おのづから知らるべし、原是祕密の情由あれば、筆もてしかとことわらず、唐山なる上手の小説に、かゝる事かけること往々これあり、さりながら今の草紙物語を、かくまでくはしく見らるゝこ

と、この人の外稀なるべし、小説すら斯のごとし、況實録をや、讀史の才推してしるべし、

評「二の巻に健田秀作が、阿三郎に教訓の一段は、眞に確論なり、しかも孫子の兵法などをば説す、その議論雅俗をまじへたれば、誰耳にも入りやすし、鞍馬八流その他劍術の奥旨といふものは、多く禪法に似たりと聞り、それを宗として、又七書の義を失はず、こころをこゝめて見よやもろく、

答「褒美頗分に過たり、額の汗を拭ふのみ、又唯天狗に妬れんか、

評「この秀作、俗に云ふ名乗闕たり、俗稱を何とかして、實名を秀何とかせば、後に朝夷が、名の一字を取るとよかるべし、

答「寔に評言のごとくするもよし、しかれども義秀の秀の字は、敢秀作の一字を乞取りしにあらず、朝夷が云々といひしは、當座の挨拶のみ、秀作が實名をしるさざりしは、世を避たる田舎浪人のさまを寫せしなり、實名ありてわろきにあらねど、名氏をかるくして、その才を重くせねば、始終世にあらざる人と見えがたし、

評「蒲殿の巻に、義盛營中に事ありと聞て、いそぎ馳まゐるに、佐々木畠山以下誰かれ、はや營門を守護せしよしへり、義盛の遲參こゝろ得がたし、この所文面のみとはいひながら、この物語には、義盛を第一番に馳つかせし、しかも侍所の別當なり、又實録にも、このとき義盛一番に馳つきたるよし見えたり、答「義盛人に先だちて得まゐらざりし趣に作りなしたるは、この人決斷なく、狐疑多きよしを示すのみ、かばかりの事にも、此こゝろを用ひざれば、その人の性質始終とほらず、皆是建保敗死の張本と見るべし、

評「蒲殿の一條、はじめより終まで、さらに云ふべき事なし、大かたは實録に新奇をくはへ、本末よくとほりて妙なり、廣通評定の席にての議論、蒲殿今般の述懐などを借りて、北條が老奸を論じ、武衛の失策を評したり、これらははやく古人の論じおける事ながら、廣通に述させ、範頼にいせたる、いと似つかはしくてよし、そが中に範頼の臨終に、頼家の事までをいせしは、あまりにけやく聞ゆ、今少しおぼろげにいさせて、扱地の文章に、果せるかな後年云々とあり

たし、

答評し得て亦佳、さりながら此物語にては、蒲殿は殊さらの癡人なり、實録のうへにても、才ある人にあらざれども、又させる好もなし、せめてその臨終に、神がましきことをいせしは、則作者の老婆心、範頼を助けたるなり、もしこの格言なきときは、義邦の相場が立す、義秀義邦の甲乙、その父母によつて價をさだめたること、前の評の如し、

評「廣通舟九郎を撃て、幡多の方の首を得る段に、覆面したりとあり、この所の文面にては、よく取合せたるやうなれども、纔に一丁隔て、廣通が蒲殿に物がたるとなれば、廣通は中途より引かへして、館の焼たる所へ馳つけたるやうすなり、かねてより用意せずば、しのび姿に覆面しては、駆つくべきやうなし、但しこゝに捨べき命ならず云々といふ廣通が言葉あれば、思案ありて、即座に覆面して立しのびたりと見んも、子細なかるべき歟、この捨べき命ならずとは、蒲殿の先途を見ん爲なるべし、白鳩丸は、既に弟廣光に託したり、幡多の方の事も、又心にかゝるべし、しからば

そのほごりに立しのばんも、理りなきにあらねど、覆面は些求め過たるやうに覺ゆ、かく思ふよしは、この繡繪に、異なる打扮なるにより、疑念の發る媒となれり、只かろく立忍びたりと見んには、難なかるべし、弓張月に、八町礫が白縫の危急を救ふ段、竹藪より礫を打つ、あらはれ出、又この第二編に、朝夷が廣通の必死を救ふところなど、すべてその場の拍子にてもあるべし、

答「廣通既に館の變を聞て引かへせば、虚と内には入とべからず、覆面といへば、手拭もて面を包みたるも覆面なり、忍姿といへば、蓑笠にて打覆ひても、しのぶ心はおなじかるべし、出像に黒き衣服、頭巾さへ被らせしは、彼歌舞妓狂言なる、皂衣とかいふものを摸せるのみ、すべて出像は、作者の面目にあらず、畫をもて文におよぼし、且その作意を難せられんは、些うらみなり、

評「三の巻、北條親子が奸悪いとにくし、畫面なる三人が顔を、爪もて傷りたきやうなり、便是この作者の妙、凡この親子の奸悪、牧の方は時政にまさり、義時は父母にうち越たること遠し、幾行か讀もてゆく

ちに、奸の大小おのづからにわかる、立野儼仗來れりと聞て、時政は遠てせんすべをしらす、牧の方は湯島にこゝろ得させんとて走り去り、義時は騒がず、書さしたる書状を、細かに引裂て袂へ容れたる、當時の光景を目前に見るが如し、しかるに實録に據るときは、牧の方の爲に義時は繼子なり、この母子の間、よからざりしよしなるに、今此物語には、實の母子のごとく見ゆ、しかもいと睦しげに書なしたり、思ふに此親子の不和なるは、この物語に不用なれば、實録には據らずして、親子夫婦同一體の奸悪を宗とせしにや、かくて實母子に作りなせしなるべし、

答「この段の大意は、實に評言の如し、義時は牧の方の繼子なるよし、又その不和なりし事などを、今こゝにて説出せば、話に枝さきてなかく煩し、故にこゝには、實の母子なりとも又繼母なりとも、何とも書ず、只うち見たる所にては、實の母子の如し、是則牧の方をも一盃くはする義時の大奸なる所以、後々の巻に至らば、おのづから氷解すべし、

評「四の巻五丁目に、阿三郎秀作に別れて、三四年絶て

安否を問すとあり、前に秀作の誠あれども、安房は大國といふにもあらず、特に大瀬と満祿の麓と、さしも隔たる所とは聞えず、いかに生活に暇なくとも、三四年のうち、一兩度は音づれせぬことやはある、不沙汰といふにも限りあり、彼秀作が事は、素より父母にしらせずとも、満祿の山寺へば、親も折々やるべき事なり、その序をもて、秀作を訪ん事は易かるべし、されば秀作が結城へ招れしといふ事を、今少しはやくして、阿三郎秀作を訪しに、結城へゆくべきよしを聞しかど、その後は障ることありて、得訪はざるとか、或は里人に、秀作が結城ゆきの事を傳へ聞て、訪んと思ふに暇なくて、しのびく、にうち歎くとかいふことあらば、四年不沙汰の甚しきには優べき歟、扱後に許我にての再會にも、阿三郎は一向に秀作を結城にありとのみ思ひるたる、不意の對面にさまたげなるべし、

答「阿三郎が三四年秀作を訪ざりしは、故より情由あることなれば、これを不沙汰といふべからず、既に秀作が教訓によりて、武藝のことを思ひたえ、只管畊作を旨として、養父母に仕んには、縦おりお

り秀作が門前を過ることも、更に内に入るべくもあらず、是則警敵圖内、鈍佛等を撃しとき、庄司騷なる石の不動に賽して、某もし時を得て、國の爲に力を盡し、功成り名遂て一郡の主ともならば、乞まうして、遂にこの地を領すべし、中略、しからずば又さらしに、詣るよしもなきものをや、といふ所にむかへて見るべし、雋たるの器量の人は、かゝる事と漢に多かり、阿三郎もし木曾の落胤なるよしを知らず、豊六に事なくば、農夫にて朽果んか、さるときは、秀作が門前を往還するとも、羞て内へは入るべからず、又木曾の落胤といふ事を知らずとも、はからずして武士になり、志を得たらんには、秀作千里の外にありとも、必いゆきて安否を問ひ、且昔日の恩義を謝すべし、豪傑はおのづから豪傑の志あり、凡人のうへをもて、その是非を論ずべからず、かゝれば阿三郎はさらなり、世の見物に、秀作は満祿にありけりと思はせねば、許我の再會の段に感想薄し、よしや秀作が結城に赴くよしに作て、更に許我に在せても、其處と彼所は其間近かり、結城を許我にせしのみにては、再會の段おかしからず、これ

を不沙汰といはるゝは、凡人のうへにあるべし、小節に拘らざる豪傑のうへには受がたし、評「四の卷蜂佛の事は、何やらんにて見たるやうに思へども、出所を忘れたり、それをおもしろく取まじへて、豊六が剛直、鈍佛、圖内が奸邪、阿三郎が仇撃に至り、一段の小説に結べり、自由自在の筆なるかな、よみ本好き」阿三郎一三が爲に、竊に樋口なる巨石を滾落せし事を、はやく一三に知られたるよしを解く、野邊送りの果の段に、一三その頃、樋口のほとりにて、捨ひたる手拭をもて、阿三郎とされる事、こは人の氣のつかぬ場なり、又豊六が獄舎に繋れ、無實の罪に死するるとき、阿三郎は、武藏なる淺草寺へ參たれば居あはせず、此少年は孝にして勇あり、このときもし家に在らば、手を束ねて、父の死を待ものにあらず、毛を吹んとして又更に、疵を求る事もあるべし、こゝらはいよくも作なしたり、又一「阿三郎、養父の亡骸を埋葬て家に還るに、梨手は哀傷にとりも亂さず、形を正し辭を改め、阿三郎にその素生を、はじめ告る一段は、あはれにして潔し、眞の佳境といふべき歟、凡この物語に、梨手夫婦と一三は、本名もなく氏もなし、

しかれどもその志操は、よの義士節婦も差ることなし、これらも作者の新手ならん歟、評「阿三郎木曾の落胤と聞しより、初の阿三郎にあらず、これは雜劇ですることなれど、この場を脱れてよく書たり、又五の卷仇撃の段に、賤堀圖内、尼鈍佛等が、いたく酔たる爲體は、さして評する事もなければ、この眼代もこの尼も、齒は拔腰は折みながら、舊き色情あるよしを、酔語の端にあらはしたる、その人物を見るが如し、わる口」そこらに難はなければ、庄司騷で一二が、夥兵を禦で、阿三郎を延しやる立まわりは、歌舞妓狂言めきていやなり、これのみならず初巻の末に、野島の浦の追兵の段、又八犬傳にも、義實安西が館に來る段、主従矢襖鎗襖にての出派は、雜劇の正本よむこゝちす、草紙物語に歌舞妓を雜ては、しら／＼しくて興がさめる、大人はさもなしか、こゝらに評がしてほしい、ひいき」それ程評が聞たくば、その釋おれが語て聞さふ、その趣は歌舞妓に似ても、正本のせりふをまじへず、義太夫本のもん句を取らず、よくこの場を脱るる故に、語路やすらかにして卑しからず、その事勾欄めかずとも、辭淨瑠璃本に類して、手づかみなるは見

るにも堪ず、先年江戸へくだりしとき、この作者に聞しことあり、今泰平の有がたさは、劔戟突戦、刃傷殘害の一事のみ、人眼前に見るもの稀なり、その事常に觀るものは、只彼戲子の假戦にあり、よりに修羅の一段のみ、雜劇の面影を寫さざれば、人情も亦うつらず、これを寫すに用心あり、及ばずながら拙作の趣をよく見よといはれき、何をおん身がくつちつて、傍痛い岡宰領、すつこんで聞ておるやれ、評「ハレやくたいもなき舌戦ひ、最負の目にはわるきもよく、嫌忌の人にはよきも悪し、おもひ／＼の褒貶は、公論といひがたし、それはまづそれにして、又この初篇の妙所をいは、縉を引クがごとく、滿祿寺を楔として、秀作を引出し、秀作を楔として、篤長老を引出し、篤長老を楔として、義邦、廣光を引出し、義邦主従を楔として、時夏を引出し、時夏を楔として、菩薩平を引出す、しかもその糸口紊れず、無理なる趣向絶てなし、但初篇のみならず、便前後二篇の妙所、

答「金聖嘆が水滸の評、こゝに借得て亦妙なり、評「俱利伽羅丸の事、はじめ義盛が巴に與る所にては、戒刀とのみあれば、長短の論はなければ、そのあたり

の文面にては、短刀めきて聞ゆる也、さればそのはじ
めに、大刀なる事紛れなき一言を、いだしおきたきや
うにおもはる、はいかゝあらん、又懐刀とあるは、
戒刀を寫誤れるならん、

答「これもよく見られたり、初編母子草の巻、巴あさ
さんさすには、短刀に畫り、又二編過去來會話の巻に
は、朝夷が扱は
なせし所大刀に畫り、これによりて、看官疑ひ
あるべき筈なり、しかれども出像は、一卷の模様迄
にて、宗とするにあらねば、失れりと知りつゝも、
補ひ正さゆること多し、刀の長短に緊要の事なけ
れば、そのことはしるしつけざりき、その卷々を讀
もてゆけば、短刀にもあらず、又すぐれたる長劔に
もあらざることは、自然にしらるべければなり、
よみ本好き世の見物、或は朝夷より、八犬傳勝れりと
いふものあり、大人も如し此思ひ給ふ歟、評「余をもて
是を見るときは、八犬傳を兄としがたく、朝夷を弟と
しがたし、その八犬傳を勝れりとするものは、嬋妍た
る姫うへ、八房の犬に伴る、奇談怪説を歡ぶなるべ
し、しかれども朝夷は、前版に爲朝あり、且島渡りの
事相似たり、新奇をこゝに謁さんことは、八犬傳より

難かるべし、これのみならず、八犬士には本傳なし、
本傳なきものは作りやすかるべし、朝夷には本傳あ
り、且當時の人物は、多く實録より出たり、實録詳な
るときは、作者の趣向に自由を得ず、これを綴りこな
さんこと、容易の業とは思はれず、抑この作者は、趣
向を建る事速にして、思慮を後篇にまで旋らさず、草
を綴るに稿を易す、無邊無數千態萬狀の寓言、胸臆よ
り涌出て、泉の竭ざるごとしと聞り、しかれども初中
後に必約束ありて、その筋融らざることなく、文章奇
絶にして、失あること少し、眞に天稟の奇才、小説の
大筆といふべし、しかるを吾庸才もて、その巧拙を評
せしは、金聖歎が所謂楔にて、作者の自釋を引出さん
爲のみ、多く當らぬもその筈の事とすべし、この朝夷
の初篇の趣向は、大かた二編の仕込なれども、意味深
き事かくのごとし、第二編に至りては、漸々に佳境に
入り、拙評はごまればかきまれば、作者の答に妙釋多か
り、なれども一席にはとき謁しがたし、扱思ひの外夜
も深たり、つひに、板元すわい東西南々、丁數既に岌
み升れば、まづ今板は是ぎり、

犬夷評判記下之卷終

跋

物の巧拙を評することは、今昔和漢に多しといへど
も、皆是隻手打なれば、詰問ありて答述なし、今この
評判記はしからず、作者の自釋を見ん爲に、言を設て
問難せり、月下の門にあらねども、敲て遂に開くも
の、これ未曾有の珍書ならずや、余幸に翁の稿本を獲
て、愛玩祕藏こゝに日あり、頃者又おもへらく、夫獨
樂は衆樂にしかず、物の本を好る人、一たびこれを
閱せんには、その書の深意を知覺して、その好むこと
日來にまさん、況草紙物語を作り習ふと思ふ人の爲
には、亦こよなきはし立なるべし、現得がたきはこの
書なるかな、好て人の非をいふものは、聖の誠あなれ
ども、三枝園の批評はしからず、只その才を景慕し
て、その書を愛るの深きになれり、さればにや、翁は
これを誹るごせず、評の的否を丁寧にしるしづけて
還されし、その量巨海のごとくならずば、その言いか
でかこゝに及ん、かゝる珍書を人に見せずば、こゝろ
狭しと笑れん、いかにせましと思ふ折、山青堂が鴻書
もて板せんと乞ふまゝに、おのが蛇足に綴りあはせ

て、又稿本を東都にくだしつ、遂に翁の序さへ獲て、
まづ賣物に花を飾らせ、若葉に繁る山崎が、家樓に鐫
て、世に薫らす事とはなりぬ、

平安

櫟亭琴魚再識

風流眞顯記

てんからく天下を奪ふ
叛逆の棟梁さつきに響く
櫓太鼓は座本明智光秀

風流眞顯記

附り山崎の芝居に立役實惡の立合、揃ひも揃ふ
た勇士の大入り、目を驚かす千軒幟と桔梗
の紋所

悦びありや外へはやらじと
一騎駈の大将四海を治る
三番叟は座本羽柴秀吉

序

筆の跡ほど恐ろしきはなしと、西山の聖が云ひしも
宜なり、最負よりと書し芝居のちらし看板は、入りを
取るべきため、軍將講釋師が年玉に、一枚摺の年代記
を配りしは、軍將の標題を覺させて、開席に入りをと
らん思案ならん、軍書と芝居はきつい違いじやと二
人の物語り、軍書と芝居の趣はかわれど、ごちが虚言
やら實録やら、見や往古の事なれば知れるものなし、
談義や芝居に、神道を守る守屋は惡役とし、天皇を殺
し奉りし蘇我の馬子は立役になせしは、佛法歸依に
ならんかし、芝居はもと秀吉公、名古屋御陣にて、お
國といふものに仰付られて興行ありしより、打續て
繁昌し、春毎に役者の評判づけの出版を待かねるは、
治國太平のいさほし也、其中に嵐小六は、立役實惡女
形ども、古今名人ともてはやすれども、小六も古人の
倂は斯ならんと、おもわくをなせる物なれば、眞の古
人の評判こそ、評判のまことならんと、彼の恐ろしき
筆をとり侍るも、目出度御代のためしなりけり、

作者 竹 立

山崎南の芝居 座本 羽柴 秀吉
山崎北の芝居 座本 明智 光秀

名代 小田 信長

△立役之部

至^{登首}上上吉 中河 瀬平 羽柴座

よいやくと勝鬨の聲 高砂

大上上吉 齋藤内藏之助 明智座

恩と義理とになげうつ 三輪

上上吉 堀尾 茂助 羽柴座

堀休 太郎 同

天王山の働は下には置れぬ 葵の上

上上吉 加藤 虎之助 羽柴座

唐土までも鬼舎丸と誰も 夕貌

上上吉 齋藤 伊豆守 明智座

齋藤 大八郎 同

親や親なりや子も 小督

上上吉 高山 右近 羽柴座

爲計田 勝三郎 同

功を競ふればごちらが梅か 櫻川

上上吉 島 左近 羽柴座

物のあるしうち又と 嵐山

上上吉 林 半四郎 明智座

泰 桐 若

上上吉 荒事のすさまじさは鬼神も稀な 田村

是角五郎右衛門 羽柴座

上上吉 黒田 勘兵衛 同

人はさほごにいはいはねご軍功は 敦盛

上上吉 浅野 彌平 羽柴座

洛中をしづめし美しさは 錦木

上上吉 後藤 又兵衛 羽柴座

中河 小右衛門 同

上上吉 中川 淵之助 同

いづれもおどらぬ英勇に舌を 卷絹

上上吉 明石 儀太夫 明智座

藤田 傳 吾 同

あつばれ自害の 松山鏡

上上吉 明智 十郎左衛門 明智座

浅尾 庄兵衛 同

忠義にごこ迄も行 舟辨慶

上上 神部三七 羽柴座
 上 鹽川伯耆守 同
 上 津田與三郎 明智座
 皆一方の大將と 岩舟
 上 片桐半右衛門 羽柴座
 上 片桐助作 同
 智勇ともに奥床しい 軒端梅
 上 三宅藤兵衛 明智座
 上 稻次萬次郎 同
 母衣使の手際と籠城の立派に續 籠
 上 福島市松 羽柴座
 上 杉山主水 同
 上手に一騎討の戦の花 筐
 上 脇坂甚内 羽柴座
 上 桂市兵衛 同
 上手柄は引ぱり合た 二人静
 上 甘利八郎太夫 羽柴座
 言葉の過たも當りはづさぬ 八しま
 羽柴座
 上 生駒雅樂之助 上 比企田帶刀

上 蜂谷出羽 上 並河掃部
 上 大谷慶松 上 進士作左衛門
 上 糟屋助右衛門 上 村越三十郎
 上 櫻井佐吉 上 三宅孫十郎
 上 蓮賀彦右衛門 上 伊勢與三郎
 上 山内仁右衛門 上 奥田宮内
 △立役卷軸
 大上 明智左馬之助 明智座
 安土進發に勢田に掛渡せし 舟橋
 △實惡卷首
 功上 明智光秀 座 本
 天下を取たも日數僅な夢は 邯鄲
 △敵役之部
 上 筒井順慶 羽柴座
 敵か味方が取入て見ねば 白髭
 上 小田七兵衛 明智座
 積らぬうちに早ふきへ行 竹の雪
 上 四王天但馬守 明智座
 上 松田太郎左衛門 明智座
 軍配の先にすゝみて 猩々亂

上 村上和泉守 明智座
 上 諏訪飛驒守 同
 上 中村長兵衛 羽柴座
 藪越のまぐれ當りにとつたはしめこの 山姥
 △實敵卷軸
 上 柴田源左衛門 明智座
 金輪ならくご血戦を 須磨源氏
 △親仁役
 上 宇野豊後守 明智座
 上 眞實の諫言はさすがに 老松
 △花車
 上 齋藤乳母 明智座
 ぞだて君に節義を盡す 三井寺
 △若女形之部
 大上 細川妻 羽柴座
 御器量といひ萬やさしき 女郎花
 上 御牧之方 明智座
 女の操を立通した 蟻通
 △口上

上 石田佐吉 羽柴座
 齋藤とのつめひらきに少し顔に 紅葉狩
 △馬役
 上 大鹿毛 明智座
 湖水を渡せし無雙の逸物昔の 藤戸
 上 膝栗毛 羽柴座
 一騎駈に汗水したも廣徳寺にて 落葉
 △道外
 上 淺野八郎右衛門 羽柴座
 坊主に成つて虎の口を通し 安宅
 上 入江長兵衛 同
 狐の仇も再度は 殺生石
 △總卷軸
 無類 羽柴秀吉 座 本
 御名は三國に轟 雷電
 藝に不出
 上 蒲生飛驒守 羽柴座
 上 妻木主計頭 明智座
 上 四方天又兵衛 同
 上 荒木山城守 同

上

明智次右衛門

同

風流眞顯記

△立役之部

卷首

中河瀨平

羽柴座

頭取「義を見てせざるは勇みなし」と、先中川氏の評に取掛り升、座中「齋藤や左馬助はどふするぞ、頭取」是にはいわくがござり升、左馬助殿、齋藤氏の高名は御存じの上で御座りますれど、山崎合戦芝居の一番當りは、中川氏でござりますれば、巻頭にすへました、中川組「尤じや〜」、早ふ評が聞たい、頭取「清秀殿は、はじめ攝州荒木座に勤め居られました節、三好座ととり合のとき、三好の旗大將和田伊賀守荒事の名人故、殊の外成働きに、荒木座も避易で御座りました所に、中河氏十七歳にて和田に近寄らんと、指物の旗に、和田伊賀守を討と文字を書いて、眞先に進まれた故、和田大に怒り、清秀に切つてかゝるを立合、書付の如く和田をうち取られし大當り、みな感心いたしました、夫より數度高名あり、荒木村重謀反の時より、小田座へ出勤、打續て當りをとる、茨木の城主となられしは、き

總目錄終

ついで御仕上げで御座り升、丹州にても、明智加勢にて働きありしに、此度明智の叛逆に小田座滅亡せん事を歎き、二ばんに尼崎へゆき、神部殿と心を合せ、弔合戦を催し、秀吉備中より馳上らるゝ所に、四王天かまりの危難故、廣徳寺へ逃入り坊主に成給ひし時、人は不難を賀せしに、清秀不審し、大將たる者難に逢ふとも、坊主に成べき事やある、行末頼母しからずと云しを、福島市松是を聞、名將なればこそ危難をまぬがれ給ひしなり、既に池田勝三郎は、座本小田公の追善のため、此度入道ありしならずや、わざにも入道あらん事なれば、さみするはひが事ならんと争ひし時、秀吉馬の口取とやつし、淺野八郎右衛門大儀也とて立出給へば、いま、で秀吉とみへしは、誠淺野八郎右衛門也、是にて諸士秀吉の明智を感じ、中河が不審せしはさる事なりと評判よく、山崎合戦に二陣を承り、先陣高山が木戸を明るやいな、高山に續かず、明智が右備藤田傳吉、諏訪、内藤、三牧、村上、伊勢等が陣にかかりし軍立と云、殊に小身故六百人を引率し、右備へ三千餘人にとり合、切崩された働き、言語に絶しました事、三牧勘兵衛を一鍵に突留、近寄者は人礫にし、自

身三十人きり伏、二百人餘に手を負せられ、終に山崎合戦の勝鬨は、中川氏より上られ、比類なき高名、夫故巻頭におきました、座中「其時高山に續き、齋藤殿とり合なら六ヶしかる、頭取」また合戦終りて、神部殿清秀の軍功を賞し、弔合戦は貴殿の戦功に寄ると稱美ありし時、後の方にて座本秀吉は、中川氏骨折々々と挨拶ありしに驚、筑前がはや天下を我物にしたる形勢也と申されけれども、ぬけめない御人、近日二のかわりの狂言は、けいせい賤が獄に極りましたれば、其節のは御手柄を待て居ります、

大上上吉

齋藤内藏助

明智座

頭取「亂邦には入らず、危邦には居らずと、利三殿は道三の甥にて、濃州齋藤座に出勤有て、武勇の聞へ高ふ御ざりましたが、故有て座本龍興滅亡の時より、稻葉一鐵齋のかたに身を寄せ居られしが、一鐵齋譚言を信じ、利三を追放せしより、光秀に隨身致されしを惜しみ、信長公へ内藏助が歸參を願はれしにより、信長明智に利三を歸すべきを申付らるれども、利三は光秀の仁心多きを感じて歸參せず、信長是を憤り、是より光秀を憎み初められしに付、光秀遺恨重り終に叛

逆し、本能寺と二條室町の城にて、信長父子を討參らせし也、もとはといへば、内藏助より起りし事故、無二の隨身成、室町の城攻の時、小田方齋藤長龍を討取り、丹州八上の城主と成居らるゝ、さて光秀山崎の芝居興行定り、相手は名にあふ秀吉なれば、羽柴座の先陣をきり崩は、味方諸役者の勇氣を増、必勝の大當りをとらんと考、備へを三ツに分け、中備は敵の先陣に當る物なればと、齋藤を中備の立ものに定めらる、利三五月十二日の曉、山崎にて備を堅め、目忍び出、かたきの備を斥候し見積り、洞が峠の筒井の陣を見定め立歸り、弟大八郎を呼、座本光秀の本陣へ遣し申さるるには、敵の地理を遠見仕るに、羽柴座は三萬計りとみへ、先手の三陣みな自國の戦ひなれば、地の理を得て、駈引小荷駄迄自由を得たり、當座は一萬に足らず、他國の働きの地の理に暗し、其上威に服せし寄合勢故、頼みとするに足らず、又筒井の備に裏きりの模様あり、此三ツ味方の失也、軍の詮議始終の勝こそ專要也、早く此場を捨て丹波へ引入り、谷徑を塞ぎ龜山に籠城有べし、若左なくんば、明智左馬助を呼寄、十郎左衛門と兩人の手勢を引て、坂本に籠城有べし、某は此

場に止り、屢し合戦仕らば、羽柴の勢ひくじけ内變生じ、味方する役者も有べし、此兩條に決し給へと申たる時、光秀嘲笑ひ聞入なければ、力なく駈歸りて斯と傳るに、利三悲涙し、惟任の運命今日に盡たり、三度諫めて聽れずば、退こそ君子の道、仕へて避ざるは士の道也、今一計を廻らし、こゝろよくうち死せん、我備五千人の内、千人を弟大八に分ち、柴田源左衛門と計り、彼が勢一千人とを合せ軍とし、筒井が裏切の時、不意に切崩すべしと申含め備を押し出したるは、後代の模範にて天晴の行狀也、是より羽柴の先陣高山鹽川と戦ひ、二度まで切崩し勝利を得、是角が勢に取合うち崩されしは、いらいてのない大立者じや、ひいき「光秀内藏助が諫言に隨ひなば、始終は知らず、急に敗北はあるまじ、残念々々、頭取」扱其内に中川が爲に右備へ崩れてより、大軍入亂れ敗走に及びし時、神部殿と立合、津田喜内兄弟を切捨、同又藏を人礫にし、松井新助、植榴兄弟其外十五人を討取、二十餘人に手を負せ、神部勢を追崩されしは、大刀打と云手も負ず、明智座の一人並ぶ者はない、座中「かほどの人が、筒井が裏切より光秀勝龍寺へ落られ、總敗軍と成

られしを見て、討死しられたら天晴といふべきに、一子伊豆守利光が手を負ざるを悦び、堺へ落しやり、其身も鎧兜を脱捨、淀川を渡り落行れた、命がおしひのか、大立者の仕打ではない、ひいき「それはそなたたちが知つた事ではない、利三が深い思案有ての事、座本の生死も知れざれば、其場を立退き、いかにもして秀吉に一太刀恨んど、悴利光にも是を申わたり、堅田迄落られたれど、運盡て生捕られたは是非もない事じや、頭取」成ほど晉の豫讓が如き忠臣、夫故秀吉の前にて、討死せなんだを口惜ふ思はれました、石田三成が齋藤に其儀を申されましたれば、汝が心に引競ての申し事、勇士の所存は知るまじとの論談、尤に思はれま、す、石田も少し赤面の體の處へ、秀吉立出、利害をこかれました故、悴伊豆守へ意恨におもはざるやうに書狀を遣し、秀吉の切腹申渡されしを用ひず、光秀同罪に行るべしと願ひ、刑罰の時詩歌の辭世、感心いたした、光秀に扶助の仁恵を受られしが其仁の不運、惜しい哉、天晴な立者、

上上吉 堀尾 茂助 羽柴座
堀 休太郎 羽柴座

座中「立者の池田や、先陣高山はここに置事じや、頭取の心得違ひと思はるゝ、頭取」御尤々々、山崎合戦の藝は、兩座とも何れ働きに愚は御ざりませぬ、評判の義は、立者陪臣旗本にかゝわらず、當りをとられしを先へ出し升、此段を御承知下さりませ、堀尾吉晴殿は、岩倉の城主小田が組下堀尾忠右衛門が一子にて、岩倉落城の時生年は六歳、父忠右衛門大勢に圍まれたるを見て、群る信長勢を切破り、父を救ひ立退たる大働き、其時秀吉が目に留り名を聞置れしが、秀吉齋藤攻の時間道を廻られしに、若者大なる猪を追廻し、手取になせし勇猛を感じ、立寄て尋問あり、茂助を郎等にせらる、是より秀吉に隨ひ、稻葉山の間道を案内し、城の一番乗して敵數多討取、其後十七歳より、數度の手柄ありしは御存知の事、此度山崎合戦に座本の下知をうけ、三百人を引連、十二日寅の刻に天王山の先陣致されしに、明智座よりも軍勢を上され、若先へ天王山をとり締め居るも知れずと、松明打消暗夜に押上られしに、案の如く明智座松田が勢、おめきて山へ登りかゝるに、取合居らるゝ時、堀休太郎殿も後より追付、兩人嚴敷戦ひ、松田が勢に鐵砲打掛打崩し、天

王山を取締、横矢の鹽合を見合せる時、又々溝尾置河一千餘人にて登り來るに取合、追落されしは天晴の働き、扱明智方の右備への中へ、横矢鐵砲を打かけし故、明智方敗軍と成、大役を仕り果られしは、御手柄々々々、若天王山を取られなば、勝色の中川が勝鬨を揚る事覺束なく、齋藤が手より勝鬨揚なば、羽柴方の負となりんに、羽柴の大當りは此手にあり、依て先座に置ました、堀秀政殿も同斷にて、堀尾に加勢し大に働き、松田太郎左衛門を鐵砲にて打留、高名有故、位の上下なく同座に置ました、座中堀氏は大津井出の濱にて、左馬助が二百人計りの僅な勢に、千五百人を以て取合切崩され、又盛返したる時、林半四郎一人に切立られ、關寺邊迄敗走有しは、見苦しい事であつた、頭取されごまたく盛返し、明智を取圍れしに、左馬助海に飛込落行、明智方一人も残らず討死し、堀氏勝鬨を上られ、直に坂本の先陣、御苦勞に存じます、坂本にて明智光俊との出合に、光俊が心を感じての應對、出來ました、一方の立者御手柄が有たればこそ、座本が大徳寺焼香を、家臣山口兵太夫迄に申渡されしにて、御働された事はわかつて御ざり升、

頭取御最負の清正殿、尾張の鍛冶五郎助の子にて、生れ立より容貌違ひ、豪傑の相なれば、秀吉幼き時より貫ひ育上げられしに、力量智勇無雙の者にて、前髪の時より譽有し、清正記に委しければ先差置、長濱にて木村又藏と井上大九郎及傷に及びしを、雙方を宥め連歸り、我食物を分て養ひ置き、秀吉に扶持米加増の上願はれし一件、若年なれど心懸のよき、末頼母しい若者哉と秀吉賞美あり、其後働きあまた有、備中にて毛利と取合の時、鳥取城攻に冠の城を責落し、秀吉に感狀を戴き、秀吉中國より一騎駈に登らるゝに、清正も後れ馳に跡を追ひ來りしが、秀吉かまり危難を遠目に見付走り來り、大勢を切ふせ、畑道へ一人追かけ來り、傍の深田に秀吉の乗馬うごめき居るを見て、四方を伺ひ居る所へ、四王天が秀吉をたづねかね、廣徳寺より出掛るを見付、走寄ての太刀打、終に四王天を組しき、秀吉の行衛を白狀させ、首を打落し廣徳寺へ駈行、秀吉の安否を悦びしは、忠勇揃ふた仕打でござります、扱山崎合戦には、羽柴の斥候役に戦場へはせ行、中川が手を見廻りしに、明智の右備へ伊勢與三

上上吉

加藤虎之助

羽柴座

郎が物頭近藤半助烈しく鐵砲組を下知し居るを、中川が戦ひの妨成と、敵陣にきり入近藤を討取、夫より高山爲計田平手等の備を見廻り、斥候注進の仕方のよき、諸軍勇みを付らるゝは、天晴々々、それ故陣中にて、座本自筆の感狀を給るは、今日の高名也、總じて斥候は一大事のものにて、一言を以て衆多を泰山の安きに置、少しにてもあやまつ時は、敗軍を引出すものにて大役也、中川が手は勝色にて、高山小勢なれども、能くとり合居候と申により、名將の秀吉なれば、早速是角に高山が後詰を申渡さるゝ、是により中備へ齋藤が手を持こたへ、終に勝軍の大當りを取たり、此時高山先陣敗軍の色ありと云は、諸勢勇み拔べき也、扱それより兩座の六陣入亂れし時、旗本勢も取合に掛り、清正大に働き、數十人討取られしは、若年なれども大出來々々々、旗本に御ざつた故、大將分を相手にいたされねば、見物が左程の働きとは思はぬが殘念、先陣に居られたら、拔群の御手柄が御ざりまじよ、二の替り賤ヶ嶽の狂言には、高名大當りを待て居り升、末頼母しく、日本はおろか唐土迄も、名を上られべき智仁勇揃ふた御人、御出世を待て居ります、ひ

いきこちの大明神、打ておけシヤン、

上上吉

齋藤伊豆守 明智座
齋藤大八郎 同

頭取伊豆守利光殿は、内藏助殿の御子ほど有て、此度中備の御働き、感心いたしました、軍亂れたる時、神部殿を討取らんと川端迄進まれた所へ、神部方野々垣彦之丞川へ打入、勇み切つて向ひしに、利光は彦之丞と馬上にて川中の取合、今日の軍の花にして、兩軍戦ひをやめ見物し居たり、兩人終に引組で川中へ落、水中にて野々垣が首を取、夫より神部が陣へきり入、矢部源藏、津田、松井、植榴兄弟、平手矢助、其外十五人をうち取、二十餘人に手を負せ、敵を切崩されし大當り、天神の所爲に見へました、其時神部方討死三百人、手負ひ五百人にて大敗北せしにより、父内藏助、伊豆守が手も負ざるを見て悦び、一ト先塚へ落べしと申された時、利光父を大に諫め、討死し給へ、我御供仕らんと勧められしは天晴な事、其時内藏助所存を打明し、暫く身を忍び、秀吉に「太刀恨むべし」と申付られし故、是に隨ひ塚へ落忍び居られしに、齋藤召捕られし、秀吉を恨むまじき利害の書狀を送られしよ

り浪人となり、齋藤立本と名を改、後に懇望により清正の臣と成、唐土までも名を上られしは、御手柄御手柄、扱大八殿は利三の弟にて、兄の云付を尤と思ひ、座中に利害の諫言いたされたれど、用ひなければ立歸り、此由を父に達し、一番に進み高名を顯はし、討死せんと勇まれしに、内藏助密計を申渡されしにより、柴田源左衛門とを合、都合二千人にて埋伏し、筒井が裏切の時不意に討て出、筒井勢二萬人を引受、三度迄追崩されし大働き、目を驚かしました、されども小勢なれば味方多く討死し、其身も二ヶ所手を負ひ、息つぎ居らるゝを、めの中西茂太夫、此間に引取給へと勧めしを、聞入し體にて、茂太夫敵の様子を見よとて、中西が脇をむく所を首打落し、亂髪を顔に覆ひ、中西が首引提げ、筒井が勢に紛れ込み、順慶を討て裏切を正んと、順慶に近付事弓杖三間ばかり、あはやとみるうち、島左近に見咎められて、左近殿と太刀打、烈しい事でござりました、されど百戦につかれし上、數ヶ所手を負ひ居られた故、左近が手に討取られたは残念々々、味方大勢ならば必勝ならんと評判いたしました、

上上吉 高山 右近 羽柴座
為計田 勝三郎 同

頭取先陣高山、三陣為計田、御兩所とも一方の立者、互角の御働き故同位にいたし升、高山長房は、小田座に勤められ數度働き有、高槻の城主となれしは、段々御出世で御ざり升、此度座本の弔合戦を催し、秀吉迎ひのため廣福寺迄出られ、かまり共を討取、山崎合戦は自國なればとて先陣となり、副將鹽川が勢を合して九百人、山崎へ勢を出し、南門をかたく閉て、味方の兵士といへども、合戦治る迄一人も通さず、是は為計田勝三郎と、尼崎にて先陣の争ひありし故、拔掛せられては口惜かるべしと、南門を閉られしは天晴で御ざり升、高山鹽川が南門を閉たるを、變心せしかとあやぶむものも御ざりましたれど、先陣の心がけは斯あるべき事、稱すべき儀じや、それ故為計田も、かねてぬけ掛して一番に戦はんとせられしかど、兵士を通されば、施すべき術も御ざらなんだ時、寅の申刻、高山長刀の鞘をはずし、床几に腰かけ居られし時、家臣甘利八郎太夫が過言せし無禮を見て、憎き過言免すまじとおもはれしが、大事の前の小事と眠

る如く居られしに、軍初まり甘利一番鍵をし、一番首二番首を取歸て、またく過言せしを、手柄々々と賞美せらる、夫士の直諫せるにも、漫に君の非を云はずと、甘利が詞誠に無禮也、しかれども其無禮をどがめて、我誤をかへりみざるは暗君なり、高山が今日の始末、良將の信を得たり、扱先陣なれば、齋藤が多勢に渡り合勵しい取合、よふこたへられました、座中、相手がゑらい故、敗走の體はあまり出来とはいはれぬ、座中「されば當りの敵は、名にあふ齋藤を旗頭とし、磯野、阿口、後藤、多賀、鳥山、久徳等が勢三千餘人、高山は鹽川が勢を合して九百餘人、三分一の小勢なるに、齋藤が勇獅子の怒りにまた勝りたれば、高山が備し、みて敗軍の色顯はれしは、全光秀備配りの切立、兵術の委が致所也、陣を三備に分、勇將齋藤を以、羽柴が先陣に向ふ時、右左の備一同に進み、只一疊に切しかんとす、依て羽柴座二陣中川、三陣為計田、左右の備に向ひ、先陣を切崩さば、味方勇みて勝利を得べき、光秀の陣立手段の仕業也、此故に斯は成たり、秀吉斥候を以是を伺ひ、是角に後詰を云付たる故、是角高山に入代り戦ふ、其内に中川が手より勝鬨をあげ、大當

りとなりたり、高山此藝に小勢を以てよく持こたへられましたは、御手柄と申もの、大徳寺焼香に、軍功第一ばんに定りましたれば、是にて一方の立者にて、役まへを能勤められたがわかります、扱為計田信照殿は、信長いまだ小芝居の座本の時より、小田座に出動あり、軍功多く、桶狭間合戦の時、柴田勝家と俱に一方を受取手柄あり、中國攻の時由良の城を攻取、其外高名あまた御ざり升、此度信長明智が爲に討れ給ひしより、入道し勝入と名を改め、尼崎にて高山と先陣を争ひ、高山先陣に定りしを口惜思ひ、三陣に進みながら、川傳ひに明智座の左備へ津田村上が二千五百人を目がけ、味方三千人との取合、目覺しい事、座中、其時津田與三郎采配取て、今日の軍に打負て誰に面を合さん、死ねや者共とて、渡邊源左衛門、志水嘉兵衛、其外丹波勢七百餘人、命を捨て戦ふ程に、為計田是に當り兼、四途路に成て追まぐられたは、不出來々々々、頭取「夫は一概の評と申もの、明智座にも大切の左備なれば、武勇にぶき人を旗頭にはいたしませぬ、左り備への人々みな立者計り、命を捨て、の戦ひなれば、亂れんとせしは有うちの事、始終を見て勝

負の評致さねばならぬ、老人雑話には、中川が手と爲計田が手にて、明智亂軍と成しと書て御ざります、去ほごに爲計田、味方亂るゝをみて、家臣片桐半左衛門、伊木清兵衛、秋田嘉兵衛、梶浦直七、武村小平太、片桐與七郎など味方を勵まし、きたなき者の振舞や、右大臣の弔合戦、うち死して信長公御供せよやと、勇を奮つて切て廻るにより、總勢盛返して戦ひ、互角の合戦となりしに、此時高山、是角は、既に敗軍の色を顯はすといへども、爲計田は勝負をわかつたず、中川が手勝負を得、終に明智座敗軍となり、爲計田大に勝利を得られましたは、御手柄々々々、夫故大徳寺にて、軍功第二の焼香いたされ、家臣片桐伊木までも、陪臣ながら焼香仰付られました軍功はきつともへ升、ごうでも小田座の古老一方の大立者々々々、

上上吉 島 左 近 羽柴座

頭取「久吉尼崎へ着し、弔合戦に志あらん輩は、尼崎へ參集有べき旨觸られたる時、左近主水順慶へ申は、此度の戦ひは天下分目なれば、洞ヶ峠へ勢を出し置、光秀へ使者を遣し、裏切有て功を取、家の榮を得給へと勧めしは、亂世の中なれば、筒井家繁昌の爲忠臣と

云つべし、座中「夫故に日和見の順慶と異名取られしは、此戦に討死せらるゝより、末世に傳へ大成恥辱じや、頭取「夫には様子のある事で、丸で日和見たることも申されぬ事が御座る、委しい事は繪本太閤記に書て御ざれば、先さし置、島左近順慶が名代として尼崎へ行、順慶病中なれ共、弔合戦のため洞ヶ峠へ軍勢を出し、裏切仕らんと存るゆへ、某名代として參上するよしを申さるれば、久吉大ひに笑ひ、順慶が心は、洞ヶ峠へ軍勢を出し置しは、運を兩端にかけ、色悪しき方を裏切せんと工み、是汝計略あらんと申された時、左近色をも變せず、久吉公は無雙の名將と承りしに、見ると聞とは大に違ふ、此度光秀使を以て招くといへども、無道を憎み取あはず、専弔合戦を志の有順慶、假令運を兩端に懸ることも、斯某を名代としてさし越、味方して裏切仕らんと申さば、悦び給ひて諸軍に觸知らし給は、勇となるは必定ならん、順慶不肖なれども、一萬餘の軍勢有れば、光秀一味に心を定めなれば、久吉にも少しは妨と成申さん、斯宣ふこそ僻事ならんと申されたれば、久吉大ひに感じ、流石の左近よく云たり、汝立歸りて指揮すべし、此度の軍配汝に有

迎、手自ら白柄の長刀を給ふ、當座の面目、一言を以筒井の大功をなす事、天晴御手柄で御座る、さて合戦始り、明智方旗色靡くを見るより、洞ヶ峠の勢を繰出し、光秀の本陣へ裏切せんと進み出るを、まち儲たる齋藤、柴田の埋伏勢切て出、筒井が先手と戦ひしに、小勢なれば明智方大ひにみだれ、齋藤大八は筒井勢に紛れ込、順慶を討んと近付事、弓杖十丈計り、左近見答、汝は齋藤大八と見しは非が目か、出勝負ござんなれと、久吉の給はつたる長刀追取て立合、終に大八を討取、齋藤、柴田が勢を淀川迄追討し、首六百餘級筒井方へ得られしは、御働き高名々々、それ故秀吉感狀給はり、陪臣ながら大徳寺の焼香仰付られしは、御手柄御手柄、藝は奥が知れぬ仕打、行末がおもひやられ

上上吉 林 半 四 郎 明智座
泰 桐 若 羽柴座

頭取「林氏は明智左馬助の郎等にて、丹州保月の城攻の時、城將赤井悪右衛門無雙の勇猛にて、明智勢を打崩し、一人にて妻木主計頭、三牧三右衛門、比企田帶刀、溝尾庄兵衛、櫻井などの大勢を相手にきり結び、中々

手に合ひませなんだを、林半四郎渡り合、赤井を討取られしは高名、是より明智勢勝利を得、城を乗取られ御手柄々々々、扱此度山崎芝居興行故、左馬助出勤せんと寄勢を退散させ、手勢七百人連て登られしにみな落行、大津にては百五十人計りに成しに、打出の濱にて堀休太郎が千五百の勢に出合、戦はじまれば、林一番にすゝみ大に働き、堀勢を打崩されしに、息繼間もなく堀勢盛返したる時、味方僅に七十人になりたり、左馬助誰か向ひて我馬前にて働きを見すべき者や有と申されしに、林一人進出、いまだ生残り居候、光秀の弔軍は斯こそする物也と、手負ながら七尺計りの野太刀を打振り、堀が大勢に渡り合、阿修羅の荒たる勢ひにて、數十人を討取、林一人にて堀が勢を關寺邊まで追崩され、死人の山を築れしは、唐土三國の時、魏の曹操が臣典韋と云者の勇も、林が行状には過べからずと、敵味方目を驚したる大評判、荒事仕の一番、山崎にて芝居の取合あらば、きつい座本の助ならんと、是計りが残念々々、

○泰桐若殿は黒田の郎等、尼崎にて久吉危難の時駆付、かまりの大勢切伏られし働き、山崎にて明智方亂

軍と成入亂れし時、藤田藤藏、同傳兵衛、溝尾五郎左衛門、奥田市助を始め八十八人を討取られし大働き、目覺しい當りを取、林に負ぬ眞柴座のあら事仕、大評判を取られました、此時手を負ひし故、有馬へ入湯致され、快氣いたされし故、湯の徳を感じ、入湯してさへかほごの能あれば、飲ば格別即功あらんと、湯を呑れた故、疵口再發し死去致されしは、若年故愈忽で御ざり升、此人死去を主人黒田の歎き、眞柴座一統殘念がりました、

是角五郎左衛門 羽柴座

上上書

同

黒田勘兵衛

同

頭取、是角殿は、小田座小芝居の比より出勤ありて、段御出精、此人の藝の仕打、我一人當りを取ふとせず、座中一統の勝利を得ん事を専らとせらるゝ故、關三十郎と同事で、おくれを取た事もなく、格別の大當りも取られませなんだ、されど掛引功者にて武勇の人故、座本へはきつい功のある御人、此度光秀叛逆、信長父子生害ありと聞、早速弔合戦を催し、小田七兵衛信澄は明智の智なれば、手先に有ては妨なりと、神部殿へ内意を談じ、信澄をすかし呼寄討取、信澄が大

坂の居城を計略を以取られし働き、御功者の仕打、さすが小田座の老臣じやと、評判がよふ御ざります、山崎の芝居にて高山に替り、かちほこつたる齋藤が大軍に取合、殊の外なる御働き、浮足には見へましたれど、終に持こたへられたは勳功で御ざり升、夫故大徳寺にて、家臣丸毛喜三郎迄焼香勤められました、言分のなひ古立者々々、

○黒田氏は秀吉の幕下にて、所々に御働き多く、秀吉此度弔合戦の爲に、一騎駈に中國より登られし時、家臣後藤又兵衛が遠智を尤と感じ、群に秀て秀吉に追付んと馳られしに、廣徳寺にて明智座のかまきごもを討取られし手柄により、後に大立者に立身ありしは、偏に日比より御働のよき故也、山崎の芝居にて、兩軍入亂れたる時大に働き有、黒田が手へ討取首夥しく、當りを取られしは、其身がよひ故、御家來は皆豪傑で、役者中が羨しく思ふて居り升、

上上書 淺野彌平 羽柴座

頭取、彌平殿は尾州淺野村百姓彌左衛門が子にて、幼少より武術を好み、父死してより信長の臣藤井又右衛門が伯父なれば、藤井方に養はれ居しに、思はざる

犬山一揆の時、一揆の百姓を數多うち取、木下藤吉に手寄、木下が組下となり、所々の芝居に働き多く、備前峰濱の戦に浮田勢を助け、横鎧を入れ勝鬨を揚、鳥取の城攻の時、大筒にて毛利の糧船を打崩き、敵船を追退け、何國でも請よく、此度山崎合戦に、山手のつなぎ加勢に行、明智座松田が後詰並河掃部、溝尾庄兵衛が勢に當り、敵を堀尾に取合させて、早く備を取替、明智が右備への中へ、鐵砲五百挺を打掛けしにより、明智座四途路に成所を、中河勢大に勇戦し討破りし故、明智座敗軍となり、中河勝鬨を揚たり、淺野氏がすばやき仕打により、眞柴座の大當りを取られしは、御手柄々々、軍終りて京都に馳登らるゝ時、洛中大に騒動せしに、淺野氏大聲に、逆臣光秀を山崎にて、秀吉討取靜謐に成給ふ、汝等安堵し靜るべしと、乘廻しての治めかた、よふできました、大立者にならるゝに間はあるまい、

後藤又兵衛 羽柴座
中河小右衛門 同
中河淵之助 同
頭取、後藤基次殿は黒田の臣にて、十六歳より諸國武

士修行に出られ、今年廿二歳にて立歸りしに、黒田氏秀吉に隨ひ、中國に進發に付行し處、此度弔合戦の爲に、秀吉中國を引拂ひ、一騎駈に登らるゝに付、黒田は後備をなし後に續く、此時基次黒田に云様は、此度の大變に、秀吉一騎駈に登らる事心もとなし、西宮邊より敵地にちかければ、明智いか成謀計をかまへ置んも量りがたし、名將にも一失有て、敵に心せきて足元に敵有を心付給はぬは、鹿を追ふ獵師は山を見ずとのたとへ也、主人騎馬の士計り急に追付、危難を避給へと諫ければ、黒田實にも心付、騎馬の良士を選み、五十騎韋駄天の如く馳出し、秀吉の跡を慕はるる、後藤が遠智の如く、廣徳寺にてかまきごの大勢、秀吉を追取卷、危難に逼りしを遠目に見付、息を切つて駈付、かまきごをきりふせ、突崩されしにより、其功を賞し、秀吉過分の領知を給りたるは、偏に後藤が遠智による所、其時も大に働き、敵餘多切伏られしは、遠智といひ武術といひ、御年若なに恐ろしい御器量、行末は大立者になられましよ、扱山崎合戦にては、亂軍と成し時、桐若と同じく大に働き、柳瀬剛太夫を討取、其外多人數を討取られましたれど、大將分の取

合がなかつた故、御見物が御高名を御存知御ざりませぬ、二の替り賤ヶ嶽の御仕打を待て居り升、
 ○中河小右衛門殿は、中河氏の臣にて武勇の御人、山崎の芝居にては、幕明に明智が右備へ藤田傳吾が勢に當り大に働き、二度目は村上が勢と立合居しに、天王山より眞柴勢、鐵砲を右備への中へ打かけしにより、備へしられたるを、得たりとおめき切て入り切り崩し、亂軍と成たる時、明智が旗大將伊勢與三郎と戦ひ、伊勢が首をうち取られしは適の高名、御働きが抜群故、大徳寺にて陪臣なれども、焼香被三仰付たは、御手柄々々々、

○中河淵之助殿は清秀の弟にて、小右衛門と同じく大に働き、明智の旗頭三牧三右衛門と渡り合、一鑓に突ふせ首を取、其外數十人を討取られしは、小右衛門殿同斷御働き、高名に甲乙なければ、同位におきました、座中「此御兩人は、明智座の立者達を仕留られし高名に合しては、位付が氣に入らぬ、頭取」夫には意味も御ざり升故、褒美をつけました、

上上

甘利八郎太夫

羽柴座

頭取「甘利氏は高山家の徒士にて、少しかたむくの

御生質故、常に右近殿の寵遇うすく、末座に勤められましたたが、山崎の芝居の時、合戦の三番叟はじまらんとする前に、甘利氏高山がまへに跪き申されるやう、爰に兩義の決しがたき事あり、乍憚君の判決を承りたし、君勇智の名有役者あれば、遠國他家を云ず、傳をもとめて招寄、高給金を賜り、恩顧のまことうすからず、況や譜代相傳の家の子は、君の城壁とも相成べきものと御覽つけられ候は、人並の御詞もかけられ候べし、某に於ては人数ならぬ侍に捨おかるは、左のみ御用にも立まじきと思召によりて也、しかるに某今敵を切り陣を破り、只今の合戦に御用を立候は、かねての御目がねに違ひ是不忠なるべし、又懸るにおくれ、引に先き達、臆病をかまへ候は、武士の名を失ひ、先祖を汚し候事不孝也、是不忠と不孝との罪二つの物、いづれか重く候はんと、案じ煩ひ候と申さるゝに、高山尻目に見て、悪き過言ゆるすまじと、搔込みし薙刀動くとみへしが、大事の前の小事と敢て應せず、早東雲明發れ、敵合近くなれば、右近人数を繰出し、北方の先陣齋藤内藏助ととり合、鐵砲を打掛る時、甘利鎗引提げ、高山が馬前に大音あげ、た

とへ不忠の罪ありとも、拾ひ首にても仕り、手をふさぎ申さば、させる御憎みも有まじきが、怯弱不孝の罪は補ひがたしといひ捨て、鐵砲の後に付、藥烟の中より敵陣に切て入、高山家の一番鑓と名乗、齋藤が物頭金橋茂太夫を討取、其弟金橋次郎兵衛首をもうち取、高山が前に馳戻り、迎も不忠を致す上はと、一番首二番首も仕たりと申されたるは、いさましい御手柄御手柄、座中「高山愚將ならば、甘利が過言の時手討にならうやうに、あぶない事、頭取」何角はさし置、此度の一番鑓大出来々々々、おい、御出世をなさるるで御座りませう、

上上

明石儀太夫

明智座

頭取「明石氏は座本の密計に随ひ、百姓の體にやつし、攝州尼崎邊にかまりと成、手勢七十餘人みな一様に出立、秀吉の中國より登らるゝを待所に、光秀の推量の如く、秀吉一騎駈に馳登らるゝを、追取詰て討んとせしに、秀吉は廣徳寺へ逃行るゝに、續いて追掛んとするを、四王天が秀吉は我が手取にせん、貴殿は秀吉に續く勢に當り給へと申されし故、秀吉危難を救ん

と駈寄る黒田勢と渡り合戦ひしが、敵は騎馬武者計り、五十騎にて駈立れば、歩立の味方、あしらいがたく難戦となる、其上迎ひの勢、高山中河に引つゝ、まれ、味方みな討死したれば、儀太夫は口に切腹、秀吉は如何成し哉と、廣徳寺の方へ馳行見るに、四王天討れ居れば、其處にて自害せんと思ひしに、いや、座本の遠計仕損じたれば、此事知らさずば計略の用意違ふべしと、赤裸に成泥まぶれと成、恥を捨て光秀の居らるゝ淀の城に逃歸り、座本の圖に當りたる計略仕損じたれば、早く秀吉を討御工夫有べし、此趣き注進仕る者なければ、御計議違はんと恥を捨立歸りたり、早お暇給はらんと切腹せんとせしを、光秀是を止め、能うこそ注進しつるもの哉、多勢を切抜しは手柄なり、生はかたく死は安し、決して自害致すべからず、心を安んじ休すべしと申されたれども、密計を仕損じたるを口惜おもひ、武士の數に入口の身となればおしまざりけり夏の夜の月、と辭世し切腹せられたるは、義と云勇と云、天晴の仕打で御ざります、座中「いさぎよい切腹なれど、眞の義臣ならば此時切腹せず、生死を光秀と一所にして、山崎合戦に座本の片腕

となられたらよいに、一人にても味方はしき軍前に、切腹はちと了簡が違ふ、頭取、勇士のならひ、大切の役を仕損じたれば、立歸りて座本に面を合さるゝ所ではなければ、恥を捨ての注進は義に凝たる故、大事の注進濟みたれば、光秀の諫を用ひず、切腹は尤成仕打、生延て山崎にて、今一いき成仕うちが自然出來まい物でもない、義者は箇様に有たき物、夫故光秀も殊の外残念がり、埋葬念比に致されました、あつたら役者でござります、

○扱藤田傳吾殿は、二條室町の城攻に大に働き、此度山崎にては、右備への旗大將にて、村上諏訪三牧伊勢等が勢を合せて三千餘人、羽柴座の中河氏と立合、殊の外の働き御ざりましたに、天王山より打下す鐵砲に、味方四途路に成、三牧兄弟伊勢など、みな中河が手に討死し、亂軍と成しにも猶退かず、蜂谷助右衛門を追ひ靡け、神部の士大將峯美濃守、平田壹岐守杯が攻來りしにあたり戦ふ所へ、國分佐渡守が三百餘騎にて、横鎗にかゝる故、又是に渡り合切崩せしかども、敵は大勢故終に敗亂となりしが、光秀の勝龍寺の城へ落行れし時も、大に働き居られしに、額に疵を蒙

り、血眼へ入て働き自由ならず、討死せんとあるを、郎等が諫て、馬の口を引立て引退くを、藤田大に怒り、敵に後を見する事やある、戰場へ連行討死させよと申さるゝを、郎等は主の目の見へぬを幸ひに、戰場はこなたなりとすかして、淀川迄落のび船に乗ければ、藤田はがみをなして大に怒り、勝龍寺の様子を問ふに、三宅藤兵衛自害し落城せしと聞、今は心易しと、船中にて自害せられしは、明智座一方の立者程有て、感心な御仕打で御ざります、

上上 明智十郎左衛門 明智座
溝尾庄兵衛 同

頭取、明智十郎左衛門は、丹州所々にて御働きあり、二條室町の城攻の時は、信長の末子小田源三郎を討高名し、座本の股口の臣なれば、山崎にては中備へ齋藤が手にありて大に働き、是角を追崩されしは、目覺し一事、亂軍となりてより、いかにも秀吉を討んと、死人となり居らるゝ所へ、秀吉首實檢せんと芝居にかゝられしに、乗馬進ざる故不審し、死人の中に敵の紛れ者あるべし、吟味せよとの下知に従ひ、旗本の人人鎗を以て、死人を一々突廻り心見る時、十郎左衛門

が頭を、平野權平突たれども身動もせず、死人に成て居らるゝ、仕打、手しぶ事、人々行過たる時、むくむくと起上り、秀吉目がけて切てかゝる、座中の後にありし片桐助作が放つ矢に、急所を射られ、終に片桐に討れたる幕ぎりの目覺し、運の盡なれど、志は天晴手丈夫々々々、

○溝尾氏は座本の郎等にて、江州攻に働きあり、丹州にては過部の城攻に、敵の來る道に埋伏し、後詰勢宇津の城主宇津右近大夫を討取し高名は、御手柄御手柄、其外丹州又は二條室町の城攻にも、殊の外御働き有、此度山崎にては座本に居られしが、座本の下知に隨ひ、天王山の加勢として、並河掃部之助と諸共馳行、堀尾が勢に渡り合、はげしき働きありしか共、山上と山下と違ひ、敵を笠に着ての戦ひなれば自由を得ず、其上羽柴が加勢淺野、生駒、山内、竹中、大谷杯の大勢に、横を討れ敗軍と成、本陣へ歸る時、早筒井が裏切に總敗亂となり、座本に附従ひ勝龍寺へ立退き、また坂本へ落行んと小栗栖迄來りしに、一揆起りて落人を討取らんとする處、溝尾是と戦ひ追ちらしたりしが、光秀は百姓長兵衛が爲に竹鎗にて突れ、今

は一足も引がたしと切腹せられし故、溝尾則介錯し、首を藪際に埋み隠し、切腹せられしは、忠義全き仕打、明智十郎左衛門につけられませぬ、夫故組合に致しました、

神部 三七 羽柴座
鹽川伯耆守 同
津田與三郎 明智座

頭取、三七信孝殿は、小田信長殿の二男にて、信長勢州攻の時、神部友盛と和睦し、三七殿を養子に致されしによりて、神部氏を名乗相續有、今年信長中國征討のため、信孝殿も召寄られ、三七尼崎迄進發せられしに、本能寺の大變を聞、即時に弔合戦を興行せんと、爲計多、中河、高山、是角、鹽川等と會し、先手先の小田七兵衛信澄は明智が智なれば、計略を以て討取べしとて、信澄を呼寄討取られしは、大出來々々々、扱秀吉の歸坂を待、秀吉に總大將を讓る、山崎にては是角が備へにつゞき、敵の三方の備に當り、味方の三方を扶助せられし故、終に勝利となり、父の仇を報せられしは御手柄々々々、座中、信長の太變を聞、弔合戦を催し信澄を討れしは、上出來なれど、早速京都へ打て登

り、光秀と戦れたらば、勝負は兎もあれあつばれと云べきに、秀吉の歸坂をまち、總大將を秀吉に譲られしは御器量がない、又山崎にて是角に續き、扶助はよけれど、何見付らるゝ事もなきに、籠をたゞき関の聲を上られしは何事ぞや、是角もこれには迷惑がられたと見へます、亂軍となりし時、齋藤内藏之助が勢ととり合、大敗軍とは見とむない事であつた、頭取、秀吉に采配を譲られしは、やつし形の仕打で、相手が實惡の明智故、大事の芝居の事なれば、塲數功者にあらざれば、勤りがたふおもはれまはしたは尤の事、亂軍の取合に、藤田傳吾が蜂谷を追なびけたりしを、神部が幕下午田壹岐守、峯美濃守、國分佐渡守など大に働き、終に藤田敗亂となりしは、山崎の功はきつと御ざり升、秀吉弔合戦は了簡有ても、此四人が有故、諸大名が多馳集りし事なれば、何はさし置、兄信雄殿にくらぶれば功のある立者々々、座中「軍靜りて信孝、中河瀬平が手をとり、此度弔合戦は貴殿の懇切によると、涙を流し挨拶有しは、立者の仕打ではないぞ、頭取、夫は六ヶ敷弔合戦なるに、中川が手より勝鬨をあげ、僅二時ほどの戦に軍平定したる故、親の敵を討たる悦び

の餘りと見え升、
 ○扱鹽川氏は、攝州多田の城主なれば、自國故高山が副將となり、我が兵と高山が勢と合して四百餘人、明智座の中備齋藤、磯野、久徳、鳥山、多賀、阿閉、後藤等が三千餘の勢と戦ひ、さへられし段は、高山の所に評御座ります故申ませぬ、誠に高山におとらぬ御骨折、大徳寺にて軍功第四の焼香いたさる、家臣鹽川吉太夫迄焼香仰付られたにて、軍功はわかかつて居ます、一方の立者だけの仕打はあるぞ、
 ○津田與三郎は、小田信澄の家老にて、信澄を尼崎より招かるゝ時、諫言せられしを聞入れず、信澄尼崎にて亡びたれば、早速手勢を引て明智が淀の城にはせ行、此度山崎にては、左備の旗大將となり、村上、山本、進士、伊勢、松原、上野等が勢を合して二千五百人、羽柴が三陣、爲計田が三千餘人との取合、目覺しい事見覺しい事、其時津田采配取て、今日打負て誰に面を合さん、死ねやものごととて、傍輩なる渡邊源左衛門、志水嘉兵衛などはげしく下知し、丹波勢七百餘人命を捨て戦ひ、大敵の爲計多勢を、二町餘り追まくられしは、大手柄々々々、爲計多がた片桐、伊木が輩大

に怒り、諸勢をはげましもりかへし、是より互角の戦ひとなりしに、此時右備へ藤田、村上、既に敗軍の色を顯はすといへども、津田が備は勝負を分たず、大敵をくひとめ居らるゝは、明智座の立ものほど有てきついで御出来、されど中川が手より明智方崩され、總敗軍と成し故、此手もうしろ崩れとなり、終に亂軍に討死の幕ざり、残り多い事、

片桐半左衛門 羽柴座
 上上 片桐 助 作 同

頭取、片桐半左衛門殿は爲計田が家臣にて、軍功の多い御人、桶狭間合戦に今川が大敵を引受くいとめ、今川の旗大將富永伯耆守を鐵砲にて打取、江州森山攻にも大に働きあり、城將種村が勇を奮ふて切て廻るを、種村が馬の足を切落し、主人爲計田に種村が首をとらせし手柄、爲計田家の立者と評判よく、此度山崎にて明智座の左備村上が手に、味方切崩され四途路に成たるを、片桐味方を勵し、きたなきものゝ行状や、右大臣弔合戦にうち死して、信長公の御供せよと、勇を奮ふて切て廻られし故、總勢是に機を得てもり返し、互角の戦ひとなり、終に爲計田が手へ、大將津

田、いせ、杉原、伊藤、庄田、松本、上野等を討取、勝利を得られしは、御手柄々々々、夫故陪臣なれど、爲計田家には片桐、伊木兩人、大徳寺にて焼香仰付られしは、後代の規矩、頼母しい御人じや、
 ○片桐助作殿は、秀吉の腹心の郎等にて、智勇兼備の人にて、所々に働有、此度山崎にては、座本の旗本を去らず居られし故、さしたる高名もなければ、此人の性は、すゝむ時にはすゝみ、ひかへる時には動かぬ人故、諸勢みなく、戦場に行たれば、座本の傍無人なれば、始終秀吉の傍に居られしに、秀吉首實檢せんぞ、芝居にかゝらるゝ時、乗馬いなきてすゝます、是死人の内に紛れ込者有るべしと吟味ありしかば、明智十郎左衛門秀吉に追付、既に危かりしを、助作弓おつ取て、明智を一矢に射殺し、首を取て危難を救ひし手柄あり、奥のある仕打、末頼母しい御人、二のかわり賤ヶ嶽の御當りを待て居ます、

三宅 藤 兵 衛 明智座
 上上 稻次 萬次郎 同

頭取、三宅氏は勝龍寺の城を守居られしに、山崎總敗軍に付、座本光秀勝龍寺の城へ落來、爰にて大軍を引